

ECONO FORUM 21

No.23
March 2017



特集

変革期の
大学教育

ECONO FORUM 21

2005年、エコノフォーラムは『エコノフォーラム21』という名前に変わりました。

エコノフォーラムは、もともとゼミを中心とする経済学部の活性化の「広場」でした。しかし、10年を経て、わたしたちは21世紀の世界経済と日本社会をもっと確実な「目」で捉え、経済学部から新鮮な発想で社会に向けて提言できれば、と考えるようになりました。『エコノフォーラム21』は新たな世紀にふさわしく、学生と教員、さらには一般市民をも巻き込んで様々な声が響き合う広場を目指します。

No.23 March 2017 CONTENTS:

- 2 巻頭言／田中敦
- 3 **特集1 変革期にある大学教育**
大学教育改革における中国語教員の取り組み／田禾
グローバル化と経済学部／藤原憲二
大学入試制度の多様化が高等教育を劣化させている／西村和雄
これからの日本を支えること、みなさんが大学で学ぶこと／柳原光芳
- 14 **特集2 在外研究レポート**
現場での半年間／藤井和夫
日々の暮らしと研究～テロと分裂と出会いと～／栗田匡相
UCSDにおける研究活動／大洞公平
- 20 **エコノフォーラム座談会**
「これからの大学教育：学生と教職員の視点」
- 32 **シリーズチャペル<経済と人間>**
井口泰・藤井英次・田畑頭・國枝卓真・久保真・桑原秀史・松枝法道・秋吉史夫・上村敏之・利光強・本郷亮
- 43 **シリーズチャペル<人間を考える>**
舟木讓・大高博美・中川慎二・田禾・山田仁・韓燕麗・長谷川哲子・岡田敏裕
- 51 **チャペル講話 卒業生を覚えて**
すべてを見られてしまう時代？／田中敦
- 52 **退任教授最終チャペル講話**
関学の風に吹かれて／根岸紳
経済学のすすめ／松本有一
インプットあってこそそのアウトプット／平山健二郎
- 58 **基礎演習：論文一覧**
- 70 **研究演習Ⅱ：ゼミの総括と卒業論文一覧**
- 85 **経済学部懸賞論文**
- 86 **編集後記**

ネット時代の申し子たちでも……

経済学部長 田中 敦

私の誕生日は、ゼミでは機密事項です。以前は気軽に教えていたのですが、私の誕生日を祝わなければいけないと思っているゼミ生がいることが分かり、ちょっとショックでした。ちょうどゼミが1学年飛んで、先輩後輩間での情報の行き来が少なくなったのをこれ幸いと、下の学年のゼミ生には誕生日を聞かれても答えませんでした。

その学年が企画した飲み会が、たまたま私の誕生日に設定されました。もちろん、私はそんなことをおくびにも出さずに、飲み会に出席していました。すると、途中でみんながハッピーバースデーを歌い始めました。せっかくナイショにしていたのに、嬉しいやら悲しいやら……

どうして私の誕生日が分かったのか幹事に聞いてみたら、ネットで調べたそうです。あとで私もネット検索しましたが、広大なネットの世界から自分の誕生日を見つけることはできませんでした。恐るべし、ネット時代の申し子たち。

若い人たちのネット検索の技には驚かされますが、それだけでは必要な情報にたどり着くことはできません。検索の前に、何が必要な情報なのかを考えなければなりません。つまり、ゼミ生は私の誕生日を調べる前に、私の誕生日を調べようと思わないと何も始まらないのです。

実はこれは、情報が溢れているネット時代特有の問題ではありません。印刷物が情報の中心で、今より情報が少なかった時代でも、知りたい情報が何かが分からなくては探しようがありません。今は探し方が大きく変わりましたが、検索技術にたけたネット時代の申し子たちでも、まずは探すべき情報が何かを思いつく必要があるのです。

飲み会企画でも、ゼミの研究でも、ビジネスのプロジェクトでも、調べたり考えたりして結論や具体策・解決策を導き出す前に、まず課題が何かを発見する必要があります。ゼミでの研究で言うと、何をテーマに選ぶのか、そのテーマを取り上げた問題意識は何かがとても重要で、それが研究成果を大きく左右します。ビジネスの世界でも、得てして課

題解決能力以上に課題発見能力が重視されることがあるようです。

課題を発見するには、その分野について十分な知識をもち、考えるためのツールを備えた上で、批判的に考えることが必要



です。経済学部では、経済を中心に知識を得て、考えるツールとなる経済学を学んでもらっています。さらに、批判的に考える機会もいろいろなところで提供されています。

とくに、ゼミは学生が自ら調べて批判的に考えることを実践する大切な機会です。経済学部では伝統的にゼミ教育を重視してきており、基礎演習や研究演習でそのような実践を通して課題発見能力の涵養に力を入れております。ゼミの中だけでなく他のゼミや教員の異なった考え方に触れることも重要で、多くのゼミが参加するインターゼミナール大会を毎年開催しています。しかも、この大会はエコゼミ委員会という有志の学生たちで企画運営されていて、充実した大会となるための課題を彼らが自ら発見し、改善に努めてもらっています。

この『エコノフォーラム21』は、そのエコゼミ委員会と教員との共同編集で発行されています。本号にも、今年度のインターゼミナール大会などのゼミ活動が記録されていますし、座談会やチャペル講話なども収められています。エコゼミ委員会編集ページでは、研究演習を紹介する記事をはじめとして、学生に関心のあるトピックを扱う充実した内容となっています。発行にご尽力いただいた方々に感謝するとともに、多くの皆さんに楽しんで読んでいただけることを願っております。

特集1

変革期にある。大学教育

現在、わが国の大学を取り巻く環境は急速に変わりつつあります。18才人口の減少により、すでに「大学全入時代」（大学の入学定員総数が入学志願者総数を上

回るため、大学を選びさえしなければ、ほぼ志願者全員が大学に入学できる時代）に突入したとはいえ、ここ数年間は幸い18才人口がかなり安定していました。ところが2018年度以降は、その持続的減少が再び始まります。これがいわゆる「2018年問題」であり、いよいよ大学の淘汰が本格化すると言われています。国公立大学も含めて100校ぐらい破綻しても不思議ではないという意見もあり、大学世界にとっては、まさに乱世の到来と言えるでしょう！

当然ながら、そのような状況下では、大学はさまざまな意味で変わらざるをえない、あるいは変わらなければ生き残れません。

加えて、本学は文部科学省の「スーパーグローバル大学」に選ばれていますから、そのための改革も着実に進めなければなりません。他にも課題は山積です。

このような社会変動に、わが関西学院大学経済学部は、どのように立ち向かってゆけばよいのでしょうか。私たちの学部の「伝統」と大学教育の「本質」を堅持しながら、具体的にどうすれば、これからの厳しい時代のなかで、私たちはさらに光り輝くことができるのでしょうか。今回の特集では、この大きな問題を多面的に考えてゆきます。さまざまな意見があるかと思いますが、私個人としては、この特集がきっかけとなり、今後の議論が一層深まってゆくことを願っています。

（編集担当…本郷亮）

大学教育改革における 中国語教員の取り組み

田 禾 教授（人文科学・中国語学）

時代の変化と共に、教育の改革も引き起こされました。教育理念の更新、授業方式の更新、教材内容の更新など、すべての「更新」は教育現場の教員たちにより実現するということはいうまでもありません。大学のさまざまな授業の中で、第2外国語且つ選択科目としての中国語を教える教員として、どうすべきであるのかをここで検討してみたいと思います。

グローバルというと、外国語教育を一番に浮かべるかもしれません。本学では、必修科目の英語以外に、中国語、朝鮮語、フランス語、ドイツ語、スペイン語などの第2外国語科目もあります。近年中国経済の急速な発展は世界において注目され、多くの経済学者たちは中国経済に興味を持ち、様々な角度から研究を行っています。このような雰囲気の中で、学生たちも自然に中国語に対して勉強する意欲が湧いてきました。しかし、いまだに日中関係が不安定な状態です。その中で中国語を履修する学生が気持ちよく勉強できる環境をつくるのも教員の責任

であると思います。実は3年前から、本学の中国語教員が企画して、言語コミュニケーションセンターの許可と後援をいただき、毎年の秋学期に「中国文化週」というイベントを開催しています。一週間を通じて、たくさんの方に「中国語スピーチコンテスト」の参加を促し、中国人留学生とペアを組ませて、原稿の修正、発音訂正などの指導を行いました。学生たちは日ごらの中国語の勉強成果を披露でき、更に自信を持つようになりました。また、「留学経験交流」では、中国の生活を実際に体験した学生の留学経験を共有し、中国の現状を知る機会を設けました。これは留学生同士の情報共有だけではなく、これから中国に留学に行く学生への参考にもなり、大変有意義なイベントになりました。更に、実際に中国文化に触れるチャンスを提供するため、学生食堂で「餃子パーティ」も行いました。中国教員、留学生と話しながら、みなさんは中国の家庭料理の水餃子を皮から作り、自分の手で作った餃子を食べるにより、中

国文化の体験もできました。ほかには、中国茶の講座や、太極拳の体験など、中国人の健康理念を理解する機会を提供し、学生たちは異文化の理解を深めることができました。また、中国語を履修していない学生の中国への関心度も高めるためのイベントも行いました。具体的には、図書館のロビーで写真の展示会を行い、観客の投票により優秀作品を選ぶイベントや、また有名人を招待して本学で開催する講演会です。「音楽」を通じて中国に親しみをもってもらうため、中国の歌をお昼の放送時間に流したり、特に今年度は有名な演奏家をお願いして、中国伝統楽器「二胡」の演奏会を行いました。学生たちは美しい曲を聴きながら、中国文化への再認識ができました。このように、授業以外の活動を通じて、キャンパス内の中国語ブームをつくり、中国語を勉強することが楽しいという雰囲気を作り出すことは重要だと思います。

外国語を学ぶ目的は、外国人とのコミュニケーションにあります。日本人は、コミュニケーション

シオンにおいて、最も必要とされる自己表現能力が弱いため、なかなか積極的になれません。頭の中では理解していても、口から言葉が出てこない、つまり「習ったが使えない」ことがよくみられます。習ったものを使う場がなければ、外国語はただの「知識」にすぎません。「知識」から「能力」にするためには、教授者が学習者にとって積極的に取り組むことができる「場」の提供に努める必要があると思います。また、教授者はこの「場」作りを考える必要があります。中国語週もこの「場」の一種ではないかと思えます。

新しい時代には、授業の改革は教室の中心人物の変化ではないかと思えます。つまり、教授対象にも留意する必要があります。教授者は「なにを教えたいか」よりも、学生が「なにを習いたいか」ということに主眼をおいて授業をするべきです。以前、中国語を履修する学生の選択理由は、中国語は漢字を使用する言語だから単位をとりやすいというものが多かったですが、近年は中国ブームで、その理由にも変化が見られるようになりました。中国に興味を感じ、中国語を学びたいという大学生が増えてきたので、これは今までの「義務」として、単なる単位取得のために中国語を学ぶ姿勢とは明らかに異なってきました。本来中国のもつ歴史文化や社会風土、そして近年の急速な経済発展は、日本人を魅了するのに充分なものがあり、魅力を感じ、積極的に知ろう、触れようとする姿勢にこそコミュニケーションは生じるものであり、お互いを知ろうとすれば言葉は自然に出てくる

ものです。つまり、中国に関心を与えるのが中国語教育であると考えています。

学生は様々な分野に興味を持っていて、想像に難くありません。「中国旅行で中国語を使いたい」、「就職にプラスになる資格を取得したい」、「将来中国と関連がある仕事をしたい」、「中国の経済学などを研究する基礎として中国語をマスターしたい」等多種多様です。各分野に応じて、レベル別講座などの形式で、実用的かつ特殊性のある内容豊富な授業を提供できるように、教師はあらゆる考え方を念頭に置く必要があります。また学習者のレベルによって教授内容や教授方法を考える必要があります。しかし、現実的には第2外国語としては、あらゆる種類の授業を提供することは極めて困難です。その解決方法として、教材の編集を工夫しました。2011年から、本学共通教科書の基礎と中級レベルの2冊を教員たちが一緒に作成してきました。内容はできるだけ、中国語の基礎文法をすべてカバーし、使う頻度の高い語彙を取り入れ、自然な会話を設置しました。しっかりと基礎を作って、更に中国文化の紹介、旅行に使用できる慣用表現、仕事に使える中国語で書くメールなど、中級レベルの教科書を編集しました。録音のCDも各本文の内容をゆっくりなスピードと自然会話のスピードの2種類を収録しました。このような教材を使用することに、より、学生たちは将来さまざまな要求に応じて、更に中国語のレベルをアップさせることが可能になりました。

教授者は常に理論研究と実践は相互補完関係

にあることを念頭におけなければなりません。中国語を教える際、学生の質問に答える際、いずれも正確でかつ理解しやすく簡潔な説明が求められます。それは常に中国語の本質や特徴を簡潔な表現でまとめることの積み重ねであり、中国語教師は教師であると同時に中国語研究者であることが求められているに他なりません。中国語文法に関する研究を進めながら、その成果を教育に活かし、学生が中国語でコミュニケーションできるよう、そして中国を深く理解し視野を広げることができるよう、精一杯努力することは教員のあるべき姿です。そのために、教員たちは学会発表や、ほかの大学教員との教育経験交流会などに積極的に参加し、さらに本学でもこれらの活動を行います。そうすることで教員自身のレベルがアップし、授業水準を高めることが保証され、学生の進歩を最大限に実現するという目標も達成することができるとです。

楽しく勉強できる環境をつくり、学生自身からコミュニケーションの意欲を引き出すことを大前提とします。いい教材を使用しながら、様々なニーズに応じて、しっかりとした基盤の上で、将来性があるように教える。これは「生きる力」を持つ学生を育てる教員の姿勢です。

グローバル化と 経済学部¹⁾

藤原 憲二 教授 (国際貿易論)

国や地域の間にある言語、文化、価値観の垣根が低くなり、国・地域間のモノ、サービス、ヒト、カネの動きが活発になることをグローバル化と定義するならば、その進展は今後もとどまることはない。経済を含み様々な方面から批判されることもあるグローバル化の波から逃れることはできない。とりわけ面積も小さく天然資源も乏しい日本では、グローバル化の波をうまく利用して発展していく以外に道はない。このような現実の下、本学では国際学部の開設(2010年)、スーパーグローバル大学創成支援採択(2014年)、大学院の国連・外交コース開設(2017年予定)と国際色を前面に出した教育を目指してきた。本稿を読まれている人の中にはそのような国際色に魅力を感じて入学した人もいることだろう。それではこのような国際的な側面を特色としようとしている関西学院大学の経済学部¹⁾の学生はどのような能力を修得すべきなのか

て私見を述べる。冒頭のようにグローバル化を定義するならば、モノやヒトの移動の障壁となつていく言語、文化、価値観を「ある程度」共有することが必要である。そのためには外国の人とコミュニケーションを取らねばならず、それに必要な程度の外国語の習得は欠かせない。外国語教育に関しては「日本語もちゃんと使えないのに外国語(特に英語)ばかり教えるのは本末転倒だ」、「みんながみんな外国語を使う仕事に就くわけでもないのだから外国語ばかり勉強しても意味がない」という意見がある。筆者も日本語を軽視した外国語偏重教育には反対だが上であつた付きで述べた「ある程度」の語学力は少なくとも本学の卒業生は持つべきである。今や筆者の住んでいる過疎化の進んだ地域でも、アジアをはじめとする外国の人が働き、企業は少しでも販路を拡大しようと外国との取引を活発化させている。スーパーグローバル大学を目指す本学卒業生には日本人としての個性やアイデ

ンティイは持ちつつも、国境に関係なく自分のやりたい仕事で世界に貢献することが望まれる。この点では本学の学生は恵まれている。多くの大学で教えられている英・中・独・仏に加え、露・伊・西・ポルトガル・アラビア・インドネシアの各語学の授業が提供されている。またネイティブ教員によるインテンシブコースや海外研究も充実している。目的意識と強い意欲を持つて取り組めばハイレベルな語学力を修得できるだろう。本稿を読まれた学生でこれらのプログラムに興味を持った人はぜひ履修することを勧める。ただ経済学部に来た学生に単に語学力だけ習得して卒業してもらうのでは経済学部の存在意義がない。経済学部を卒業し経済学士の学位を授与されるには、基本的な経済学の考え方と研究方法を修得しなければならぬ。よく言われるように経済学そのものが直接ビジネスに役立つことは少ない。データを処理する際に統計学

は必要だし、資金調達・運用には金融やファイナンスの知識が求められる。しかし概して経済学がそのまま事務や営業に応用できることは稀である。それでも日本の多くの大学に経済学部があるのは、経済学の考え方と研究方法がビジネスを含めて広く実社会で役立つ（と信じている）からである。

経済学の考え方とは何か。筆者にとっての経済学の考え方とは「限られた時間と金の中でいかに問題に対処するか」である。私たちは日々の生活で常に判断を迫られている。これまで皆さんの高校卒業後に就職するのか進学するか、進学先ほどの学校にするのかという判断に迫られた。これらについては高校の先生や先輩、インターネット、オープンキャンパス、冊子など多くの情報やアドバイスがあった上での判断であった。しかし実社会では誰もこんな懇切丁寧な情報はくれず、必要な情報の入手も含めて全部自分で決めなければならぬ。時間や金が無限にあれば好きなだけ時間と金を費やして必要な情報を手に入れた上で判断することもできるが、そのようなことは事実上不可能である。多少の差はあっても判断を下すまでに使える時間と金は有限である。

このような制約の中で判断するときには経済学の考え方は有益であり、その際に鍵となる概念が機会費用である。機会費用とは「あることを行うことで犠牲になるものの価値」である。皆さんは大きな犠牲を払って大学にいることをご存じだろうか。皆さん（の保護者）が払う学費だけでは足りない。皆さんが大学にいるということ

で、別の選択をしていたら得られたであろうものを全て犠牲にしている。高卒で就職していたら得られたであろう給料は最も分かりやすいものである。もしA、Bという2つの行動の機会費用を比べて、Aの方が大きければBを選択すべきというのが経済学の考え方である。もちろん機会費用を正確に測ることはできないし、そもそも数値にすることすらできない。しかし毎日の判断をするときに単なる勘ではなく大雑把な機会費用に基づいて行動することで後悔を少なくできる。皆さんが1年生で学ぶ『マンキュー経済学』の早い段階で機会費用が出てくるのはそれが広く社会で生きていく上で有益だからである。

経済学を学ぶことで得られるもうひとつのメリットは経済学の研究方法を修得できることである。経済学の研究方法とは分野による差はあるが、(1) 現実の経済から解明すべき問題を見つける、(2) 同じ問題に関する既存文献を調べる、(3) 自分にとって重要だと思っただけを抜き取りそれ以外は捨象した形で抽象化する、(4) 抽象化されたモデルに数学的な計算やデータを用いた計算を行い結果を得る、(5) 得られた結果を直観的に解釈する、(6) 得られた結果がどのような示唆を持つのかを示す、という手順を踏む。これらの手順の中には他の学問と共通する部分もあるが、(3)と(4)が叙述的な分析を主とする社会学や法学との違いであり、(5)が数学との違いである。

このような経済学のアプローチはビジネスはもちろん様々な場面で応用できる。企業であれ

政府・自治体であればあるプロジェクトを立てて実行するには、前述の手順を踏んでその費用対効果を求める。これらの手順は社会人になってから経験を積んで得ることもできるが、経済学部ではそれを授業の中で修得できる。経済の理論や歴史および各専門分野の知識を理解することはもちろん大事だが、ここまで述べた経済学の考え方と研究方法は陳腐化しないものでありそれを学べるのが経済学部が社会に対してできる最大の貢献である。

本学経済学部は新規科目の導入やキャリア科目の充実など時代に即した改革を行ってきた。そのような中にあっても経済学部生が4年間で身に付ける核となるものは経済学の考え方と研究方法である。しかし最近の学生を見てみると最も重要であるこれらを全く身に付けず、期末試験の直前に教科書やレジュメを丸暗記して試験後はすぐに忘れるという人があまりにも多い。個人的には教科書はレジュメの内容は忘れても構わないが、経済学部を卒業したというならば経済学の考え方とその研究方法を修得してほしい。その上でグローバルゼーションの進展に伴って国境を越えた活動ができるような語学力を備えて頂ければと願う。

1 本稿の内容は筆者の私見に基づくので、内容に同意できない方もいると思われるがご寛恕願いたい。

2 これを専門用語では制約つき最適化問題という。

大学入試制度の多様化が 高等教育を劣化させている

西村 和雄 特命教授（神戸大学社会システムイノベーションセンター）

はじめに

大学生や大学院生の学力低下が指摘されてきた。一芸入試や多様化した入試制度も、一因として考えられる。ゆとり教育が見直され、国立大学が独立法人化する今、入学後に学力を高めることが可能な入学者選抜制度に変えてゆくことが望まれる。

大学が入試形態により、七科目の学力テストを活用する大学、三科目の学力テストを行う大学、推薦入試を主に活用する大学、面接だけで入学者をとる大学などに、分かれているなら、学生にとって入学試験の選択肢が多様になって、しかも大学も多様化してくる。しかし、一つの大学において、AO入試、面接、論文入試などを併用し、学力が多様な学生が入学するなら、下に合わせて授業のレベルを落とさざるを得なくなる。この方式では、入試は多様化するが、大学は多様化しない。

今、日本の大学では、一般入試、すなわち通

常のペーパーテストを受けずに入学する学生が50%にのぼる。そういう学生が半数近くクラスにいれば、教員は無視できない。

高校で推薦を受けるためには、内申点が高くなければならぬはずである。しかし、内申点をつける基準は各教科に対する意欲、関心、態度など、教師の主観に左右される部分が多い。新学力観を反映してテストの成績の比重が小さくなっていく。高校まで、テストで良い成績をとるより、先生に好かれた方が内申書の成績がよくなるというシステムで評価されて、推薦やAOで大学に入学してきた学生が、入学後も出席点やレポートで単位をとることを期待するのは自然なのかもしれない。そういう学生達は、会社に就職した後も、一般入試で入った学生たちとは異なる行動をとるであろう。

2012年8月、ベネッセ教育研究開発センターがインターネットで全国の大学1〜4年生調査したところ、推薦・AO入学者の高3生、4月時点の1日あたりの学習時間は、「1時間

未満」の学生は56.4%であった。

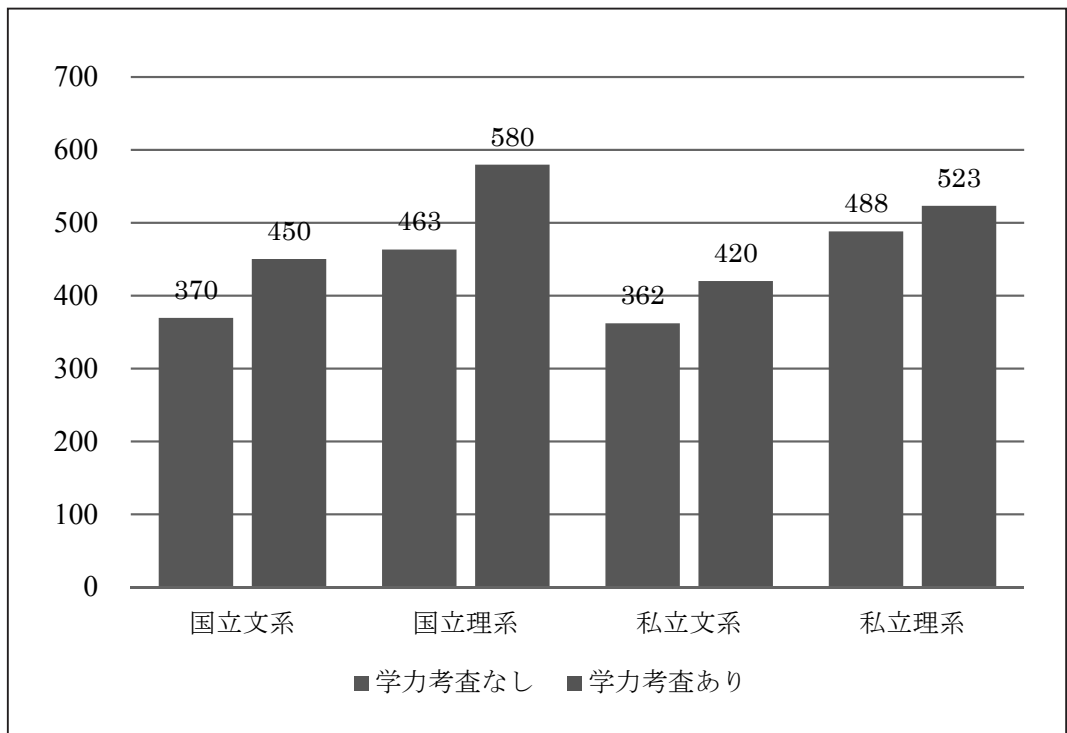
マスコミでも、AERAでは「企業の採用担当者の間にも「AO学生を避けたい」という傾向が出てきた。あるIT関連企業の担当者は、「成功も挫折もなく、競争も経験していない学生が増えた。プレゼンだって『おやおや?』な学生が目立つ」（2013年3月25日号）。

われわれは、各種入試制度を整理した上で、学力考査を課す一般入試制度と学力考査を課さない推薦・AO入試制度とを比較して、卒業後の所得の分析を行った。

学力考査を課す入試制度と課さない入試制度について、それぞれを経て入学し、卒業した労働者の所得を調査した。労働市場における評価には、学力以外の要因も大きく反映される。高所得であることは、希少性のある多様な能力が、労働市場で高く評価されていることの証左であると見なすことができる。

図1は、45歳以下の就業者を適用された入試制度に学力考査が課されていたか否かで2分割

図1 出身大学・学部別、学力考査の有無別平均所得（45歳以下の就業者全体）



浦坂 純子, 西村 和雄, 平田 純, 八木 匡「大学入試制度の多様化に関する比較分析 - 労働市場における評価 -」RIETI DP 13-J-019より

し、さらに出身大学・学部別に4分割して平均所得（年収・万円）を比較している。

また、まず、45歳以下の就業者の、学力考査を課す入試制度による入学者の平均所得は、学力考査を課さない入試制度による入学者の平均所得よりも、統計的に有意に高くなっていることが示されている。また、理系における格差は文系における格差よりも大きくなっている。

アメリカで博士号をとる留学生の数

大学教育が効果的でなければ、大学院教育も効果が怪しくなる。そして、理系研究者の国際競争力も、技術者の学力も低くなる。

全米科学財団（NSF）の統計によると、2013年に、アメリカの大学で理工系の博士号（Ph.D）を取った留学生の数は、中国人が四千四三九人、インド二〇七三人、韓国人千〇一二人に対し、台湾五六八人、トルコ三九四人、タイ二二七人、に対して、日本人はわずか百六十七人であった。

アメリカでは、入学後も、学期毎に試験でふるいかけ、残った者の中から博士号取得者が生まれる。アメリカの大学での博士号取得者を雇うなら、会社にとつても、研究機関にとつても、確実に戦力となる人材なのである。

中国人の博士号取得者が多いのは、単に留学生が多いだけではない。学力が高い故にアメリカの大学で受け入れられ、そして、優れた博士論文を書く学生も多いことになる。中国、韓国、台湾、タイ、日本のアメリカ博士号取得者の数の差は、将来の三国の技術力の行方を示唆して

いる。

文科省は、2008年から、日本の学生を欧米の大学に送る長期留学制度を創設した。現在は日本学生支援機構が行っている。それでも一年間に同制度は修士、博士合わせて約80人程度を送るだけである。中国が、アメリカの、しかも理工系だけで四千人を超える博士号取得者を輩出していることに比べると、更なる対策が必要となる。

ゆとり教育で、小中高校が、そして少数科目入試で大学と大学院の水準を低いままであれば、海外に留学生を送っても、多数の落伍者を生むことになりかねない。中国のように、国内の教育水準を高めた上で、海外留学生を増やすなら、効果も高くなる。

日本の大学院は、大学院重点化政策で、大幅に定員が増やされたが、実際は院生の学力水準が低下し、博士号の価値が薄れてしまった。日本の私立T大学医学部の元准教授が執筆した論文の、少なくとも172本についてデータのねつ造をしていて、撤回論文数の不名誉な世界最多記録を達成したという。2014年まで11年間の撤回論文数のワースト30位内に5人の日本人が名を連ねている。2000年まで日本では目立つ研究不正はなかった。ことを考えると、何かが変わってきたといえる。留学生の「質」の向上に努めると共に、日本の大学院生、大学生の学力という「質」の向上についても何らかの対応が期待される。

質を維持する方法の一つには、客観的な試験を課し、適性を常に測り続けることだ。もう一

つは、定員を弾力化することである。優秀な学生が多ければ、定員を越えて受入れ、逆の場合は定員より受入れを少なくする。アメリカの大学院教育が効果的に働いているのは、このためである。

少数科目受験者の入学金を高くしてはどうか

多様な学生を入れると簡単に言うが、学力が保証されない学生を受け入れると、入ってから教育に、莫大な時間とコストがかかる。そして、それでも、効果があがらないのが現状だ。そのコストは、一旦は大学が負うが、最終的には日本社会が負うことになる。

そもそも、一科目の試験で入学する学生と、三科目あるいは五科目の試験で入学する学生を、同じ条件で受け入れる必然性があるのだろうか。より多く、より広く勉強するほど、入学金や授業料が安くなるのでなければ、誰も、進んで勉強はしなくなるであろう。学科試験で入学する学生は、無試験あるいは面接や論文のみで、入学する多数の学生を見て、同じ入学金、同じ授業料を払い、等しく卒業証書をもたらすのに、何故、自分達だけ、多くの科目を受験しなければいけないのかと思うであろう。

このように考えれば、受験科目数を減らす毎に、入学金や授業料を上げる方が合理的ではないのだろうか。例えば、面接のみの入学は入学金を二千万円、一科目入試は八百万円、二科目入試で四百万円、三科目入試で百万円、四科目入試で五十万円という具合にすればよい。そして、五教科七科目以上の入学試験で入学する学

生は、入学金はただにする。結局、より広く、より深く勉強した人材をより多く輩出すること、潤うのは日本全体なのだから、文科省も、全入学生定員における五教科七科目の試験で入学する定員の割合に応じて、大学に補助金を配分すればよいであろう。

そうすることで、子供がより広く勉強をするなら、安い費用で大学に進学することが可能になる。そのことを通じて、親の所得が低くとも、大学に進学できるようになるなら、より広い層から人材を育成することにもなり、多様な人材を入学させることにもなる。

これから先の日本を支えることと みなさんが大学で学ぶこと

柳原 光芳 教授 (名古屋大学)

1. みなさんと日本経済

現在の日本は、グローバル化の中で、世界の国々とさまざまな形で広く、また深く関わり合っています。例えば他の国と生産量やその質などを競うなどの競争関係や、生産を行うために他の国に資源の提供を求めるなどの協調関係など、様々な形があります。そのような中、日本は今まで以上に、より効率的に付加価値を生み出していく必要に迫られています。

そこで、みなさんにとり特に重要なものは、「主体性」と「創造力」です。これらと日本が付加価値を生み出すことがどのような関係にあるのか、少しわかりにくいでしょう。これを考えるため、まず近年の日本の生み出してきた付加価値の大きさを概観し、それとみなさんの「主体性」と「創造力」との関わりについてお話しします。次にこの「主体性」と「創造力」がどのような場所で培われるのかについてお話しし、みなさんがこれから大学で生活をされて

いくときのヒントを提示したいと思います。

2. 日本のGDPの推移

付加価値とは字の通り、新たに生み出された価値のことです。例えば、リングを1個100円で仕入れ、それをもとに1杯300円のジュースを作って売ったとすると、付加価値は200円です。この付加価値について、日本の1年間の総額を求めたものが日本の国内総生産(GDP)です。また、ジュースが買われて飲まれるというように、GDPは生み出されたものであると同時に、何らかの形で使われるものでもあります。

図1には、3つのグラフが書かれています。その中、棒グラフは1994年(平成5年)から2014年(平成26年)までの日本のGDP(名目)を表しています。左軸から、この20年間、その水準が470兆円から530兆円の間でほぼ変わっていないことがわかります。つまり、日本で生み出されてきた付加価値の大きさは、

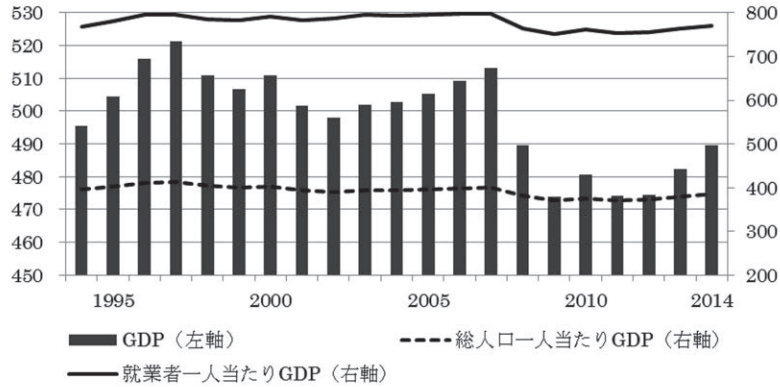
「全体」として、ほとんど変わっていません。

3. 日本の人口の推移

ただ、このGDPがほとんど変わっていないという事実には、注意が必要です。そこで、図2の人口のグラフを見てください。棒グラフの長さは日本の総人口を表し、これ自体は、1994年から2014年まででは大きな変化は見られません。

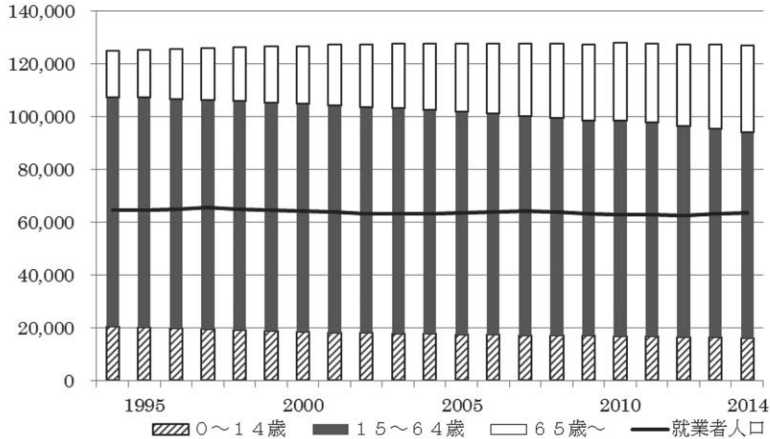
これに対し、それぞれの棒につけられている3つの色、特に上の白色、真ん中の黒色は大きく変化しています。これらはそれぞれ65歳以上、15歳から64歳までの人口を表しています。65歳以上のいわゆる老年人口は増加し続けているのに対し、15歳から65歳までの、働ける、そして付加価値を生み出せることができる年齢層の生産年齢人口は、1994年から2014年までほぼ一貫して減少しています。また、図中に実線で描かれている、実際に働いている就業者数はこれまでほぼ一定です。しかし、生産年齢

図1：GDPの推移



(単位) 左軸：兆円，右軸：百万円。(資料) 内閣府「国民経済計算」・総務省統計局「人口推計」および「労働力調査」

図2：人口の推移



(単位) 1,000人，(資料) 総務省統計局「人口推計」および「労働力調査」

人口の減少を考えると、今後は就業者数も減少する方向に向かうと考えられます。

4. GDPと人口から何がわかるか？

先のGDPの話と合わせて考えます。GDPが変化せず、就業者数も変化していないということは、一人の就業者が生み出す付加価値も一定であることを意味します。逆に、老年人口の増加は、その付加価値が消費される形で使用される割合が大きくなることを意味します。

それを再度、図1から確認します。破線は、総人口で見た一人あたりGDPを表しています。この値はこの20年間、約400万円の水準で変わらないように見えますが、年平均で0.12%減少しています。一方、実線は就業者一人あたりGDPを表しています。これは750から800万円の間多少の動きはあるものの、年平均で0.03%と、わずかに増加しています。つまり、就業者一人あたりでわずかながらも多くの付加価値を生むようになってきているのです。

5. GDPと人口から何がわかるか？

このように、これまでは就業者数が一定であったことから、GDPもほぼ一定でした。しかし、今後見込まれる就業者数の減少により、GDPが減少局面を迎えるかもしれません。そのような中、GDPの水準を維持するにはどうすればいいでしょうか？さらには、その水準を上昇させることは、どうすれば可能でしょうか？

この1つの答えは、就業者一人あたりのGDPをこれまで以上に高めることです。つまり、教育によって働き手の生産能力を高めるのです。そのための具体的な方法を考えてみます。

6. 教育の方向

文部科学省は、平成25年に第2期教育振興基本計画を策定しています。これは平成29年までの5年間の、日本の教育振興に関する施策を推進するための計画であり、日本の教育の大きな方向を決めるものです。

その中には4つの基本的方向性が示されています。その1つが、社会を生き抜く力の養成です。激しい社会の動きの中で、自分で学び、考える力を養うことで、生き抜く力を獲得していくというものです。つまり、社会の中で主体的に行動できるようにすることが求められています。もう1つは新しい価値を生み出す人材の養成です。そこで必要となるのは、今までにない考え方・ものの見方のできる、あるいは新しいものを生み出せる「創造力」です。

7. 「主体性」と「創造力」

これらの「主体性」と「創造力」がなぜみなさんにとって必要なのでしょう？それは、簡単に言えば、みなさんにはこれまでの世代以上ががんばってもらわないといけないからです。つまり、労働力人口一人あたりのGDPをより高めて、今後の労働力人口の減少によるGDPの減少を食い止める、あるいは逆に増加させる必要があるためです。

それには、今までは大きく異なる生産のあり方、取引のあり方、あるいはもっと広くいえば経済・社会のあり方が必要となります。もちろん、今までの日本におけるさまざまな「あり方」を否定しているわけではありません。しかし、外からはグローバル化の大きな波が押し寄せ、内には未曾有の少子高齢社会が到来しつつある現在の日本では、これまでの「あり方」のままであることには限界があると考えられます。

8. なぜ大学で学ぶか？

これらの「主体性」と「創造力」を、みなさんはどのように獲得していけばいいのでしょうか？

教育学あるいは教育の経済学と言われる学問分野においては、学生が獲得する教育の成果（例えば成績など）は、教育環境、親の所得や学生自身の努力などに加えて、「周囲にいる人たち」の力も影響するとされています。よく言われるのは、自分の学校の、自分が所属するクラスの友達です。例えば、平均的に高い水準の成果をあげているクラスにいと、自分の成果もより高いものとなるということです。またこれには、もう少し対象を広げて、同学年の人たち、あるいは上級生、下級生の人たちまで含まれる場合もあります。これらは「同僚効果 (peer effect)」と呼ばれます。

9. みなさんと「関学」

成果をよりよいものとする、あるいは自分の能力を高めるのに、自分だけで行うには限界が

あります。ある程度の段階に至るまでは、さまざまな人たちの力を借りた方がよい場合が多いです。先生の力を借り、自分の友人・先輩の刺激を受け、それにより自らの能力を高めることができます。それにより、新しい時代を作るのに必要となる「主体性」と「創造力」が培われていきます。

実は、みなさんが関西学院大学に入ってからるときにも、この同僚効果をきつと期待しているはずで、「関学で学ぶ」ということは、実は「関学の先生に学び」、「関学の友人から学ぶ」ということであり、そこに自分をより高めてくれる出会いを強く期待していることだと思います。

大学での4年間は長いようで短いものです。その貴重な4年間を、みなさんの「周囲にいる人たち」と共に過ごす中で、新しい時代を作る「主体性」と「創造力」を培ってってください。

- 1 斜線は14歳以下の人口です。
- 2 付加価値は現在の消費として以外にも、将来の消費のためにも使われます。これは投資と言われます。
- 3 ここで紹介した2つ以外に、「学びのセーフティネットの構築」と「絆づくりと活力あるコミュニティの形成」があります。
- 4 より正確には、「未来への飛躍を実現する人材の養成」です。

特集2

在外研究レポート

本学の教員には外国留学の制度があります。留学先では、現地の研究者たちと交流し、新たな情報・意見に触れることで、さまざまな刺激を得ることができま

す。海外の目で日本のあり方を問い直す機会にもなるでしょう。その一方で、言語や文化の壁にぶつかり、苦勞することもあります。

このように外国留学を通じて成長したり挫折したりするのは、教員も学生も同じです。帰国後にその経験を日本で活かさなければならぬ点も、やはり同じです。

今回紹介するのは、以下の3名の教員の体験談です。ぜひ学生の皆さんも(短期間でもよいので)いつか日本を飛び出し、世界にチャレンジしてみてください。若いうちはいくら失敗してもよいので

す。むしろそれを通じて成長するのですから。

(編集担当：本郷亮)

留学先一覧

藤井 和夫 教授	クラクフ経済大学 2016年4月～2016年9月
栗田 匡相 准教授	ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 2015年9月～2016年8月
大洞 公平 准教授	カリフォルニア大学サンディエゴ校 2015年9月～2016年7月

現場での半年間

藤井 和夫 教授

二〇一六年の四月から九月まで、ポーランドのクラクフ市にあるクラクフ経済大学に留学しました。同大学は、本学に二つあるポーランドにおける交換留学協定大学の一つで、一八八二年設立の商業学校にルーツを持ち、一九二五年からの高等商業学校を経て一九五〇年に国立の経済大学となって今日に至っています（現在五学部、学生数二三〇〇〇人）。全国に五つある経済大学のトップを争うとともに、経済学部を持たない一四世紀創立のクラクフの名門ヤギェウォ大学を補う役割を担っているように見受けられ、例えば現在のベアタ・シドゥウォ首相は、ヤギェウォ大学の哲学歴史学部を卒業した後、国会議員になる前にこのクラクフ経済大学にも籍を置いていました。

クラクフに留学したのは、ポーランド商業史

という自分にとっては新しいテーマに取り組むためです。一七世紀初頭にワルシャワに遷都されるまでクラクフが長らくポーランドの首都であった背景には、中世ヨーロッパ商業の中心地としての繁栄がありました。また一九世紀の国土分割による滅亡という苦難の歴史のあと、ポーランドの再興に向けて同市が政治面、文化面で大きな役割を担ったことが知られています。その経済的な基礎は何だったのかを歴史の現場で明らかにしたかったです。

最近の研究を手掛かりにその分野に取り組もうとクラクフに来て分かったのは、意外なことにこちらでもその商業史の研究が現在には少ないという事実でした。そこで受入教授のブロンスキ氏の紹介で、大学と関係が深い国際文化センター(MCK)や一九世紀以来の伝統をもつポー

ランド科学アカデミー(PAU)の図書室にもついてもっぱら古い文献を渉猟することになり、美しい歴史的な町並みや多くの博物館・美術館に恵まれたクラクフに押し寄せる観光客と、昼食の安食堂の席を争う毎日を過ごしていました。

滞在中にニース(仏)でのテロやトルコのクーデター未遂騒動があり、イギリスのEU離脱の国民投票があつて、ヨーロッパの激動が直接体に響いてくるのを感じました。また、ローマ教皇が呼びかけた「世界青年の日」が二百万人近くの世界の若者を集めてクラクフで行われた際の熱狂的な雰囲気や、大学のスタッフや古本屋の主人などと交わした会話から、ポーランドのカトリックや国民感情についていろいろ考えさせられました。保守的な政府の政策をめぐって

世論が分裂する中で、二〇一六ユーロ・カップでのサッカーチームの活躍に、国中が文字通り一つになって応援するのも目撃し、準々決勝のPKでポルトガルに惜敗した時には、滞在していた家族とともにファンと肩を組む気分ですわらず涙してしまいました。社会を研究する人間にとって、テレビドラマの刑事ではありませんが、過去の時代の真の姿についても、現在進行中のできごとについても、現場は本当に多くのことを教えてくれるということを再確認した留学でした。



日々の暮らしと研究 ミクロと分裂と出会いと

栗田 匡相 准教授

2015年9月～2016年9月までのおおよそ1年間、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院、欧州委員会地域開発総局、ブリュッセル自由大学の3つの大学、国際機関にて在外研究をさせて頂く機会を得た。新たに始めた研究としては、①EUの地域政策とその効果（欧州委員会）、②途上国中小企業と金融サービスの拡充（ロンドン大学）、③アジア諸国の生産性格差変化（OECD）などがあげられる。また、留学前より継続していた④JICA共同政策研究プロジェクト（インドネシア）、⑤社会実験とネットワーク分析を用いたマダガスカルにおける稲作技術の受容と伝播（科研費（15K07637））、⑥タイ国の税制改革と社会厚生の変化、など留学期間中に行った研究は多岐にわたった。でもじっくりと研究に向き合う時間を与えて頂いたおかげで研究に色々な進展が見られた。こうした機会を提供してくださった関西学院大学には感謝の気持ちで一杯である。

近年の実験経済学や行動経済学の興隆、また

家計や企業のミクロデータ利用が容易になることによって、ミクロの実証研究と実際の政策とのリンクがより明確に見える研究が開発経済学、国際経済学の分野でも可能になってきている。留学中には、欧州委員会の内部スタッフに公開されているデータを利用し、欧州委員会が行ってきた地域開発政策の効果を、全欧州を対象にしたミクロの企業データと併せて検証した。ロンドン大学では、留学中に知り合った共同研究者から貴重な金融サービス普及のデータ（インドネシア）を提供してもらい、ミクロなレベルで銀行信用の拡大が中小企業の生産性改善にどのような効果を持つのかについて共同研究を進めている。また欧州滞在中もマダガスカルやインドネシアには何度も足を運び、開発経済学の分野でも流行の社会経済実験の手法を用いて政策効果の評価（Impact evaluation）に注力した。

住居はベルギーのブリュッセルに構え、そこからロンドンや欧州委員会へ通う生活が続い

た。このように書くとなんとも優雅で充実した留学生活のように思われるが、滞在中はパリやブリュッセルでテロが相次ぎ、シリア難民の問題は深刻さを増し、更にはイギリスのEU脱退が報じられるなど、ヨーロッパの状況は決して落ち着いたものとは言えなかった。ブリュッセルの地下鉄自爆テロが起きた時刻の30分前に妻がその地下鉄駅を通っていたこと、私のオフィスがあった欧州委員会の建物がテロの標的になる可能性が高くなったためセキュリティチェックが厳しくなったこと、Bexit決定の翌日には、欧州委員会委員長ジャン・クロード・ユンケルから動揺の見える欧州委員会のスタッフ全員（私も含む）宛てに激励のメールが送られてきたことなどヨーロッパという地域が抱える問題の深刻さに直接的に触れる機会も少なからずあった。そういえば、JICAとの共同政策研究を行っているインドネシアでも1月（2016年）にテロがあり、何度が訪れたことのあるスターバックスが無残な姿になっているのを

ΣCのニュースで目にすることとなった。ジャカルタでは今月（2016年12月）も先月（11月）もテロ計画の疑いでIS関係者が逮捕されている。留学中に調査へ出かけたエチオピアのバハルダールでも、ついこの間、宿泊先近くで手榴弾の爆発があったらしい。

最近はおかげさまで「研究」は順調に進んでいるのだが、自身が頻繁に足を運ぶ、あるいは生活をしている場所や地域でテロやら分裂といった事柄が起きている以上、研究が進めば進むほど自分が生み出すことのできる言葉の脆弱さと現実の複雑さに途方に暮れることにもなる。所詮は研究、そんな思いにもとらわれる。しかし一方で見知らぬ地を訪れば社会や文化の多様性に触れて感激を覚え、新たな出会いから生まれ出る関係性の豊穡さに感謝の念を抱くこともあった。「研究」というバックグラウンドを持った一人人として、この混迷する社会に対して何が出来るのか。自らが動くこと、の新たな意味をまた重ねることになった1年であった。



欧州委員会地域開発総局選抜 (I?) サッカーチーム

UCCSSDにおける研究活動

大洞 公平 准教授

えています。でなければ、その教えを受ける学生のグローバル化も歪んだものになりかねないでしょう。その意味で、UCCSSDにおける研究活動が、私自身、また、学生諸君のさらなるグローバル化に少しでもつながればよいなと思っています。

私は、2015年9月から10か月余り、University of California, San Diego (UCCSD) の School of Global Policy and Strategy (GPS) に滞在し、行動経済学、組織の経済学に関する研究を行いました。主たる研究テーマは、インセンティブと組織構造に関する行動契約理論研究です。また、そこから得られた理論的帰結を実験によって検証する研究に向けた準備も行いました。GPS 以外に、Department of Economics や Rady School of Management にも私の専門に近い研究者がおり、そこで行われている講義やセミナーに参加しながら研究を進めました。以下にいくつかの例を挙げておきます。

まず、以前から進めていたチーム・インセンティブと損失回避に関する理論研究の結果を検証する実験デザインを考えるために、C. Sprenger の講義 (Behavioral Economics) に参加し研究計画を作成しました。損失回避を考慮した場合、失敗に対しても報酬を与えることが効率的になるケースがあるという理論結果の

妥当性を実験で検証することが目的です。次に、組織におけるミドルのリーダーシップの役割に関する理論研究を進めるとともに、その結果を検証するための実験デザインを J. Andreoni の講義 (Experimental Economics) を通して考え、研究発表を行いました。そこでのロジックは公共財の自発的供給にも応用可能で、その分野に新たな貢献をもたらすことを目指しました。他にも、J. Sobel の講義 (Advanced Microeconomics) に出席し、情報伝達やそれに伴う嘘や欺瞞に関する研究を学び、組織不正に関する研究を始めました。

私にとって留学は、研究者として生き続けるための修行の機会です。最前線で研究している優秀な研究者と渡り合うことは相当なエネルギーを使い、楽しいことよりも辛かったり悔しかったりすることの方が多いです。しかし、大学のグローバル化が声高に叫ばれている今、教員もグローバルに研究活動を推進し成果を出すことがより一層重要になってきていると私は考



エコノフォーラム座談会

「これからの大学教育」 学生と教職員の視点

日時…2016年12月14日(水) 9時30分～11時

場所…経済学部2階会議室

出席者(五十音順)…

学生 梅木恵里子さん

中江 美紗さん

中本 雄大さん

松永 雄太さん

教員 根岸 紳教授

長谷川哲子准教授

職員 永瀆 晶乃さん

三上 祐介さん

司会 本郷 亮教授

本郷 皆さま、本日は「これからの大学教育」

について活発に議論できればと思います。大学教育の世界は、本格的な競争と変革の時代に入ろうとしています。そのような中で、「関学経済学部らしい」教育のあり方や、改革の方向性とは、一体どのようなものなのでしょうか？

学生の多様な活躍を促すために、外国人留学生や、勉強と部活の文武両道に励む体育会所属学生を、学部はどのように支援すればよいのでしょうか？

論点は多岐にわたると思います。何でも自由に発言してください。最初に自己紹介をお願いします。

します。では、根岸先生から。

根岸 どうも、根岸紳です。私は3月末で退職するので、皆さんに遺言をしておこうと思つて(笑)。ざっくりばらんに話したいと思います。僕は18歳で関学経済学部に入学し、10年間ほどは学部・大学院の学生として、その後の40年ほどは教師として、関学で過ごしました。だから関学しか知らんわけです。よく勉強し、よく遊びました。お酒も飲みました。教師になつてからも、基本的には学生と一緒に遊びました。格好良く言えば、学生目線に立つて一緒にワーワーやっていた感じ(笑)。でも、それが実は大事

なんですよ。

長谷川 学部教員の長谷川哲子です。主に留学生対象の日本語科目を担当しています。経済学部では、今年度は「言語と文化」という講義科目と「基礎演習」を担当しています。

本郷 学部教員の本郷亮です。現在、副学部長をしています。私も関学出身で1995年に経済学部を卒業しました。卒業直前に大震災がありました。大学院も関学です。結婚式もランバース礼拝堂、息子も娘も関学系列です。8年間、青森の小さな私立大学に勤めていたので、地方私大の大変さはよく分かります。私の夢は、私

今日、日本の大学はさまざまな意味で「転換期」を迎えています。伝統ある関西学院大学経済学部が今後も大学全体を牽引できるような集団であり続けるためには、その伝統や個性を堅持しつつも、新たな社会動向に適応し、進化せねばなりません。しかし具体的にどうすればよいのでしょうか？本座談会では、この大きな問題について学生・教職員が色々なアイデアを述べています。わが経済学部が今後もきっと発展することを願って！



根岸 紳 (ねぎし しん) 経済学部教授。専門は計量経済学。関学経済学部出身。元学部長。体育会の会長や部長を務め、大学スポーツの発展に長年尽力

が定年を迎える20年後ぐらいまでに、関学をさらに良い大学にすることです。

三上 学部事務室の三上祐介です。今はちょうど自己点検・評価や目標設定の業務をしています。経済学部全体の目標を達成したのかわからないのか、指標は正しかったのかという点検をして公表することを各大学は求められているのです。

永瀆 学部事務室の永瀆晶乃です。2016年3月に本学の商学部を卒業し、4月から経済学部で働いています。入職1年目なので覚えねばならないことが多く、苦労しています(笑)。

長谷川 永瀆さんは学生時代に部活やサークルなどは何かしらしていましたか？

永瀆 部やサークルには入っていませんでしたが、大学4年間、ずっと学内の総合支援センター

でノート・テイクという活動をしていました。根岸 関学ではそのようなボランティア活動は、伝統というか、献血活動もそうですが、盛んですね。他大学に比べて関学はノート・テイクも多いですか？

永瀆 関学ではノート・テイクの登録者自体は多いのですが、実際に活動しているのは30人ほどに絞られます。他大学にも確かに多くいるのですが、学校ごとに体制が幾分異なります。

関学では1人の利用学生さんに対して、ノート・テイクは「3人体制」(手書き1名とパソコン2名)が基本です。他大学では、パソコン2名のみだったり、あるいは授業科目によっては、関学でもそうですが、手書き1名のみだったり、色々です。

中本 大学院(経済学研究科)修士課程2年の中本雄大です。私は大学1年の基礎演習から今に至るまで6年間ずっと根岸先生のゼミ生です。本日は座談会にお招き頂き、ありがとうございます。

梅木 経済学部4年の梅木恵里子です。現在、体育会スケート部(スピード部門)で活動しております。本日はよろしくお願ひいたします。

中江 経済学部3年の中江美紗です。現在、本郷先生のゼミに所属しています。こんな服を着ているのは、体育会バレーボール部に所属しているからです。本日の座談会のお話を頂き、「私で大丈夫かな」と戸惑いつつも、お受けさせて頂きました。

松永 経済学部2年の松永雄太です。学部のエコゼミ委員会に所属しております。本日はどう

かよろしくお願ひいたします。

学部生の就職現状

本郷 まず経済学部の就職状況については、関学キャリアセンターの公式データがあります。公開の許可を頂いたものですが、それによれば、2016年3月の経済学部卒業生のうち、日経が選んだ主要400社に就職したのは43.0%で、今回も経済学部が関学のすべての学部の中でトップです。

ちなみに東洋経済新報社の「2016年有名企業400社への実就職率ランキング」(2016年9月)によれば、こちらは全学部平均の値ですが、阪大35.4%、関学28.2%、神大26.7%、立命23.5%、関大20.6%です。



本郷 亮 (ほんごう りょう) 経済学部教授。専門は近代経済学史。関学経済学部出身。体育会体操部部长。ゼミ活動(勉強も遊びも)が大好きです

この記事はインターネットで簡単に見ることができません。

このように関学はもとも「大企業就職率」はかなり強いんですが、なかでも経済学部は強烈です。学部の先人たちが築き上げてきたブランド力は健在です。大学教育を考えるさいも、何でもかんでも変えるのではなく、守るべき教育の根本（伝統）と、時代に合わせて改革すべきことを、見極めるのが肝心でしょう。

大学教育の根本とは？

根岸 何のために大学で学ぶのか。経済学に限らず、色んなことを広く勉強すべきです。相手の主張を理解し、勉強を通じて自分自身の考えを整理して、相手にしっかり話す。そういう議論のできる人間になることが第一です。まずはそのために大学で勉強するのでしょうか。

経済学部では「卒業論文」が必修ではなくありません。これは非常に寂しいことです。本当は全員に書いて欲しいんです。その前提として、全員が何か自分のテーマを持って欲しい。もちろんテーマの途中変更もあるでしょうけど、とにかく皆が問題意識を持ちながら大学生活を過ごして欲しいです。でもすぐ答えが出ないような安易なテーマはダメ。4年間で答えは出ないかもしれない。本当にやりたいテーマをじっくり考えたい。それを支えていくのがゼミの役割だから、焦らない、焦つたらあかん。
本郷 論文を1本も書かずに卒業する大学生というのは、一昔前では考えにくい。そこまで学

生の「選択」に任せるのは、議論の余地もありそうです。

根岸 卒論の執筆はゼミ（研究演習Ⅱ）に含まれていて、4単位です。でも卒業のための単位が足りている学生は、卒論を書くのはしんどいので、就職が決まったら途中でゼミをやめることがある。長い目で見たら、それは本人にとつて「損」です。だから、論文じゃなくて少し軽めのレポートでもいいから、（ゼミの4単位とは別に）その執筆に2単位ぐらい出したらどうかな？読む側の教員は大変やと思うけど……。

やっぱり何か書いて卒業するのが大事。卒業後に「自分は大学で何をやったのかな」と振り返る時もある。僕なんか、キリスト教で点が低かったとか、ドイツ語で落とされたとか、そういう思い出しか出てこないけど（笑）。学生は自分のテーマをしっかり持って、全員が論文を書いて卒業して欲しいんです。もうすぐ定年なので、皆さんへの遺言みたいですけど、よろしくお願いします。

三上 立派に議論できる人間。そして卒業後に大学で学んだことを語れる人間。卒論はその意味では「学生生活の総決算」ですね。

根岸 それから、僕のゼミはディベート中心に動いていました。20年間以上、立教大学を相手にディベートをしました。東京の連中はこういう考え方をするのかとか、刺激があります。積極的に外と交流することが大事で、これはグローバル化の土台です。

他のゼミともたくさんディベートをしました。勝ち負け自体はどっちでもいい。肝心なのは、



三上 祐介（みかみ ゆうすけ）経済学部職員（事務長補佐）。学生時代はバイクで日本一周やキャンプリーターなどアウトドア派だったが今はすっかりインドア派

は、みんな勉強してあかだこうだ議論する、ディベートに出るまでの過程。それをサボつたら、勝つても意味がない。色々な意見を知ること、勉強して自分の考えをまとめていくこと、議論すること、が一番大事です。

中本 それ、よくわかります。

根岸 経済学部のホームページの「われら関学経済人」のコーナーに、根岸ゼミ卒業生が10名ほど出ていますが、その半分ぐらいは、ディベートと研究発表が良かったと言っています。研究発表でも、大事なのはやはり、プレゼン自体より、むしろ準備と質疑応答なので、これらに時間をかけるのが大事です。

本郷 ディベートも研究発表もそうですが、学生たちはグループワークの方が熱心になりますね。主体性を引き出すには、グループワークが

一番かなと感じます。活発なゼミはどこもグループワークを軸にしている、そのため仲間意識も強い。

根岸 昔から関学生はすごくバランスがいいと言われます。だから社会は関学生を評価してくれるんです。最近では、関学生の知的水準が落ちたとか言われますけど、それはたぶん関学だけじゃなくて、日本全体が落ちてるからです。というのも、昔みたいに日本経済がどんどん成長していれば、「一生懸命勉強して豊かになろう」という分かりやすい図式が成り立っただけ、今は「頑張ってもそんなに出世しないだろう」とか、目標を見失っている。ガリ勉しなくなっただけ、今の若者の合理的行動だし、その分、他のことに頑張っていると思います。

関学生はまあまあ頭が良く、色んなことにチャレンジし、遊びも人づきあいも上手い。バランスが良いから出世するのでしょう。バランスが良いと言われるのは、非常に嬉しいことです。いくらペーパーテストの偏差値が高くても、卒業して社会に一步出れば、人間としてのバランスが悪いとダメでしょ？経済学部でも、そういう「全人教育」の方針がずっと守られてきました。だからこれまでゼミ活動に力を入れてきたわけです。

僕は成功したかどうか分からないけど、学生と一緒に遊びながら、色々なことを一緒に学んで、お互いに影響しあいながら過ごすことができて、本当にいい50年間でした。僕はもう定年ですが、関学には非常に期待しています。

教育の経済学

本郷 話は変わりますが、最近いわゆる「教育の経済学」が流行っていて、例えば、中室牧子『学力』の『経済学』（2015年）が有名です。けっこう面白い本です。歴史的に見れば、教育の経済学は、シカゴ大学のベッカー（Gary Becker）の『人的資本』（Human Capital, 1964）が嚆矢です。この本はサブタイトルに「with Special Reference to Education」という文言が含まれていて、内容はまさに教育の経済学です。彼は1992年にノーベル経済学賞を取りました。

もう1人有名なのは、同じくシカゴ大学のヘックマン（James Heckman）で、彼も2000年にノーベル経済学賞を取りました。ヘックマンは主に幼児教育の研究。しかしベッカーもヘックマンも、統計データ（エビデンス）に基づいて教育を論じるスタイル、科学的スタイルは共通しています。

一番大事だと思ったのは、中室さんの本にも出てきますが、精神能力には「認知能力」と「非認知能力」の2つがあるという点です。認知能力は、学力テストなどで測る「知力」です。ちなみに小学生にドカッと教育投資して、例えば塾に行かせた場合、どれほどの期間その投資効果が持続するかというと、中学以降に全然投資しなければ、大学入学までに効果はほぼ消えるそうです。机上の知識は忘れちゃいますから。

一方、非認知能力は、数値化しにくいですが、

いわゆるコミュニケーション能力・意欲・根性・正直などの、社会性に関連する精神能力です。これを幼稚園児に投資しておく、その投資効果はほとんど一生モノだそうです。学力テストで測れないこれらの非認知能力が、卒業後の社会的成功ですごく重要なわけですから、先ほどの「関学生の強みはバランスや」という話は、精神面に限定すれば、認知能力と非認知能力のバランスと言え換えてよいと思います。というか、最近ではOECDなども「教育」概念をそのように広く捉え始めて、日本の国公立大も入試改革に着手しています。人工知能（AI）の急速な進歩の中で、近い将来に「教育」概念が大きく変わる可能性もあります。

非認知能力を鍛えるには、人と交わって学ぶというか、真似るといふか。大学生の場合、たぶんゼミ、部活、バイトなどが非認知能力の訓練の場ですけど、ヘックマンによれば、幼児期における非認知能力への教育が投資収益率では一番高いみたいです（笑）。

根岸 大学生だと収益率がだいぶ下がってるかもしれないへんな。だいぶん出遅れた（笑）。でも遅くない？

本郷 もう1つ、私はGPAはすごく安易な指標だと思います。以下は火星学院大学という他大学の話なのですが、GPAを高くするには、学生にとって、①確実に単位を取れる科目、また可能であれば高得点を得やすい科目、を厳選して履修すること、②卒業に必要な124単位が揃ったら、それ以上は履修をしないこと、が最適というか鉄板の戦略になります。

GPAの怖さは、それによって学生が毎年、その方向に駆り立てられることです。恒常的な一種の引力です。科目選択という大学教育にとつてとても重要な選択がどれほど左右されてきたか。この引力が消えれば、学生の行動はガラッと変わるはずですが、もちろん各科目の合格率を揃えるのは、問題もありますが、そのコストとベネフィットを比較検討するのが「教育の経済学」でしょう。

経済学部の個性

長谷川 経済学部の個性って何ですか？

根岸 一昔前の話だけど、僕は、関学と言えは経済しかないと思っていました。偏差値もべらぼうに高く、「俺は経済しか受けへんぞ」って。でも最近、偏差値が競合学部に分ける年もあり、悔しくてしようがなかったけど、時代の変化だし、慶応の経済学部だって法学部に抜かれたりしているの、ある程度は仕方がない。

今の関学経済の個性って何でしょうか？

中本 縦のつながりでしょか。学生の上下関係もそうですが、昔から学生とOB・OGのつながりも強い。経済学部は他学部よりも縦のつながりが強いと思います。

根岸 確かに関学は全体として愛校心は強いと思うけど、今は学部は全然関係ない気がするけどな…。

中江 関学といったら経済学部が顔じゃないですか？

根岸 それは昔の話やろ（笑）！

本郷 でも偏差値では陰りも見えますけど、大手企業就職率では今でも経済がトップ。だから、大企業に就職したい人には「一番お得な学部」ではないでしょうか？

三上 入試だったら、今は商学部も強い。しかし2017年度入試の志願者数では、経済学部が商学部を上回りそうです。

根岸 統計で見たら、経済も商もほとんど同じ。関学経済の個性って何ですか？

中江 私は指定校推薦の面接で「なぜ関学の経済なの？」って絶対聞かれると思って、答えを準備しましたけど、結局、学部のパンフレットに書いてあることを言うしかなかったです（笑）。それを言ったら、「それは他大学も同じでしょう」とか言われてすごく困りました。私は経済というより、とにかく関学に行きたかったの…。

根岸 それが正直なところかもしれない。とりあえず関学、たまたま経済、っていう学生は多い。

中江 そうです！「あわよくば経済」っていうのが本音ですけど。結果的に良かったです。高校では、経済学には数学が要ると聞いていたが、実際にはそれほど数学を使わなくてもなんとかなりますし（笑）。

長谷川 3年間経って、経済学部にはどんなイメージを持っていますか？

中江 部活で他学部の子たちと話す、経済は1年生のうちからゼミ対抗のディベート大会やスポーツ大会をしたり、レポートを提出したり、他学部と異なるところがあります。私が1年生



中江 美紗（なかえ みさ） 経済学部3年・本郷亮ゼミ。2015年の体育会女子バレーボール部のエース・アタッカー。勉学と部活の文武両道を実践

のときは結構頻繁にレポートを書いたので、それはすごく自分のためになりました。でもそんなこと、入学前には分かりませんよね。

根岸 いきなり何か変な創作しろ、とか言われたり（笑）？

中江 結構、楽しそうって言われますよ（笑）。

本郷 2年生の5月のゼミ選択の時期は、毎年大騒ぎしていますが、これは経済学部の特徴なのか？お祭りみたいで楽しいけど、ゼミへの力の入れ方は、経済は強烈な気がします。ゼミ間の競争が激しいというか。

根岸 商学部もすごいよね？

永瀆 経済学部は2年の秋から研究演習入門がスタートしますが、商学部は3年の春からです。また先ほど中江さんが言われたような、1年生のときのスポーツ大会やディベート大会は、商



永瀨 晶乃 (なかはま あきの) 経済学部職員 (書記)。
関学商学部出身。社会人1年目として2016年4月に入職し、経済学部事務室配属となる

学部にありません。これらのことを考えると、横のつながり、縦のつながりという点でも、商学部に比べて経済学部の方が確かにゼミ教育に力を入れていると感じます。

三上 松永君は、大学はどうやって選んだの？

松永 僕は最初に学部を決めて、それで経済学部に絞って、関関同立で考えたときに、周りの人たちに相談すると「経済だったら関学」と言われて、それで関学を受けました。ちゃんと合格できて、よかったです。やはり1年生の基礎演習が、横のつながりのスタートでしょう。スポーツ大会とかの基礎演習のイベントで横のつながりができました。これは他学部にはない、すごくいい制度だと思います。

本郷 私、25年前に関学経済を選んだ理由は、親とか周りの大人に言われた「経済は就職いい

ぞ」の一言でした(笑)。そして実際に入学してから、学部の誇りとか自覚が生まれたんですね。だから、高校生にそんなことを求めても無理ですよ。三上さんは、職員の立場から見ているのですか？

三上 経済学部に所属になり6年になります。最初に来たとき一番驚いたのは、エコゼミ委員会というものがあって、公式行事を運営したり、そういう古風なことをする学生たちが実際にいて、今どきの学生たち、今どきの先生方が、どちらかと言えばみんな嫌がってやらないことを、ずっと守り通してるところでした。それが学部の歴史、伝統というものでしょうね。

でも6年間見ていると、必ずしもそれが抜群に機能しているわけでもなくて、もちろん悩み事もあるし、改善すべき点も色々あるんです。それを知って、ちょっとホッとしたり(笑)。

こんなに古風な、昔ながらのことを真剣にやっている学部も珍しいので、一本芯が通っている学部というイメージでした。今はそれが崩れたわけじゃないけど、「おやおや？」と思うような翳ってきた部分もあり、でも将来に向けてしっかり立て直さなければという雰囲気もあり、さまざまですね。

根岸 永瀨さんの目から見て、経済学部の学生の質はどうですか？商学部と違うところありますか？ 礼儀ができていないとか。

永瀨 礼儀がダメということも、もちろんないです(笑)。私は授業に入ることではないので、単なるイメージになりますが、商学部ではあまり数学は使わず、簿記でも基本的には電卓をた

たく作業です。統計学の授業も一応あるのですが、基本的にそれらは統計学基礎とか経済学基礎など、基礎を1年生のうちに学ぶというもので、経済学部生の独自の強みは、数学を使った理論や統計の分析ではないかと思っています。

本郷 関学経済の「個性」って、厳密には存在しないかもしれませんが、たとえそうでも個性の追求は大事だと信じます。私学は個性が命なのに、国立の真似ばかりしていると関学のアイデンティティーがなくなる。いつも心配しています。

スーパーグローバル大学として

本郷 2014年秋、関学は文科省から「スーパーグローバル大学」に選ばれました。申請大学104校のうち選ばれたのは37校で、関関同立では、関学と立命だけです。選ばれた大学としての責任はスシッと重い。ダブルチャレンジ制度や海外留学派遣や受け入れなど色々改革せねばならないわけですけど、スーパーグローバルと言え、やっぱり長谷川先生のテリトリーですよ？

長谷川 ものすごい無茶振りが来た(笑)。私は主に学部留学生を担当しているのですが、留学生の声を聞くと、学習内容にはおおむね満足しています。むしろ希望・要望が出てくるのは、広い意味での大学生活の環境です。

特に多いのは、日本人学生との交流の機会が少ないという声です。留学生も「自分たちから日本人にどうアプローチしたいか分からない



長谷川 哲子（はせがわ のりこ）経済学部准教授。専門は日本語教育。主に留学生対象の科目や、言語コミュニケーション文化研究科のプログラム科目を担当

い」と感じています。またサークルやクラブに所属している留学生はいいんですが、どこにも所属していない学生の場合、同じ国の仲間であってしまい、居場所がそこしかなくて、どうしようかと悩む者もいます。

本郷 私も学部の外国人留学生を支援するの必要を感じます。とりあえず入学後に孤立しないように、互いに助け合えるようなグループ作りが一番大切だと考えまして、2016年の春学期には、学部1年の留学生全員に声をかけて、私と職員の土田さん、それから何人かの日本人学生も加わって、2週間に1度、一緒に昼食を食べながら雑談しました。とにかく彼らは異国の地で何から何まで苦労していますよ。

長谷川 留学生は、留学によってまさにダブル・チャレンジの状態にいるわけです。そこか

ら、さらに色々なチャレンジを求められて、非常に苦労していますし、努力もしています。一方、日本人学生の側にも留学生と交流したいという希望があり、日本語のパートナーとして留学生を支援してくれる学生もいます。志のある学生の間では、少しずつそういう活動が始まっています。

留学生はお客さんで、日本人側はそれを迎える人、つまりゲスト・ホストの関係ではなく、そのまま日本で就職したいという留学生は、私が着任した6年前よりも着実に増えています。そういう実感があります。

根岸 僕のゼミでも中国の留学生が2人、大学院に進みました。2人は希望通り、日本で就職しました。

長谷川 一言で「外国人留学生」と言っても、確かに入学直前に日本にやって来る学生もいますが、入学前から日本国内の日本語学校などでずっと勉強してきた学生もいますので、いきなり日本に来て、日本語も分からないという状態では全然ないのです。おそらく日本人学生の中には、留学生の日本語レベルを相当に誤解している人もいます。

ディベート大会のとき、相手チームに留学生が1人いたんです。その学生はディベートで非常に活躍して、結局うちのチームは負けたんです。そのとき、うちのクラスの学生の言葉がすごくショックだったんですけど、「何で留学生があんなに日本語ができるの?」と言うんです。

留学生と交流するとき、語の会話の練習相手という入口からかもしれませんが、そうではなく、抽象的ですけど、普通の仲間として交流

できる場を工夫してほしいなと思います。

梅木 外国人留学生については、スケート部も私が2回生のときに中国の留学生が1人入部しました。でも、ガンガンやる部では、時間の制約とか、スケート部の場合は道具や滑走費に結構お金もかかるので、残念ながらその留学生はやめてしまいました。最近も1人、確か台湾(?)の留学生の入部希望があったんですが、シーズン真っ最中だったので、試合で忙しくて、教える時間もなくて、しっかり対応することさえできませんでした。留学生にとって部活は何か役立つかもしれないので、部活したいという留学生を支援する仕組みがあれば、私たちスケート部も何か貢献できるかなと思いました。

根岸 僕の基礎演習に韓国の留学生がいて、毎回、学生に色々なことを書かせるんですが、問



梅木 恵里子（うめき えりこ）経済学部4年・前田高志ゼミ。体育会スケート部（スピード部門・主将）。勉学と部活の文武両道を実践

題意識がすごく明確なんです。韓国と日本の違いもきっちり分かっていて、日本語はときどき変な箇所もあるけど、周りの日本人学生に、とてもいい刺激になります。留学生に比べれば、日本人学生はちょっと問題意識が弱いんです。

中本 大学院では日本人よりも海外からの留学生の方が多いです。留学生が多くて、日本人が減っているのは、両者で就職事情が異なるからでしょうか？

長谷川 専門分野によって違うと思いますが、大学で日本に来て、そのまま日本の大学院に進む人もいます。

中本 先日、大学院進学相談会の相談員を担ったのですが、学部から大学院に上がる学生が少なく、大学院の魅力が高めることが大きな課題だと思いました。

本郷 関学の大学院の志願者を増やすのは難しい課題です。第1に、近年は国立が枠を広げたから、私学は減ってる。第2に、大学院修了後の就職市場も、特に研究者になるのは超氷河期。この2大要因は、私たちの手に負えないよ。

三上 現在、大学院（経済学研究科）の定員充足率は0.3ぐらいです。ただ他の研究科も似たようなもので0.3〜0.4です。専門職大学院でも0.5〜0.6。今、全体的に大学院生は減っています。

文武両道① 勉学と部活

根岸 僕は体育会の部長や会長を務め、長く体育会にかかわってきました。最近、関学ではダブル・チャレンジを重視していますが、体育会

の学生は、まさにダブル・チャレンジをしているわけですね。文化総部もサークルもそうです。これらは「正課外」活動と言われるけど、「正課内」に入れたらどうか？批判もあるでしょうけど、例えばそれらの活動を単位化したり、専門的練習法などの科目を作ることもできると思っています。練習法などは各クラブが独自にやっていますが、横のつながりも大事なので、そういう知識をみんなで共有するための科目です。

僕の息子も関学で音楽をやっています。一緒に暮らしながら見ていると、一生懸命練習して色々工夫してるんです。なんか体育会の学生と変わらないような気がして。だから、そういう活動を大学はもう少し正面から捉えるべきだと思います。司法試験をめざす者もいれば、税理士や公認会計士をめざす者もいる。ダブル・チャレンジの概念をもっと広く捉えるべきです。

中江 私もバレーボール部において、勉強と部活の文武両道について感じていることがあります。バレーボール部は2年前にサークルから体育会に昇格した一番新しいフレッシユな部です。だから、みんなバレーボールするために大学に来たわけじゃなくて、普通に勉強して入学した学生ばかりなので、「バレーボールだけやればいい」という考えではなく、文武両道を目指しています。今年からはスポーツ選抜の学生もどんどん取りますけど、私たちバレーボール部は絶対に文武両道でやっていこうと話しています。

先日、東京で全日本インカレがありました、それが平日で、勝ち進めばその間は授業を休ま

ないといけません。お金がないので、往復なんてできない（笑）。私たちは勝ち進んだので、授業を3日ぐらい休むことになってしまつて、そのとき部員の中で「テストがあるから帰りたい」みたいな話が出てきて困りました。4年生の最終試合なので「お願いやから帰らんといて」と頼んだんですけど、中間テストとかレポートとか、色んな学部の部員がいるので難しくて……

一応、欠席願いは出しますが、必ずしも受け取ってもらえるとは限りません。関学の名を背負っているのだから頑張りたいという思いはあるので、「学生の自分は勉強」っていうのも分かるんですけど、もっと配慮して欲しいなあ、どうにかできないかなあ、と感じました。

本郷 中江さんは、早稲田大学の取り組みを調べてたよね？

中江 そうです。他大学でも文武両道を掲げているところがあつて、どうやってるのかなと思つて調べてみました。早稲田大学には学生アシリート・プログラムがあり、体育会に所属する約2,400人の学生を、4年で卒業できるように支援しています。体育会学生の学業情報を全部把握して、学部と体育会の部長がつながつていて、学業をおろそかにしている学生に個人的にアプローチしたり、単位不足の学生は練習禁止とか大会出場禁止みたいな感じですよ。部活だけやればいいという甘い考えはダメ、というプログラムのようです。

関学の他の部と交流がありますが、留年しちゃつてる人が結構います。もっと忙しい部もあるのだから、ちょっと怠けてるなあと思いま

すが、実際にうまくいってない学生がいるので、学部との連携は必要かなと思います。

中本 体育会の学生さんにお聞きしたいのですが、今の授業コマ数はどれぐらい？

中江 今は授業自体あまりとってないので、勉強量はだいぶ減りました。1、2年生のときはテスト前に必死にやりました。でもそれ以外は、正直、自分からは特にしなかったです。

梅木 私も今は卒論だけで、授業が1つもないので、正直、勉強はあまりしてないです。1、2年のときははっきり学校に来てたんですけど、3年からはちよっと中だるみしました。ただ私、「経済と経済の基礎」を2回落としたので、結構勉強しましたよ（笑）。

根岸 4年生であとは卒論（研究演習）だけということ、しっかりと単位取ったということやね。それはすばらしい。しかも卒論を書くんだから、しっかりしてる！

松永 根岸先生も言われましたが、大学で「自分はこれをやり遂げた」と言えるものを持つことが大事だと思います。インゼミ大会やゼミナール関関戦を運営する側として思うんですが、毎年いつも同じゼミばかりが参加しているような気がします。もっと多くのゼミに参加して欲しい。運営側としてはそれを通じて経済学部に貢献したいと願っています。ゼミ間の温度差も大きいので難しいですが…。

あと、関学の魅力ですが、あまりこういう話をする機会もないので敢えて言えば、私立大学の強みはスポーツの占める部分が大きいので、スポーツの優遇も大事だと思います。



松永 雄太（まつなが ゆうた） 経済学部2年・古澄英男ゼミ。エコセミ委員会に所属し、学部スポーツ大会の準備等で活躍

文武両道② 優遇ではない支援

根岸 いや、僕は体育会に深く関わってきたからこそ敢えて言いますが、「優遇」には反対です。皆で一緒に机を並べて勉強するから、社会は体育会の学生を評価してくれて、それで就職も強いんじゃないかな？全然、優遇してないことが関学の誇りですよ。だから優遇じゃなくて、体育会の活動を単位化するか、一所懸命頑張っているのを少しの単位でいいから、あれ、これ優遇かもしれないな…、うん、優遇や（笑）。

批判もあるでしょうけど、彼らは監督・コーチ・OB・OGとか、大人との付き合いもあって色々勉強するわけです。上下関係も厳しく、お金も時間もかかる。それを何かの形で正式に

評価したらいい。

実はスポーツ選抜入試は、僕が入試部長のときに大学全体に導入したんです。その責任者だったんです。そのとき調べたのはデータです。エビデンスに基づいて判断したんです。エビデンスを過信したらダメだけど、1つの基準にはなる。最初は大反対されましたが、どう説得したかというところ、体育会の学生の留年率が高いけど、ちゃんと卒業してる。卒業率は一般学生と変わらないし、留年率もそれほど大きくは変わらない。そういうデータを見せたんです。エビデンス・ベースドな改革でした。

また当時は、関学の偏差値が下がってきたし、スポーツも弱かったから、多様な学生を入れて、スポーツでマスコミに取り上げてもらって、関学を元気づけようという意図もありました。入試部長として偏差値を回復させる必要があったのも事実ですが、それだけでなく、色々な学生を入れてちよっと沈んでる一般学生も元気づけようとしたわけです。皆で一緒に机を並べて勉強すれば、お互いに刺激を受けて活性化すると期待したんです。

ただ、うまくいってない面もある。体育会の学生は勉強しないとか、不祥事を起こして関学の足を引っ張るとか…。しかし一方では良い面もあります。

本郷 教員の大半はスポーツと無縁なので、体育会の学生を理解する教員は少数派でしょうね。私は体育会体操部の部長をしていて、試合とか飲み会とかOB・OG総会によく出席しますが、部の雰囲気が好きです。就職に強いのも納

得します。スポーツが関学に貢献しているのは明白なので、「優遇」以外の方法で彼らを支援する実際の工夫が必要でしょう。

根岸 昨日も基礎演習で、陸上競技部の学生が「優遇して欲しい」みたいな発表をしたんだけど、一般学生は「どれぐらい練習してるの？」と当然聞くわけです。その答えを聞いて彼らは驚く。「そんなに練習してるんか、それやったら優遇も仕方がない！」みたいな話になったけど、そこは教員としては「優遇はアカン」という結論で収めるわけです。

松永 スポーツ系科目を作るのは実現しそうですか？

根岸 体育会のOBやOGのみなさんをお願いして、学生たちに大学時代の経験とその経験がその後の人生にどのように活かしているか、話してもらっています。KGA A(体育会同窓倶楽部)寄附講座という名称で2単位がとれるんですよ。反対もあったけど、おそらく関学では初めてです。体育会OBは活躍してる人がすごく多い。しかも彼らの関学への愛着は、ものすごく強い。昔のOBは学生時代にあんまり大学で勉強してない(笑)。そういう時代でしたから。だから「今の学生は大変や」なんて言います。でも体育会の学生が社会から評価される理由は、関学の強みと実は深いところで関連するもので、しっかり考える必要があります。

本郷 僕は役職上、「退学率」にすごく注目しています。経済学部では近年、外国人留学生の値が突出していて、次にスポーツ選抜の学生が来ます。だから何か手を打つ必要がある。

三上 体育会の学生の行動は、基本的には今も昔も変わっていないと思います。在学中の4年間はスポーツを仲間と一緒にやっていますから絶対やめないし、燃えるように活動しています。むしろ単位不足で卒業できずに退学するケースが多い。だから彼らの退学の多くは5年目以降です。この場合、本人の勉強意欲がなくなったというより、経済的事情や周りの環境などが退学の主な要因と考えられます。

もちろんお金のこともありますが、最近の大学生は真面目化しているので、4年生や5年生や6年生が、1年生と一緒に基礎科目や言語科目の授業を受けると疎外感を感じて…。それでやめちゃう。

根岸 関学でプロの選手になった人もいますけど、ある人はあまり単位取らずに中退しています。私も、体育会学生本部の学生たちも、そういう学生を評価しません。文武両道ですから。プロになった人でも、ぎりぎりでもちゃんと卒業した人は高く評価します。先ほど、退学率が高まっていると聞いて残念です。でも、優遇には反対。やっぱり普通にやって欲しい。

三上 最初、この座談会にこのメンバーが集まった理由を考えてみたのですが、経済学部の目標設定と噛み合いです。

1つは、最初に根岸先生がおっしゃったテーマを持って文章を書く力ですね。経済学部では2016年から5年計画で、書く力の訓練(いわゆるライティング・アクロス・ザ・カリキュラム)に力を入れていきます。まず1年生の基礎演習で、書く力を鍛えますよね。でも2年生

以降はどうかというと、これまで学部としては何もせず、それぞれの授業やゼミに任せていました。そこで今後5年間の目標として、それを学部としてきちんと制度化していきます。

また、その今後5年の目標の中には「あらゆる学生が活躍できる学部」にすることも含まれます。長谷川先生がおっしゃった留学生の活躍も、根岸先生のおっしゃった体育会学生の活躍も、ここにいる学生の皆さんの姿も、学部としての正式な目標のひとつなのです。

多様なアクティブ・ラーニング

根岸 学生有志によるエコゼミ委員会ですが、その下に研究会みたいなものが色々できたんですよ。僕は大学でバンドの音楽活動をやったけど、大学紛争があつてやめたんです。その後、友達から「お前、遊んでばかりじゃあかんやろ」と勉強のサークルに誘われました。それが今の僕につながっています。エコゼミを基盤にして、色々な勉強会や研究会を作ったらどう？ピケティ研究会とか、学生はマンキューの教科書に苦しめられてると思うのでマンキュー研究会とか。あるいは経済学検定、統計検定、TOEICの勉強会とか。やりたい学生、多いはずですよ。そういうグループを学部として公認すればいい。昔はあつたんですよ。僕も「現代経済学研究会」かな、大学院生が指導してくれて、河野先生も一緒に勉強しました。

今では、学内にコモンズ(アクティブ・ラーニング・スペース)があります。授業だけじゃ

なく、そういう自主活動が増えれば、先輩・後輩の良い関係もできる。

本郷 エコゼミはもつと多方面に発展可能かもしれないですね。研究会も、学生に働きかければ意欲のある学生はきつと出てくるでしょう。4、5人集まったら、すぐ実現しますよ。私は学部3年のときに各ゼミに募集ビラを配って、「経済学研究会」というのを作った経験があります。常連の5人ぐらいが中心になって毎週木曜の夕方にやってきました。テキストはA・C・チャン『現代経済学の数学基礎』。今も定番の本です。各自が勉強してきたことを順番にプレゼンし合って議論するような感じでした。ときどき教員をゲストで招くこともありました。いつも試験前になると、飛び入りの学生がやたら増えちゃって…(笑)。でも上級生は下級生の面倒を見ました。独語とかフラ語も含めて(笑)。

エコゼミも工夫次第ですよ。教員がイニシアチブを取った方が早いかも。

松永 それはおもしろそうですね。

中本 私は教学補佐の一環で、経済学部棟2階の部屋で、学部生の勉強の質問を受け付けてるんですが、そこに体育会の学生がちよこちよこ来てくれます。気軽に質問できる相手がなかなかいないようです。教授だと敷居が高いですし。だから体育会の救済や優遇ではなく、勉強で困ってるすべての学生がいつでも頼れる「場」をもつと用意するのが有効かなと思います。今は大学院生がしていますが、学部の上級生がしてもいいはずですよ。

永瀆 上級生をLA(ラーニングアシスタント)

として採用して授業の補助をする動きは、経済学部では毎年増えていますのでいい傾向ではないでしょうか。

良い教員とは？

長谷川 学生のみなさんに聞きたいんですが、学生にとって教員の存在はすごく大きいと思うんですよ。でも、どんな先生が「良い先生」なんでしょうか？ 去年まで学生だった永瀆さんは、どう思われますか？

永瀆 そうですね。授業内ではなく、授業外で個人的に話を聞いてくださったり、相談に乗ってくださったりした先生が強く印象に残っています。もちろんゼミの先生にも就職活動の相談などはしますが、それ以外の先生にもお世話に



中本 雄大 (なかもと ゆうだい) 大学院・経済学研究科前期課程2年・根岸紳ゼミ。専門は計量経済学。経済情報処理入門でお馴染みのお兄さん

なりました。

中本 私が心から尊敬する先生は根岸先生ですね(笑)。先生にはずつとお世話になりっぱなし。

根岸 反面教師(笑)。

中本 根岸先生は教員であるだけでなく、父親のような存在で、学生の立場に立って親身に相談に乗ってくださり、的確にアドバイスしてくださる。本当にすばらしい先生です。先生を慕う学生は私だけでないですよ(笑)。

根岸 褒めすぎや。安心して定年を迎えられる(笑)。

梅木 学部の講義は、学生が多いので、私自身、あまり先生と個人的に深くかわる機会がなかったので残念です。実際、就職活動のときに「一番に残っている授業は？」と聞かれて、本当に頭に浮かばなくて。そのとき、ふと思い浮かんだのは、2回単位を落としたり「経済と経済学の基礎」でした。そう考えたら、甘やかしてくる先生ではなく、しっかりと自分を叱ってくれて、「ちゃんとやれ！」と叱咤激励してくれる先生の方が「良い先生」というか、学生を成長させてくれる先生かなと思います。小中高でも、やっぱり一番心に残っているのは、しっかりと自分のことを怒ってくれた先生なので、そういう先生が自分にとっては一番大きい存在です。

中江 大教室での講義が多く、私も質問などにあまり行かないので、先生との関わりが少ないのですが、ゼミや言語は少人数なので、よく教授のところへ行きました。言語の先生に「中国語をもつと勉強したい」と言ったら、本を貸してくださったり、メールで相談に乗ってくだ



さったり。個別に対応してもらおうと、すごく印象に残って、何かあったときにその先生に頼りたいなと思います。そういう先生が数人います。松永 僕は、中高でずっとラグビーをしていたのですが、部活をしているからといって、学業面で手加減してもらえないわけでもありません。先生に反抗といったら変ですけど、ずっと苦労して頑張ってきて、あまり良い印象を持っていませんでした(笑)。もともとと理系だったんですが、理科が全然できなくて。

しかし中学でも高校でも、1人か2人の先生は、ずっと親身に「大丈夫か？」みたいな感じで指導してくれました。大学でも、心配して声をかけてくれる先生がいました。自分から教員にアプローチしていくのも大事ですけど、たまに気にかけてくれて連絡をくれる先生がいると、やはり嬉しいんです。

長谷川 皆さんに「良い先生」について尋ねた理由は、私は経済学が専門ではないので、例えば基礎演習などで、どのように学生と関わればよいのか分からないときがあるからです。今、お話を伺うと、まずは個人的コミュニケーションの機会を増やすことがすごく重要なんです。私自身の意見としては、同世代の学生どうしではなく、なるべく自分と違うところをたくさん持っている人と接すると、色々な発見があると思います。学内だと、職員や教員など自分と立場の違う人と接することで、いろんな刺激をもらえるんじゃないでしょうか。

本郷 世代の違う人や、とにかく自分と違う人と会話するときは、すごいボキャブラリー力が必要だったりしますよね。ボキャ貧も解消される。長谷川 共通点の多い人どうしなら、ストレスなく会話できますが、共通点のない人、例えば留学生などと会話して、互いに理解し合うこともチャレンジになると思います。

根岸 そのために勉強するんだと思うけどな。勉強、大事です。学生どうしの出会い、教職員との出会い、色々な社会人との出会い。とても大事です。

本郷 ところで根岸先生、御定年を迎えられた

後の計画などは、何か立てておられますか？

根岸 ありがとうございます。実は小説でも書こうかなと思って…。いや、冗談ですよ(笑)。実は、僕のゼミは卒業生が29期生まで、もう700人近くいるんです。その連中を一人一人、訪ねてみようかな。僕の夢です。とにかくコソクトをとりたい。よく連絡をとっている人はいいのだけど、一番気になるのは、おとなしかった、あまり関わりのなかった、僕とあまりしゃべらなかった学生、それから留年してしまった学生、それから残念ながら留年して退学してしまった学生です。ものすごい気になります。

根岸ゼミのホームページがあるんです。あまり活用されていないけど、僕が書き込むこともあります。それを密かに見てくれてるのが、足跡で分かるんです。ゼミで目立たなかった何人かが見てくれる。それは嬉しいですよ。見てくれるのは分かるけど、学生のアドレスは分からないんです。そういう学生たちから、まず会ってみようかな。どんな人生送ったのか、今どんな生活してるのか。これが僕の定年後の一番の仕事かな。ちよつと格好良すぎるような気がするけど(笑)。

本郷 根岸先生、ありがとうございます。感動的な話で締めてくださいました(笑)。では、これにて今年の座談会を閉会したいと思います。

根岸 最後に、今一番、期待するのは学生です。学生が主役！関西学院大学経済学部は、みんなにかかっています。よろしくお願いします！

2016年
6月8日
水曜日

井口 泰 教授（労働経済学）

「宗教改革500周年を迎える欧州と世界」

2015年に、内戦と空爆の続くシリアなどから、難民又は庇護希望者を合わせ120万人を超える人々が欧州諸国におしよせました。同年9月、ハンガリーが難民受け入れを拒否し国境で人々が滞留するなか、メルケル首相はドイツが難民を受け入れることを明言しました。同時に、年間3千人以上が、悪天候の地中海で命を落とす悲劇も起きていたのです。

あの時、メルケル首相は、これは、「私たちが、幼少の時から学んできたことなのです」と語りました。これとは、マタイによる福音書25章31節から40節をさしています。皆さん、その聖書の箇所をどうか読んでください。これは、最後の審判の情景を語ったイエスのことばです。

「王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎ

なさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』そこで、王は答える。『はつきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

メルケル首相の決断を知らなかった州や市町村は、難民の大量流入で一時的にせよパニック状態に陥りま

した。しかしドイツ各地で、数十万人のボランティアが、難民や庇護希望者の生きる日々を支えました。同時に、フランスで2015年1月にシヤリーエブド事件、11月にパリ同時テロ事件がおき、難民受け入れがテロや治安悪化をもたらすという懸念が、ドイツでも急速に広がりました。2016年3月、EUとトルコは協定を締結し、巨額の財政支援をトルコに与え、EUに不法入国した人々をトルコに強制送還する一方、同数の第三国定住難民をトルコから受け入れることにしました。

難民とテロとは、本来別の問題です。難民という集団を敵にして攻撃する発想にはあまりにも危険です。そうしたなかでは、社会の寛容や人権に対する強い思いは後退していくでしょう。

こうしたなか、ドイツ連邦議会は、1517年のマルチン・ルターによる宗教改革500周年を祝うべ

きか否かについて1年半も議論しました。宗教改革後の「30年戦争」よって、当時は複数の国家に分かれていたドイツの地域が疲弊する悲惨な結果を招いたことも事実でした。しかし、宗教改革が欧州だけでなく、世界的意味をもった大きな社会運動であり、人々が問を発して自ら考え、不寛容を克服することに重要な意義があるからこそ、世界に積極的に発信することにしたのです。

私は、単に歴史的意義を強調する理由から、皆さんに宗教改革のことを考えてほしいのではありません。ルター自身が殺害や迫害の恐怖のなかで、いわば社会のアウトサイダーとなりながらも、新しい時代を切り開く挑戦者になった勇気を皆さんに感じてほしいのです。同時に、世界で増加する難民の運命を理解する共感を育てることで、新たな時代を開いていきたいと思えます。

2016年
6月13日
月曜日

生命が永続しない個体にとって時間は希少資源だ。一日には24時間しかなく、誰しもいつしか命の終わりを迎える。それ故に時間を無駄にすべきでないとかわかってはいても、改めて時間について考えてみる機会あまりないかもしれない。それこそ「そんな事をしている時間はない」という事だろうか。

経済学では様々な取引について考察するが、その中で時間はどのような意味を持つだろうか。経済学の根底には、需要と供給のバランスが価格を決め、その調整が効率的な資源配分を促すという市場の視点が据えられている。その際、需要側と供給側を分ける境界線のようなものを想像してみよう。例えば国際貿易の場合は、需要側と供給側は目に見える国境という仕切りによって隔てられている。同じ様に需要側と供給側が

藤井 英次 教授（国際金融論）

時間と金融：未来の自分からの贈り物、未来の自分への贈り物

時間によって仕切られた取引を考えると、それはできないだろうか。意外に感じるかもしれないが、実はそれはごく身近にあって皆さんも既に関わっている、或いは今後関わる可能性が高いものだ。

誰しも金融という言葉は良く耳にするだろう。金融機関は就職先としても人気が高いし、キャンパスのATMに学生が列をなしている光景をよく目にするが、それはとりもなおさず金融取引がごく身近に行われていることを示している。銀行に預金をして、将来その元利を受け取る。奨学金を借り入れることで進学を可能にし、大学でしっかりと学ぶことで自身の能力や人間性を磨き、生産性を高めて卒業後良い職に就いて奨学金を返済する。或いは、住宅ローンを借り入れてマイホームを購入し、より良い住環境を享受しつつ働

きながら少しずつローンを返済していく。これらは全て身近にある金融取引だ。

一見したところ金融取引とは、自分と金融機関等との間の取引に見える。しかしよく考えてみると、奨学金の例では今自分が手にしていない所得を将来自分が手にする所得から返済することを条件に進学を可能にするわけだ。つまり将来の自分から一時的に借り入れをしている事になる。マイホームローンの場合も同様。反対に定期預金の例では、現在使用可能な予算の一部を使う事を諦めて、その代わりに将来の自分の予算を増やしていることになる。つまり将来の自分に融資をしているわけだ。このように考えてみると、金融取引とは現在の自分と将来の自分が取引をする行為であると解釈できる。誰しも人生の各時点で様々な予

算の制約に縛られて暮らしているが、金融は時間を超えて自分自身と貸借することを可能にしてくれる。つまり時間で区切られたいくつもの予算制約を、時間を跨いだ制約に取りまとめめることで、より柔軟な生涯設計を可能にしてくれる。

多くの学生がそうであるように今貴方が借側にいるのなら、未来の自分に感謝してその借り入れを精いっぱい有意義に活用しよう。せっかくならと与えられた資源を浪費していると、未来の自分が悲しむはずだ。なぜならその借り入れを返すのは他ならぬ未来の自分なのだから。逆に少しばかり節約をすることで貸側に立てる時には、将来しっかりと結実する贈り物となるよう未来の自分にエールを送ろう。その地道な投資に、きっといつか自分自身が感謝する日が訪れるだろう。

2016年
6月14日
火曜日

田畑 顕 教授（経済成長論・公共経済学） 障害者雇用率制度を考える¹

障害者雇用率制度とは事業主に対し障害者の雇用を法定雇用率（2・0％）の水準まで義務付ける制度のことである。法定雇用率に達しない事業主はその不足分に応じて1人当たり1カ月5万円の障害者雇用納付金を支払わなければならない。一方、法定雇用率を超えて障害者を雇用した事業主はその超過分に応じて1人当たり1カ月2万7千円の障害者雇用調整金を受け取ることができ、企業に対して一律に障害者の雇用を義務付けることは、社会的な責任を公平に分担するという観点からみれば望ましい。しかし一定数の障害者の雇用を社会全体で最も低い費用で達成するという観点からみると必ずしも望ましいものとは言えない。例えば労働災害の発生確率が高い運輸業の職場と事務作業を行う職場を比べれば、事務作業を行う職場

の方が障害者を雇用するコストは低い。そのため事務作業を行う職場で、より多くの障害者が雇用されている状態が効率性の観点からは望ましい。しかしこの場合、一部の企業だけに障害者雇用のコストが集中することが問題となる。企業間の公平性を保ちつつ、なるべく低いコストで一定数の障害者向け雇用を作り出す最も単純な方法は、企業に障害者雇用の枠を平等に割り当て、その達成を義務付ける一方で、企業間でその雇用枠の自由な売買も許すことである。障害者雇用のコストが高く、法定雇用率を満たすことができない企業はこの雇用枠を他の企業から買えば、法定雇用率を満たしたとみなされる。一方で、法定雇用率以上の障害者を雇っている企業はこの雇用枠を他の企業に売ることができ、結果として、障害者雇用が容易な企

業では法定雇用率以上に障害者が雇われ、逆に障害者雇用が困難な企業では法定雇用率以下しか障害者を雇わないものの、枠の購入を通じた金銭の支払いを通じ、障害者雇用の費用を公平に負担する。現行の制度も政府が法定雇用率以上に障害者を雇っている企業には調整金を支払う一方で、法定雇用率を満たしていない企業には納付金の支払いを課しているのが、実質的には上記の雇用枠売買制度と似た構造となっている。しかし、法定雇用率が満たされないときの納付金が5万円であるのに対し、枠を超えて雇った場合の調整金が2万7千円に過ぎない。そのため障害者雇用の限界費用が2万7千円以下の企業にしか法定雇用率以上に障害者を雇用するインセンティブが働かない。また目標の法定雇用率の水準に応じて調整金や納付金の水準

を調整する仕組みも導入されていない。どのような能力の人であれ、適切な分業体制さえ整えることができれば、比較優位に応じた生産活動に参加することで、社会に貢献することができ、適切に設計された障害者雇用率制度は、各企業に「障害者の比較優位にあった仕事」を切り出すインセンティブを与え、結果として、より多くの障害者に自らの比較優位にあった仕事へのアクセスを容易なものとするだろう。

1 以下の議論は大内伸哉、川口大司（2014）「法と経済学で読み解く雇用の世界」（有斐閣）および中島隆信（2011）「障害者の経済学」（東洋経済新報社）を参照した。

2016年
6月20日
月曜日

國枝 卓真 准教授（マクロ経済学）

自分を育てる三つの法

今から30年位前、友人たちと週一回誰かの下宿に集まり、新聞記事や雑誌の記事、時には専門書のコピーなどを持ち寄って、政治や経済、はたまた人生や天下国家について等々、夜更けまで議論するという機会を設けていた。あるときメンバーの一人が、かつて恩師から聞いたという「自分を育てる方法」という話を持ってきた。議論の詳細は忘れてしまったが、そこで述べられていた方法というものは今でも覚えており、これまでそれほど意識はしなかつたものの、時折思い出しては反芻することがあった。メンバーの一人が持ってきたこの題材には三つの方法が述べられており、すべてのものを捨て去った後で、それでもなお残る三つのポイントであるとのことであった。

一つ目は、美しいものを感じることに。世の中には美しいものが数多く

ある。自然の美しさは観る者を圧倒する。また、美しい音楽、美しい数式、美しい理論、美しい花、美しい絵画など、観る者を圧倒するものは他にもたくさんありそうだ。個人的な感覚だが、美しいものにはすごいエネルギーが秘められていて、それに触れると理屈抜きに自分自身が素直になれるような気がする。この素直になるという感覚が重要だと思う。美しいものを美しいと素直に感じる心を保つことができれば、身近にある優れた人や優れた技術を素直に賞賛し、さらには自分の中にある優れた才能に気づくこともできるのではないかと思う。

二つ目は、常識を吹き飛ばすようなことをする。これは、世間からお叱りを受けるような非常識なことをしるというのではなく、日常生活では考えもつかないような体験をせよと言うのだろう。常識を吹き飛ばす

ような体験によって、自分の限度や新しい価値観を見つけることができているのではないかと思う。人間の成長には、物事のギリギリのところを見たり感じたりすることが必要なのではないか。例えば、私が通っていた高校では年に一度50キロ走るマラソン大会があった。中学を卒業したばかりで50キロ走れと言われたときには、マラソン選手でもないのにできるわけではないと思っただが、それでもやってみると思いのほか走れたりして、二年生、三年生になると50キロが普通になってくる。大学生、社会人になるにつれて様々な制約により、日常を離れて常識を吹き飛ばすような体験をする機会がますます減ってくる。それでも、そのような体験は、我々の成長には必要なことだと思う。

三つ目は、本を読む。私自身は熱心な読書家ではないが、本を読むと

いうことは、本の中の人物を見るという意味で大変重要なことだ。本の中で出会う、自分とは違う考え方やアイデアなどは、現実として直接影響を受けるものではないが、一冊の本が人生を変えてしまったということもよく聞く。社会人になると、なかなか集中して読書をする時間が取れなくなるかもしれないが、一週間に一度くらいは心の時間というものを決めて、落ち着いて読書でもしてみようということは大切なことなかもしれない。

メンバーの一人が持ってきた「自分を育てる方法」を紹介したが、心の片隅にでもおいて、ふとした時に思い出して、自然体で試してみたら試してもらえればいい。

2016年
6月21日
火曜日

久保 真 教授（経済学史）

「良き社会」の構想者としての 経済学徒

私は、十八世紀から十九世紀の西
欧で、経済学という学問が産声を上
げてよちよち歩きを始めた頃のこと
を研究しています。十八世紀から
十九世紀といえば、アメリカ独立や
フランス革命といったそれこそ世界
史的な大事件が次々と起こるのです
が、黎明期の経済学は、当時の国際
的・国内的な政治状況に対応しつ
つ、また他方でそうした政治状況に
一部影響を与えつつ、育まれていき
ました。経済と政治との関係や理念
の組み合わせは極めて多様であった
わけですが、だからこそその関係は
常に緊張を孕んだものとなりました
。当時の経済学者たちはまず何よ
りも「良き社会」を構想するいわば
「社会哲学者」と言うべき存在だっ
たのです。

実は、現代の経済学者たちも、のっ
ぱりした無色透明な人たちではあり
ません。例えば、ノーベル賞受賞者

であり日本でも有名なステイグリッ
ツやクルーグマンは、アメリカでは
リベラル派を代表する経済学者で
す。他方、皆さんも使っている教科
書を執筆したマンキューという人
は、保守派、共和党系の経済学者と
して知られています。実際、マン
キュー自身、次のように言っていま
す。「経済学者が、本当は隠してお
きたい秘密をお教えしよう。「経済
学者は、」経済学者としてだけでな
く、政治哲学者としても話をしてい
るのだ。つまりは、世界の仕組につ
いての理解だけを基に提言を行って
いるのではなく、どうすればよい社
会を築けるかという自らの判断もそ
こに加えている」のです。が、これ
が「隠しておきたい」ほど不都合な
真実であるのはなぜか？ マン
キュー自身も教科書ではそうしてい
るように、経済学は科学なのだ、理
論とデータに基づいた全く客観的な

学問なのだ、と初学者たちに繰り返
し語っているにも関わらず、実際
は、自らを含め経済学者は「良き社
会」を構想し、主観的な判断も厭わ
ず「哲学者」でもあるからでしょ
う。でも、私に言わせれば、これは
不都合な真実などでは全くない。む
しろ、経済学という学問の豊かな伝
統に連なっている証拠ですらあるよ
うに思っています。先述のように、黎
明期の経済学者たちは、何よりも「良
き社会」を探究した社会哲学者だっ
たのですから。

経済学は社会の構造や根本を分析
するに非常に鋭利なツールをいろい
ろ提供してくれます。そのお陰で、
できることとできないことについ
て、明確な結論を引き出すことがで
きる場合も少なくありません。しか
るに、具体的な状況においては、こ
うしたできることとできないことは
は、集合的な形でトレードオフを構

成します。つまり、Aを優先すると、
Bを犠牲にせざるを得ず、Bを優先
すると…、というような形です。そ
の場合、何をどれくらい優先すべき
でしょうか。単なる個人の好みを超
えて、がしかし他方で、単純な多数
決ではなく、「良い社会」のあり方
を指し示すことはできないでしょ
うか。実は、こうしたことこそ、経
済学者たちが社会哲学者として長きに
渡って取り組んできたことなので
す。知人の思想史家によれば、現代
は、「それが答えだ！」と言ってみ
んなを従わせることはできないけれ
ど、「みんな違ってそれでいい」な
んて言ったら社会が成り立たない、
そういう時代だそうです。もし彼の
時代認識が正しいとすれば、まさに
経済学を経て考え抜かれた「社会哲
学」こそ今必要とされているのでは
ないかと思うのです。

2016年
6月22日
水曜日

日本は中国と米国とのあいだに、古典を共有した思想と竜攘虎搏の歴史をもっている。目の前にある現象だけに幻惑されて、文化や経済や外交関係の奥行きをさぐる努力を怠ってはいけない。今回は中国と米国の企業観について平明に思索したい。

中国の近代産業は国有企業とともに産声をあげる。その素地は、すでに1661年成立の清王朝期の文化的な深さに求められる。『康熙事典』や『四庫全書』にみられるように、康熙・雍正・乾隆三代は、今日の学芸や産業の基盤に資する多くの遺産を残している。時代は折しも欧州産業革命期、乾隆帝は英国使節団に対し中華思想で望み、列強は武力による開国要求をなす。1840年、第一次アヘン戦争によって侵略は本格化する。『原道救世訓』を著した洪秀全が太平天国の乱をおこす。天朝田賦制度を公布、「三綱五常」を厳しく批判し、世界大同を目指す。この燎原の火のごとく広がり鎮圧を

桑原 秀史 教授（経済政策）

中国と米国の企業観について — 思想的思索 —

はかったのが曾國藩・李鴻章らである。この清朝政府の官僚であった曾國藩・李鴻章らによって1860年代から始められた洋務運動は、国有企業の設立を目的達成の政策手段としたのである。この思想は、一方で欧米の西洋科学の吸収を目指しつつ、他方で、曾國藩の『曾文正公全集』や康有為の『春秋蕙氏学』にみられるように、桐城派を継承し、護教的な朱子学の立場をつらぬいていく。わたしは北京大学やハーバード大学の研究所で当全集などを勉強するうちに、中国の士大夫の教養の根幹である『詩経』のゆるぎない思想が、脈々と流れていることに感銘を受けた。政治運動に徹するときにも、『詩』に興り、礼に立ち、楽に成るの姿勢であるうか。さらに李鴻章は直隸総督兼北洋大臣となり、25年間清の外交を担当する。中国の近代工場を建設し、艦隊を編成、江南機器製造総局などを設立し、近代産業育成政策の契機を固めていく。

この動きに対し「中体」から改革をうながすものが康有為、梁啓超を主導者とする変法自強派である。康有為は前漢の今文学派の説を奉じ、「平等」・民権思想を孔子の理想としてとらえる。中国の専制体制はフランスなど西洋にくらべてはるかに温和であり、社会は本質的により平等であると考えている。梁啓超はルソーの民約論をひきながら、欧米諸国の「帝国内性」を強く警醒している。この「大同」の流れをくみ、光緒帝のとき政務に参画した譚嗣同は、『仁学』のなかで礼にもとづく自己抑制と他者への思いやりを、儒家道徳思想の中心にすえる。気持を同じくする龔自珍は『己亥雜詩』のなかで、鋭敏な感覚で大変革の到来をうたっている。

「九州の生氣 風雷を待み 万馬 齊しくおしだまり ついに哀れむべし。 我れ天公に勸む 重ねて抖擞して 一格に拘らず 人材を降せ」と。

変法体制は百日維新で終わるが、康有為の変法運動は歴史の流れのなかで一定の進歩的な意味をもっている。「官督商弁企業」など知ると、もとより清朝政府には国有企業を民間主導の資本主義の起爆剤とする意図はなく、むしろ近代工業樹立の政策目標を実現する手段でとらえていたと思われる。

ここでの企業観は慧遠の思想に通じる。「子夏曰く、君子信ぜられて而して後に其の民を勞す。未だ信ぜられざれば、則と以って己をやましむと為す。信ぜられて而して後に諫む。未だ信ぜられざれば、則ち以って己を誇ると為す。」

以上のように、郷鎮企業の発展や放権譲利の改革など、その真意を検討するとき、中国の企業観には、米国とは異なる、ふかく『仁学』と「和諧社会」の思想が根ざしていることを覚えておきたい。

2016年
6月27日
月曜日

クラクションは必要か？

松枝 法道 教授（環境経済学）

ある休日の朝、大変腹の立つ経験をした。息子と信号機のある横断歩道で信号待ちをしていると、突然私たちに向かって走ってきた車にクラクションを鳴らされた。知り合いがあいさつで鳴らすような「かわいー」クラクションでもなかったの、訳もわからずに周囲を見回すとその車は道路わきのガソリンスタンドに入りたかったのだということが分かった。ガソリンスタンドの入り口が点字ブロック付きの横断歩道と一緒にというのも理不尽な話だが、その時は平気でクラクションを鳴らし、道を空けても一礼もしないドライバーにむしように腹が立った。

私は自分が運転するときには、決してクラクションを鳴らさない、というか、鳴らせない。あのけたたましい音を出して、通行人や他の車を威嚇して何の得があるのかと思う。先を急ぐ上に、車という密閉された、それでいて、うまく意思疎通のとれない他のドライバーと関わりなければならぬという状況の特性によって、「性格が豹変して乱暴になる」とか、「本当の性格がでる」というのはある程度は理解できる。とはいえ、わざわざあの威嚇音を出すためにハンドル中央のブザーに手をかける神経は想像できない。

そもそも車を安全に運転するうえでクラクションは必要なのだろうか？道路交通法では基本的に普段はクラクションを鳴らしてはいけないと規定されているが、逆に鳴らすことが義務とされているのが、峠のカーブなどで対向車が確認しづらいときである。しかし、今となってはセンサー技術を使った信号装置を設けることは簡単だろうし、それこそ、最も安全な運転はスピードを落として集中し、対向車が来る可能性を頭に入れ

て運転することであろう。ちなみに、あの挨拶代わりのクラクションはどうか？それに代わる行為はいくらでもあろう。一般的なドライバーにとってクラクションがどうしても必要という状況が私には思いつかない。

しかし、私の想像力は大了したことがないのも事実だし、クラクションの実用性を高く評価している人もいるのかもしれない。いろいろなタイプの人間がいるときに、社会として望ましいクラクションの使われ方を実現するにはどうすればよいのだろうか？私は個人的に「クラクション税」の導入を提唱する。一度クラクションを鳴らすたびにクラクション・メーカーが進んで、車検の時に一回のクラクションにつき100円を徴収する。この税金の根拠は環境税と同じである。クラクションを鳴らす人は、自らの行為が第三者に与える影響を考えていないので、その迷惑料を徴収することにより、社会全体の幸せの合計を増やすような行動を促そうとするものである。クラクションが禁止になったわけでもない、鳴らすのに100円を超えると、鳴らすのに100円は鳴らし続ける。しかし、私は100円という低額でさえも、威嚇のためのクラクションに限っては激減するのではと推測する。

私が一番おぞましいと感じる光景は、クラクションに対して、クラクションで対抗している姿だ。対応を誤ると暴行や、時には殺人につながることもあるようだ。私の心理的苦痛を和らげてもらうためにも早くクラクション税を導入してほしい。私にとつてはクラクションが鳴り響く光景は殺伐である以外のなにもでもない。

2016年
6月29日
水曜日

秋吉 史夫 准教授 (金融論)

マイナス金利の話

金利とは、お金を使うことを我慢して他人に貸したことで受け取る報酬といえます。したがって、他人に貸したお金は増えて戻ってくるのが通常であり、この増えたお金の分が金利になるわけです。しかしマイナス金利の世界では、この常識が通用しません。お金を使うことを我慢して他人にお金を貸したのに、お金は増えるどころか減って戻ってくるのです。

この奇妙なマイナス金利が見られるようになったのは、日本の中央銀行である日本銀行(日銀)が始めたマイナス金利政策がきっかけです。日銀は、銀行の銀行として民間銀行のお金を預かっています。これまで日銀は、この預り金に対してプラスの金利(0.1%)を付けていました。しかし、2016年2月から預り金の一部に対してマイナス金利(-0.1%)を付けるようになったのです。

なぜ日銀はマイナス金利政策を始めたのでしょうか？これは日銀が、世の中に出回るお金の量を調節して物価や景気を安定させる金融政策を担っていることと関係があります。日本経済はここ20年ほど、物価が下がり続けるデフレに苦しんできました。このデフレを解決する方法の一つ

が、世の中に出回るお金の量を増やして経済を活性化することです。これまで日銀は世の中に出回るお金の量をなんとか増やそうと、民間銀行に大量のお金を出し続けました。しかし企業への貸し出しに慎重な民間銀行は、日銀から受け取ったお金を貸し出しにまわさず、日銀に預けっぱなしにしたのです。このため、デフレの解消はうまくいきませんでした。そこで次の一手として日銀が採用したのがマイナス金利政策でした。マイナス金利であれば、民間銀行が

日銀に預けているお金はどんどん減っていくことになりました。日銀からお金を引き出して現金に換えれば、お金の目減りを防ぐことができます。しかし民間銀行が日銀に預けているお金は、マイナス金利が適用される預金だけでも20兆円

(2016年5月現在)という大変な金額であり、現金の保管費用を考えると難しいものがあります。日銀に預けたままではお金が減っていくということになれば、民間銀行は多少無理しても企業へ貸し出そうとするかもしれません。そうすれば世の中にお金が出回り、デフレが解消されるかもしれません。これが、マイナス金利政策のねらいなのです。では、私たちが民間銀行に預けている預金にも、いずれマイナス金利が適用されるようになるのでしょうか？ 断定はできませんが、私たち

の預金の金利がマイナスになることはないと思います。預金者は容易に預金を現金に換えることができるからです。日本の1世帯当たりの預金額は650万円程度であり、現金の保管費用はそれほどかかりません。したがって、もし預金がマイナス金利になれば一斉に引き出され、銀行の経営が立ち行かなくなる恐れがあります。このため、民間銀行が私たちの預金にマイナス金利を適用することは難しいと考えられます。

私たちの預金の金利がマイナスになることはなさそうですが、日銀のマイナス金利政策は、銀行や企業の活動に様々な影響を与え始めており、思わぬところで私たちの生活に影響が出てくるかもしれません。今後しばらくは、経済の動きを注意深く見ていかなければならないと思います。

2016年
7月4日
月曜日

上村 敏之 教授（財政学）

依存と自立

です。

別のアルバイトで、私は学習塾の先生もやりました。生徒に教えるということが、いかにしんどいか、それによって所得を得ることが、いかに大変か、そのアルバイトで知りました。とても苦しい経験でしたが、その時の経験が生きています。おそらく、苦労や悩みが、私自身の自立に深く関係したのだと、いまは思っています。

教習所で初めて車に乗り、ハンドルを握り、アクセルを踏むと、車が動きました。このとき、私は感動とともに、恐怖を覚えました。命を奪う凶器にもなってしまうかもしれない車を、ひとりの人間が動かしているという恐怖でした。

この3つの経験は、すべて私が大学1年生のときの出来事です。皆さんは、自立を実感した経験がありますか。できれば思い出して、あの経験は自分の自立につながる経験だったということ、整理してみてください。

皆さん自身も、例えば塾の講師のように、子どもの自立に関わるアルバイトをされている人もいるかもしれません。考えてもらいたいのは、過度な依存は自立をもたらしません。その瞬間はよくても、時間がたてば何も残りません。

会社などの職場でも、部下を育てようとしてがんばったけど、部下が育たないのは、その人に原因があるかもしれません。部活やサークルでも、同様のことがありませんか。教えることが、必ずしも自立をもたらしわけではないです。依存をもたすことすらあります。

私が専門とする財政においても、起こり得ることです。国や地方自治

私が、ひとりの人間として、そして、大学教育に関わるものとして、いつも向き合っているのは、「依存と自立」なのではないかと思えます。大学生のみなさんは、社会に出る前の、最終的な自立の階段を上ろうとしています。社会にでて、所得を得るようになれば、いわゆる経済的自立になりますが、その経済的自立を得る前に、どのような自立が、大学生である皆さんに、実際に生じるのでしょうか。

私自身が大学生であった頃、自立しているなという実感があつた出来事が、いくつかありました。大学に入る前の春休みに、各地の中学校に、体操服を販売するアルバイトをしました。手渡しでいただいた給料袋に入っているお金をみて、えらく感動した思い出があります。思えば、この感動が自立の実感だったの

体は、よくNPOに補助金を給付することがあります。もともと、NPOは、何らかの社会的な目的をもって結成され、活動している団体で、この意味において自立しています。そこに補助金が入ってきます。すると、NPOの組織が補助金に頼るようになり、補助金がなければNPOを運営できなくなる可能性があります。しまいに、補助金をとってしまふことすらあります。こうなれば、もともと自立していた組織が、行政に依存するようになります。

皆さんの部活やサークル、アルバイトやゼミなどでの悩みや経験は、「依存と自立」に関わる問題だと考えてください。そして、皆さんの周りの人々の自立に、皆さん自身が関わっていることを意識する。このことが、大切だと思います。 ■

2016年
7月5日
火曜日

貧しい発展途上国に、いきなり最先端の科学技術を提供しても、結局、根付くことなく無駄に終わってしまうように、基礎学力もない小学生に大学での専門的な内容のことを教えても、全く意味がありません。段階的な対外援助の進め方と同じように、学び方や教育にもステップがあります(表 参考)。対外援助の最終的な目標は、途上国において自立した経済社会が成立することであり、教育については、学生の自立(自律)した学びが達成できるかどうか、と言うことです。大学教育の主な目的は、「学ぶ力」の涵養です。とりわけ、短い4年間だからこそ、「深い学び」や「生涯にわたる学び」を身に付けてもらいたいと望んでいます。

ところが、特に21世紀に入り、グローバル化とネットの深化とともに、大学そして教育の場が、「市場の原理」や「ビジネスの論理」が侵入してきているように感じられます。つまり、目先の結果を重視し、短期的な利得を追及するかのようになり、学びが近視眼的、そして目的化

利光 強 教授(国際経済学)

大学における教育について考える

してきているように思えます。「この科目を履修して、何か役に立つのですか?」という質問は以前からありましたが、近年、そうした傾向が強まっているように思えます(経済学部の学生が、「費用対効果」の観点からこうした質問をしたならば嬉しい反面、一教師としては、多少複雑な気もします)。

別の観点から言えば、人間社会は経済(市場メカニズム)だけで機能しているわけではなく、様々な経済以外の要因や制度によって成り立っています。しかし、教育機関が人的資源の生産工場と位置付けられ、大学がグローバルな市場競争に勝ち抜くために世界基準に適合した人材を育成栽培するビニールハウスに変わっていくつあります(ただし、このグローバル化とネットや世界基準とは、結局のところ、東西冷戦後におけるアメリカナイゼーションを意味すると考えます)。確かに、外に目を向け、幅広い視野を持つことは大切です。しかし、そうした視野を持つためには、様々な学びや経験を通じ、少し

ずつ時間をかけてゆつくり醸成していくことを忘れてはいけません。グローバル化の大きな流れのなかで、教育という社会的インフラストラクチャーが徐々に崩壊しつつあり、大学での研究・教育の在り方が大きく変容し始めています。そのことを多くの大学人が気付いており、そのことを多くが、それへの批判・

反対の声はグローバル化の大合唱の前にはあまりにも小さく、他の人には聞こえていないのかもかもしれません。

チャペル講和なので説教のようになってしまいましたが、同じ大学の構成メンバーである学生の皆さんにもご理解して頂きたいと思えます。

	対外援助	教え方と学び方
第1段階	魚・食糧の供与(資金援助)	・ 正解を教える。 ・ 教わったことをそのまま丸呑みにする。 ⇒知識を得ても、その知識が蓄積されいかない。 ⇒「学び」という行為がない。
第2段階	釣り竿の提供と使い方の指導(インフラ整備、プラント供与)	・ 一般的(標準的)な教科書を使って、問題の解き方を教える。 ・ 教わった解き方に従って、自分で問題を解く。 ⇒一般的(常識的)な知識は蓄積されるが、応用できる範囲が狭く、様々な状況に適応できない。 ⇒すぐ役に立つ結果を求める学び(狭く浅い学び、短期的な学び)。
第3段階	釣り竿の作り方の指導(技術援助)、そして自立	・ 専門的(応用的)な文献(先行研究)に基づいて、様々な問題があることを教える。そして、正解が必ずしもあるわけではないことや、いくつもあることを教える。 ・ 自分で様々な問題を考え、答えを探す。間違えたりすることもある(試行錯誤による経験知の向上)。 ⇒自分で考えることにより知識が定着し、それに基づいて独自の考えが生まれ、新たな知識として蓄積されていく。 ⇒すぐには結果が得られない学び(深い学び、生涯にわたる学び)。

2016年
7月6日
水曜日

本郷 亮 教授（経済学史）

わが座右の書 — 聖書と史記 —

ここで言う「座右の書」とは、単なる愛読書ではなく、生きるなかで悩みや怖れにぶつかったときに手に取る「人生の指南書」であり、いわば、いざという時の相談相手、助言者、さらには人生の師でもある。

皆さんにはそのような本がありませんか？おそらくないでしょう。私も20才頃には、愛読書はありませんでしたが、座右の書は定まっています。それは、一般にその年頃の若者というのは、まさに「可能性のかたまり」であり、努力次第では人生の可能性はほとんど無限大です。関学生ならば、なおさらです。すなわち皆さんは、人生の激動期・成長期の真っただ中で、己の生き方を暗中模索している。今は、座右の書を定めるどころか、むしろ「何か」を探し求めている時期じゃないでしょうか？

右の書は、『聖書』、司馬遷『史記』、『孫子』の三冊です。しかし孫子は、生き方の手本を示すというより、戦略的・現実的に振る舞わねばならぬときの必勝本にすぎないので、本日は割愛します。ちなみに孫子は、1回読むくらいでは分からないでしょうが、かなり恐ろしい本ですよ。その裏表のリアリズムは、マキアベツリなんぞと比べものになりません。一方、聖書と史記は、人生の哲学や具体的モデル（模範）を提供してくれます。どちらもざっと2千年前の本。前者は西洋の、後者は東洋の、理想や典型を示すものです。私はとどこ研究のために外国に単身赴くことがあります。恥ずかしながら、いつも強度の不安・ストレスに苦しみます。スーツケースの片隅に、聖書（関学経済の学生時代から使っているのでポロポロ）や史記の

適当な一巻を入れるのを忘れません。ホテルの自室で目を閉じて聖書に手を置くだけで、覚悟・方向性が定まるからです。原点を思い出させてくれるのです。こないだ学会報告で渡米したときも同様でした。

科学の時代において、神や来世を信じるのは至難です。私はクリスチャンですが、「来世を信じるか？」と問われれば、「存在しないかもしれない」と弱々しく答えるでしょう。「死者の蘇りを信じるか？」と問われれば、「医学上不可能」と答えるをえない！それでも私は、よく分からないが、それらの存在を心から「願い」「待望し」「祈り」ます。100%の信仰を保てるのはイエス・キリストのみ。人間の心には大なり小なり疑いがあつて当然。私は信仰へのポジティブな姿勢（感謝の念など）さえ常に保っていれば、

それで良いと考えています。皆さんは宗教をどう考えますか？

史記も、（聖書とはかなり異なる意味で）わが人生の師であり、そこから受けた大小の影響は数えきれませんが、同書の話の多くはドラマティック、かつ登場人物もやたらとカッコイイので、知らぬまに感化されてしまった気がします。中国古典は予備知識がないと難しいので、最初の入門書として直木賞作家・陳舜臣の『小説十八史略』を薦めたい（全3巻・関学図書館にあり）。中国古典全般の教養を効率的に得られるうえに、超弩級の面白さですよ。

学問とは、単なる就職対策ではありません。一生のものでもありません。皆さんが座右の書とめぐり会いますように。

2016年
10月24日
月曜日

舟木 讓 教授 (キリスト教学・宗教哲学)

「赦し」の意味

キリスト教が伝える人間が心得るべき事柄として代表的なものに「隣人愛」がある。「自らが、困っている人の隣人となりなさい」あるいは「隣人を自らのように愛しなさい」と説かれたイエスの教えによるものであるが、この教えと双壁をなすものが「愛敵」とよばれるものである。こちらにも「隣人愛」同様「自らの敵をも愛しなさい」というイエスの言葉に由来するものであるが、「隣人愛」に比べてこちらの実践はよりハードルが高いのではないだろうか。困っている人の傍らに立ち、その人のために何らかの行動を起こす、というのは「他人の役に立っている」という実感や相手から感謝されるという間接的な「見返り」もあり、自らの決断と行動力で実践可能な教えと一見考えられる。しかし、自らに不利益を与え、あるいは攻撃

的で時として存在を脅かされる相手をして「愛する」と言うのは、あまりに理不尽な教えと言えないだろうか。しかし、「隣人愛」の場合も、その対象をイエスが限定している訳ではないので、「自らの敵」も含めて「自らのように愛する」ことが本来は要求されているのである。このように考えるとイエスの要求に我々が応えにくくなり、キリスト教が理想とする生き方はあくまで理想として、あるいはそうできれば良い、という観念的な目標であると絶望的な気持ちに襲われてしまう。

ただここで、改めてイエスが語る「自らの敵」について考えてみると、それは観念的な存在ではなく、自らと同様、平安や幸福を希求し、喜びや悲しみを感じる「ひと」であることに思い至る。ある他者を「自

らの敵」と判断する時、我々は相手のことを理解し、また共感するという本来、社会的存在である私たちが最も尊重し努力すべき事柄を放棄し、極めて乱暴な生き方になってしまっているのである。

このことをさらに掘り下げた時、もう一つのイエスの教えが「愛敵」を可能とするための大きな示唆を与えてくれる。それは「赦し」に対するイエスの見解である。イエスは自らの筆頭弟子であるペトロが「自らに罪を犯したものを何回赦せばよいでしょうか」と問うた時、「7の70倍」赦すように説いている。「7」というキリスト教にとって「完全」を象徴する数の70倍ということは、「赦し」は無制限になされるべきであるということになる。これもまた実践不可能な印象を与える教えであるが、このことの意味のために、イ

エスは、「王によって到底返済不能な莫大な借金を棒引きしてもらった家来が、それにもかかわらず自らの借金のある友人へ厳しく返済を迫った結果、王の怒りを買って投獄される」というたとえ話をされている。

ここには、私と言う存在が多くの関係性の中で、「赦し」赦されている」という端的な事実の上であり、そのことへの想像力を欠いた時、如何に滑稽で愚かな生き方へと転落してしまいか、という私たちの真実が明らかになっていく。

「赦し」を放棄したとき、私たちの社会がいかに残酷で、自らをも傷つける社会へと変貌していくのかということに思いを馳せ、自らの課題として向き合うための想像力の翼を可能な限り広げることが、今、喫緊の課題として私たちの眼前に迫っているのではないだろうか。

2016年
10月25日
火曜日

昨年7月下旬にニュースで報道された、アフリカでのアメリカ人歯科医師によるライオン殺戮事件をご記憶だろうか。ジンバブエで観光客に親しまれていた野生の雄ライオン「セシル」が頭部を切断され殺されているのが野生保護局に発見され、地元警察は一人のアメリカ人歯科医を容疑のかどで捜索中というニュースである。このニュースはたちまち世界を駆け巡り、非難轟々となった。容疑者の名前はネット上で急速に拡散し、アメリカにある彼の歯科医院の元へは大勢の人々がライオンのぬいぐるみを手手に抗議に殺到した。Twitterでも容疑者に対する怒りは爆発した。非難の書き込みが殺到し、ついには殺害予告まで出される始末である。一方、このような情勢の下、筆者はこの件に関する大変興味深い記事を読んだ。8月6日

大高 博美 教授(言語学)

米国人歯科医師による ライオン殺戮事件

付ニューヨークタイムズに載った、一人のジンバブエ人によるこの事件への思いである。そこには、私が予測もしなかった、ライオン殺戮に対する意見が陳述されていた。記事のタイトルは「In Zimbabwe, we don't cry for lions」で、アメリカのWake Forest大学に留学中の医学部生が投稿したものである。彼によると、ジンバブエでは毎年多くの人々がライオンに襲われて死ぬか怪我をしており、ライオンは恐怖の対象ではない。よって、ジンバブエ人の感覚では、今回の事件はまったく非難の対象には当たらず、なぜこんなにも多くのアメリカ人がこのように騒ぐのか理解できないとある。そして、最後には、そんなに殺されたライオンを悼みたいのであれば、毎年ライオンに殺されるジンバブエ人の死も一緒に悼んでほしいと結んでいる。

物事の判断は必ず多方面からなされるべきである、というのがこの件から筆者が学んだことである。それにしても、今回の事件はなぜこんなにも多くの人々の怒りを買ったのであろうか。これを考えるのが、本日のチャペル講話の目的である。理由としては、経済的に豊かな国々におけるペット飼育の浸透が挙げられよう。これにより、動物は愛玩の対象となり、興味本位の殺傷は許されない悪の行為となったのである。近年になって成立した動物愛護法の存在がまさにこの価値観の存在を裏付けしてくれる。先のニュースによれば、野生動物のハンティングが趣味の容疑者は、現地で二人のガイドを雇うのに5万ドルを使い、狩猟禁止区域である国立公園内で餌を使ってライオンをおびき寄せ、40時

間かけて追跡し、最後に弓と矢を使って仕留めたのだという。さらに人々の眉をひそめさせたのは、この殺されたライオンはオックスフォード大学の調査対象となっていたため首にGPSが取り付けられていたのだが、これに気づいた容疑者が証拠隠滅を図るためにこのライオンの皮を剥ぎ頭部を切断していたことである。つまり、この件で怒りを覚えた人々にとって、セシルはペット同様の扱いを受けたわけである。実は、上述のハンターたちはいずれも狩猟許可証を持ち適切な許可を得ていたのだが、この程度の合法性では、現代人がペット飼育を通して育んだ動物愛護の価値観を凌駕することはできないのである。

2016年
10月26日
水曜日

中川 慎一 教授（ドイツ語教育、異文化間コミュニケーション）

「釜ヶ崎のストロームキャット」

「西独から婦人宣教師ら来日、不幸な夜の女たちを救いたい」（一九五三年十一月読売新聞）と報道されたのは戦後の復興期である。婦人宣教師とディアコネス（Diakonie、プロテスタントの宗教社会奉仕運動）からの派遣女性五名、合計六名が十一月十五日午後四時大阪商船あとらす丸で来日した。

この婦人宣教師が Elisabeth Strohmayer で、エルズベト・シュトロームと書くのが正しい。エリザベトは同じ名前の変種である。日本基督教団の招きで来日した。賀川豊彦の招きでもいわれる。ちなみに、賀川豊彦（一八八八—一九六〇）は神戸に生まれ徳島に育ち、神戸でキリスト教の伝道をはじめ、労働運動、社会福祉、農民運動、消費組合運動をおこなった牧師であり社会運動家である。賀川は一九四九年にはヨーロッパに

渡り伝道を行っている。ストロームさんたちは、ブレーメン港から横浜港に到着した。彼女は三年余り東京で活動を模索するが、甲府での奉仕を経て、十年経った一九六一年全国を見て回り、釜ヶ崎に出会う。

一九六四年には家を購入し子供をあずかり始め、一九六五年には家庭保育を始めた。それ以来二十年間彼女は釜ヶ崎で社会奉仕活動を教会と共にはじめ、教会のためではなく人々のために働いた。西成ベビーセンター（現在は、「ストローム記念山王こどもセンター」として受け継がれている。）や断酒会「むすび会」（現在の釜ヶ崎ディアコニアセンター「希望の家」のことで、アルコール依存症の人たちの社会復帰のためのプログラムを実施している。）を立ち上げた。彼女はもともとドイツではミッドナイト・ミッシェン

（Midnight Mission）の活動で、売春婦、元受刑者などの社会復帰の仕事をしていた。その彼女が、日本にやってきた。そして、退職のため帰国したのが一九八三年（昭和五八年）で、来日からすでに三〇年が経っていた。

私がストロームさんに出会ったのは二〇一六年八月二十三日南ドイツの小さな町でのこと。私はこのころ月一回程度で釜ヶ崎の夜回りに参加している。野宿者ネットワークが毎週土曜日に行っている夜回りで、ふるさとの家に集合し、代表の生田武志さん（『釜ヶ崎から 貧困と野宿の日本』筑摩書房の著者）らが中心になって支えている活動である。大阪市内を三ルート（本町―難波、天王寺、山王）に分けて土曜日夜に巡回し、野宿者に声をかけながら必要な支援をしている。野宿者は若者

たちの襲撃の対象になることもあり、被害がないかも聞いて回る。この夜回りは、月に一回山王こどもセンターのこども夜回りに合流している。このこども夜回りで山王こどもセンターに行ったことがきっかけだった。看板に、ストローム記念とあった。聞いてみるとドイツ人だという。そして、彼女がまだご存命で、南ドイツのヴェルツブルクにほど近い小さな町に住んでおられるというので、お訪ねした。九十四歳になる彼女は「私はこどもが好きだったわけではないのよ」と私の期待を大きく裏切りながら、五時間にわたるインタビューが始まった。帰り際には、彼女の部屋の前から窓越しに手を振ってくれた。メイン川を望む小さな町での一日であった。

2016年
11月8日
火曜日

田 禾 教授（人文科学、中国語学） 苗字が異なる家族

昨年度から中国の人口政策には一
つ大きな変化がありました。それは
「一人子政策」の緩和です。一家族
一人子のみ産むことが許可されるこ
とから二番目の子を産んでほしいと
の変化です。徹底的に何人の子を産
んでも良いとまではまだですが、政
策の緩めより、人口基数がもともと
大きい中国にとって、人口増加の速
さはとても懸念されるという意見も
あります。まだ実施されて一年ばか
りですので、人口の増加はどのような
のかは分かりませんが、それに関わ
るもう一つの議論が始まりました。
二番目の子の苗字という問題です。
日本と違って、中国人の女性は結婚
しても苗字は変わりません。生まれ
た子供の苗字は普通父親と同じにし
ますが、『婚姻法』によると、どち
らも自由です。つまり、赤ちゃんの
苗字は母親と同じにしても法律上で

は何の問題もないです。「一人子政
策」実施以来、おおよそ40年経ちま
した。現在生育年齢の殆どの親たち
は一人子です。一人子と一人子の夫
婦の間に生まれた子供は最初の子は
父親の苗字にしたら、二番目の子は
母親のほうにしてもいいのではない
かと考える人もだんだん多くなりま
した。しかし、賛成する父親は少な
いです。昔、中国人の女性は男尊女
卑のせいで、苗字はありますが、下
の名前がなく、「く氏」と呼ばれ、
結婚してから、旦那さんの苗字を加
えて、例えば王さんの娘が張さんの
嫁になったら「張王氏」と呼ばれる
ことです。1950年代以来、『婚
姻法』の実施のおかげで、男女平等
で、どの場合でも、夫婦別姓です。
家族に母親だけ苗字が違うのは普通
ですが、子供も苗字が母親と同じ
で、父親が別苗字の家族は再婚など

特別な理由があると中国社会で認識
されています。この理由で、二番目
の子の苗字を母親側にすることは勇
気が必要かもしれません。安徽省の
ある地域では、赤ちゃんの苗字を母
親のほうにすることで地方政府から
「奨励金」をもらえるところの記事も見
ました。その目的は一人子である母
親の家族の苗字の存続も応援して、
更に男女平等の観念を深めるという
ことです。大都市では女性は確かに
給料や昇進のチャンスなどで男性と
同じ政策がありますが、やはり出産
という理由で仕事中断する場合もあ
り、育児と共に仕事すると仕事に専
念できない可能性も高いので、実際
には収入の面で男性より低い女性は
多いというのも事実です。ですの
で、まだまだ男女平等の実現はして
いない社会では、赤ちゃんの苗字に
対しては母親側の発言はあまり重視

されていないかもしれません。子供
の苗字により遺産相続には何も変わ
らないのに、こんなに拘りがあるの
はあまり意味がないのではないかと
思います。一方、もし同じ両親の
二人の子供はそれぞれ父と母の苗字
をすとしたら、どうも、家族分裂
の雰囲気もないとはいえないかも。
友人の夫婦には一人男の子がいま
す。その子の苗字はどちらの苗字で
もない、「氏名」は「一了」です。
将来その子にどのような心境である
のかを聞きたいと思います。もしか
して、この独特な氏名は彼を自由な
個性的な人間への成長に影響を与え
るかもしれません。

2016年
11月9日
水曜日

ドナルド・トランプ氏が米国の大統領に選出された。トランプ氏は不法移民の強制送還、難民の入国拒否、環太平洋経済連携協定(TPP)からの離脱など、グローバルイズムに對抗する選挙戦を展開した。先鋭化した排外主義と自国優先が国民に支持された。元来移民国家である米国にとってグローバルイズムは国力の源泉であり、従って米国は常にグローバルイズムの推進力であり続けた(グローバルイズムをアメリカニズムの同義語と理解する識者もいる)。その意味で、トランプ氏の政策は米国にとって自殺行為となりえよう。欧州では、英国がEU離脱を決め、それに呼応するスコットランド独立やスペインからのカタルーニャ独立機運に見られる建国の精神への回帰が高揚した。EU諸国でイスラム教徒のテロが続発し、ドイツはギリシャ財政危機の救済負担に加えシリア難民の流入に苦慮し、反グローバルイズムの

山田 仁 准教授(イギリス文学)

グローバル化する 反グローバルイズム

増長を許している。二〇一七年、ドイツ、オランダそしてフランスにおける議会選挙と大統領選挙が反グローバルイズム勢力の躍進を予感させる。ナシヨナリズムとの比較で定義するならば、グローバルイズムとは物理的かつ精神的に国境を低くする動きであつて、その結果、人、もの、資本が易々と越境する。価格の決定は国家ではなく国際的に開かれた市場取引に依る(市場原理)。保護主義は忌避され自由貿易が奨励される(TPP)。域内で経済的に統合し単一通貨を採用する(EU)。地球環境保護や国際的な支援活動が称揚される(国連)。低い国境が世界中に豊かさを分配し、国家間の経済的相互依存が戦争さえも抑止する。だが現実はどうか。確かに富は創出されたがそれは一部のエリートによって独占され、大多数の国々の人々がその恩恵を享受していない。それどころか格差が国家間と国内の

両レヴェルで拡大した。本国人が低賃金の移民労働者によって職を奪われ、安価な輸入品が国産品を駆逐する。パナマ文書は、グローバルイズムの受益者が租税回避地に資産を隠蔽していた事実を暴露した。グローバル化によってローカルな価値が淘汰されるという強迫観念が、イスラム過激派の台頭を見た『オクスフォード英語辞典』は二〇一六年の鍵語として「post-truth」を選出したが、この新造語は反グローバルイズムばかりかグローバルイズムにも適合する。反グローバルイズムは単なる経済格差に限定されず、価値観の領域にさえも浸透する(人種や宗教などのマイノリティへの冷遇)。

反グローバルイズム勢力の躍進は当然の結末と思われる。国境を高くする動きは国家エゴイズムの台頭を招来する。異なる価値への寛容は置き去りにされる。重要なことは、グローバルイズムは世界が共有するべき理念ではなくエリートの既得権受益者(establishment)が権益を最大化するための有効な戦略であることが暴露されたこと、そしてそれへの反感と嫌悪が一大勢力を糾合し、今やエリートとアウトサイダーという二項対立と分断が世界を席巻しているという現実である。冷戦終結後の世界が掲げた理念であつた筈のグローバルイズムが、反グローバルイズム勢力の台頭を契機として政治闘争の当事者に成り下がつたのである。関西学院大学のサイトには「グローバル」「世界市民」「国連」という常套句が踊る。今やグローバルイズムを無批判に唱えることは一方の政治勢力に荷担することを意味し、互いに対立する二つの政治勢力の和解にはなりえない。大学とはいかなる政治勢力からも距離を置き、両者の見解を静かに比較考察し未来を展望する時空となるべきであると考える。■

2016年
11月14日
月曜日

日中関係が悪化しているなか、近年の中国観光客の増加、微信／WeChatなどインターネット情報の発達により、現代日本社会に対する中国一般民衆の理解は、数年前と比べむしろ深まっており、しかも非常に良いイメージ（マナーの良さ、交通の便良さ、サービスのレベルの高さなど）が中国民衆の間で構築されつつあると言えよう。しかし同時に、逆に日本人に今現在の中国から文化的魅力を感じるかと聞くと、およそ大多数の方々から肯定の答えが出ないというのも事実であろう。上記のような現状のなかで、われわれは日中両国間ないし東アジアの文化交流に対してどのような未来図を描けるのだろうか。この設問を答えてみる前に、昨年末に日本で公開された一本の映画を取り上げて考えてみたい。

韓 燕麗 准教授（映画史）

映画『真夜中の五分前』から考える日中関係の現在

映画『真夜中の五分前』の原作は本多孝好、監督は行定勲で、オリジナルの物語は完全に日本発のものであった。しかし制作資金は完全に中国側から出され、三人の主要人物はそれぞれ日本、北京そして台湾出身の俳優によって演じられ、撮影クルームも中国人スタッフ60名、日本人スタッフ20名という混成チームで、いわば文化的越境を実践した映画作品であった。上海を舞台にしたこの映画の物語を追っていくと、そこに展開される物語の都市空間ないし登場人物の感情表現のいずれも文化的な色合いが希薄であることがわかる。つまり舞台は上海であれ東京であれ、あるいは中国であれ日本であれ、もはや重要ではなく、とある現代的な大都会におけるオシヤレな若者たちの恋愛物語として、顕著な「中国的」または「日本的」要素が欠如

しているのである。

映画のパンフレットから、「このように国境を越えて制作していく映画作りが、アジア映画プロジェクトの新たなスタンダードとなるかもしれない」という記述があったが、「新たなスタンダード」というのは映画製作のスタイルのみならず、じつは今後日中間の若者文化の重要なキーワードにもなるのではないか。映画の記者会見で、主演俳優たちは互いに日本語と中国語を教えあう興味深い場面があった。「今日は格好いいね」、「今日は可愛いね」といったフレーズの日本語と中国語を俳優たちは互いの言葉を覚え、そして褒め合った。もし次世代にとって共有できる文化的「新たなスタンダード」があるとするならば、このような「格好良い／悪い、可愛い／可愛くない」に代表される若者文化になるのだろうか。

う。近代以降のアジア諸国の相互認識は、長い間、西洋というフィルムを通じたものであった。アジアにおける近代化とはほとんどすなわち「西洋化」として理解され、国家や民族の優劣は長い間、発展の時間差つまり西洋の近代化の程度によって語られてきた。しかし今日、われわれが文化的視点から今後あるべき日中関係の未来図をあらためて考える際、新たなアジアの文化的「規範」は誰によって、そしてどのようなものを創り出すべきなのか、という問題に直面する。地道な民間レベルの文化交流によって共通する文化的アイデンティティを醸し出し、そこから政治・経済の面では冷え切った水のような日中関係に少しずつ亀裂を入れることを、当面、辛抱強く継続すべきであろう。

2016年
11月29日
火曜日

今年度は、経済学部科目として「言語と文化」というオムニバス形式の科目を担当した。授業のテーマの一端として、「日本語は難しいか」という問題提起を試みた。ある言語の難易度を知るために、言語類型論的な観点から、それぞれの言語の相対的な近さや類似度からの比較をするという考え方があつた。ごく大まかに言つて、ある言語どうしの間での違いが大きいほど難しく、似ているほど易しいととらえることができるだろう。日本語はいわゆるSOV構造（S：太郎が／O：りんごを／V：食べる）をとり、世界の諸言語の中でこの構造自体は特に珍しいものではない。日本語を他の言語と比較すると際立つのは、文字体系として3種の文字（ひらがな、カタカナ、漢字）を使用することである。とりわけ非漢字圏の学習者にとつて、書く

長谷川 哲子 准教授（日本語教育学）

「日本語は難しい」から「やさしい日本語」へ

ことのハードルが高くなることは想像に難くない。

このように、他の言語と比較した場合、日本語の難易のありようは様ではなく、「日本語は難しい」と一言のもとに片付けるべきではないが、一方で近年「やさしい日本語」という提唱がなされている。その背景には、日本語学習者の多様化として語られる現状がある。日本語を学ぶ人といえ、真つ先に留学生が思ふ浮かぶかもしれないが、それ以外にも生活者としての日本語学習者の存在も大きい。また、日本語指導の必要な児童生徒数も増加傾向にある。こうした児童生徒の母語は、ポルトガル語、中国語、フィリピン語、スペイン語、ベトナム語（文部科学省「日本語指導が必要な外国人児童生徒の母語別在籍状況」）「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に

関する調査（平成26年度）」における母語別在籍者数の上位5言語）等、多岐にわたる。このような現状への対応の一つとして、地方自治体の公式Webサイトの多言語対応がある。

たとえば、大阪市の公式サイトには、英語、中国語、朝鮮語に加え、Google翻訳を利用してアイスランド語からロシア語まで（五十音順に）80以上の言語に対応するページが見られる。また、西宮市の公式サイトでは「多言語生活ガイド」として、日本語、朝鮮語、英語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、やさしい日本語の各版が紹介されている。ここでいう「やさしい日本語」とは、平易なことばを使用したわかりやすい日本語のことである。昨年11月の福島沖地震の際、NHKの津波警報の画面上に赤地に白抜きの大きな文字で「すぐにげて！」と表示された

ことがその好例である。多様な母語への対応として個別の言語への翻訳という多言語対応もむろん大きな効用を発揮するが、多言語ゆえに対応可能な言語数には限界も予想される。日本語母語話者以外にもわかりやすいコミュニケーションをめざす「やさしい日本語」、いわばユニバーサルな日本語コミュニケーションの担い手となる意識を日本語母語話者側も備えていく時期が来ていると考えている。

2016年
11月30日
水曜日

岡田 敏裕 教授（マクロ経済学）

経済学的考え方と適応性

トランプ氏が、極端に保守的な移民政策や反TPPを掲げて大統領に当選しました。反グローバリゼーションの国民が多数存在するということです。世論調査においても非常に多くの国民がグローバリゼーションは米国にとって良くないと答えています。

ハーバード大のマンキュー教授は、このことについて、政治学者の研究を基に考えを述べていますが、以下で紹介します。（注）

経済学で通常考えるように、人は自己の効用を最大化する合理的な主体であるとし、反グローバリゼーションの問題を考えると、輸出に大きく比重を置く産業で働く人ほど、よりグローバル化に賛成し、輸入に大きく比重を置く産業で働く人ほど反対の姿勢を示すはずですが、政治学者の実証研究によるとこの仮説は否定されています。

研究によると、反グローバリゼーションの態度は、個人が自身の利益を考えた結果ではなく、米国全体にとって良いかどうかという、利他主義的にも見える考え方に従っているとしています。更に研究では、反グローバリゼーションは、孤立主義、国家主義、自民族中心主義と深く関係し、そのような考え方をもち人は、グローバリゼーションにより反対しているとしています。つまり、反グローバリゼーションは、客観的で経済的な思考ではなく、主観的で心理的な、思い込みのようなもので形成されているのです。

以上のように、マンキュー教授は述べています。経済学では通常、人は合理的な主体であると考え、様々な問題を分析しますが、上の問題では「合理的な主体」という根拠が不適切で経済学的説明は困難です。経済学は多くの問題に対して適切

な解決方法を導き出してくれます。

客観的に見てもそれは間違いありません。しかし、現実には複雑で、経済学のアプローチだけでは答えがでない、或いは、その答えが時には意図したことと反対の結果を生み出す恐れもあります。経済学を社会に適用する時には、「経済学ではこうだから、これが常に正しいのだ」という考えをしないよう心掛ける必要があります。多様性の重要性がよく言われますが、それは経済学をより良いものにしていく上でも重要です。

もう少し一般的に言うとも、自分もつともだと思っても、いつも正しいわけではない、その考えでは説明できないことが多く存在するという事です。常に他の意見を聞くことが自己発展のために必要です。ただ、1つ強調しておきたいのは、自分の意見を持たず、ただ他の人の意見を聞くべきであると言っている

わけではありません。全ての考えが同様に重要だと言っているわけでもありません。しっかりとした考えを持ち、その上で必要であるならば他の考えを考慮すべきであるということです。他者に論理的に説明できるような考えを先ず持たなければ、他の意見と比較し、より良い考えを構築していくことはできません。

経済学部生の皆さんは、経済学的考えを身に付け、そのうえで別の考えを考慮する柔軟性を持つてください。経済学的考えを十分に身につけただけでも、その力に深く感謝する時が必ず来ますが、その上で適応性を幾らか意識していけば、得られるものは飛躍的に多くなるでしょう。

注) Mankiw, Gregory. 2016. "Why Voters Don't Buy It When Economists Say Global Trade Is Good." *New York Times*, July 29, 2016.

2017年
1月10日
火曜日

田中 敦 経済学部長

ポータルを見つめていく時代？

年度末のチャペルは「卒業生を覚えて」と題してお話しすることになっていきます。そこで、昨年は卒業する学生に贈る話をさせていただきました（『エコノフォーラム21』第22号を参照してください）。今年も、卒業する人たちが経験したことを踏まえて、1〜3年生のみなさんへお話しさせていただきたいと思いません。

この3月に卒業される学生のほとんどは、2013年春に入学されました。ちょうど、アベノミクスが始動した頃です。アベノミクスの評価はさまざまですが、この4年間で経済に明るさが戻ってきました。

それとともに、学生にも変化が見られるように思います。以前は、みんなと違うことはせず、できるだけリスクを冒さないように心がける学生が多かったと思います。生まれて

からずつと景気が悪く、将来について夢を描くことがむずかしく、何ごとにも慎重でした。でも、最近は積極的にチャレンジする学生が増えてきたように見受けられます。

経済が明るくなってきて、就職も売り手市場となってきました。とは言え、学生が就活で苦労しなかったかというところ、そうとは限りません。売り手市場ですが、質を妥協してまで採用人数を確保する企業はあまりなかったようです。ただ、質はよく見えないところが問題です。そこで、見えない質を見極めるために在学中の実績という見えるものを利用しようとする企業が増えてきました。

そのような動きの一つが、企業が成績を見ながら行うリシユ面（履修履歴面接）です。成績が良ければ採用するのでなく、成績を見ながら

面接を行い、学生の勉学に臨む姿勢などをみていくのです。成績をネット上のサイトに学生が登録し、それを学生が希望する企業に送るサービスが始まっています。今年の卒業生は全国で3割前後が登録し、次年度は6〜10割が登録するとみられています。

また、関学を含め多くの大学がeポートフォリオというシステムを始めようとしています。eポートフォリオとは、学業、TOEICなどの外部試験や資格試験、留学、クラブ・サークル活動、それ以外の課外活動などの詳細を学生が登録していくシステムです。これまでの学生生活を顧みて今後の目標を意識することが目的ですが、就活での自己アピールにも役立ちます。中学・高校もeポートフォリオ導入を考えているところが増えてきていて、将来は中高のe

ポートフォリオ・データを大学のeポートフォリオに引き継がせることができるようになるかもしれない。

データを学生が自ら提供するとはいえ、学生生活のすべてが見られてしまつて窮屈に思われるかもしれません。そういう側面はありますが、一方で、地道に頑張っている、今まであまり日の目を見なかった学業などをアピールしやすくなるという側面もあります。

学生生活が楽しいことは、大切です。でも、その中で是非、自分の将来に夢を描いて、その夢の実現のために地道なことにも一生懸命取り組んで欲しいと思います。

2016年
12月7日
水曜日

●退任教授最終チャペル講話／根岸 紳 教授（経済統計学）

関学の風に吹かれて

私は18歳で関学経済に入学して以来、68歳の今、甲山を見ながら実に半世紀を過ごしたことになる。学生時代、ボブ・ディラン（今年度ノーベル文学賞受賞、ディランがノーベル賞をもらうなんて当時想像もしなかった）の「風に吹かれて」をはじめアメリカのフォークソングやカントリを歌うサークルに入っていたこともあって、チャペルで讚美歌を歌うのが楽しみだった。もともとチャペル出席の本当の理由はキリスト教の点数に関係すると思っ出ていたのだが、しかしそれは間違っていた。なぜならもらったキリスト教の点数は50点白であった。……

教員になってから、チャペル講話を数回受け持った。鉄腕アトム、鉄人28号、ゲゲゲの鬼太郎で育った私は、人間とロボット、人間と妖怪の関係について興味を持っていた。また息子たちとよくアニメを見ていたので、アンパンマン、ドラえもん、ディズニーマニアに親しんでいた。そしてデジタルの時代に移り、このところ人工知能AIをもったロボットが登場してきた。ロボットだけのホテルが登場し、ペッパーくんにも街の中でよく出会う。このAIロボットの登場により、鉄腕アトムやアンパンマンが現実味を帯びてきた。みなさんが将来仕事に就いたとき、パソコンの代わりにロボットがあなたの仲間になり仕事場に多く登場しているだろう。

チャペル講話で、バイキンマンの似顔絵を黒板に書いたことがある。アンパンマンのアニメをみていたとき、バイキンマンのことが非常に気になったからである。彼はいろいろなモノを作るがそれは公害を引き起こすものばかりだし、ドキンちゃん（彼女はしょくばんまんが好き）をこよなく愛しているが片思いである。バイキンマンはきわめて人間的だなど親しみを覚えたのである。そして人間にはアンパンマン的な面とバイキンマン的な面があるのではないかと、チャペル講話で問題提起をさせてもらった。

次にドラえもんとのび太のこともチャペル講話で取りあげた。のび太があまりにもドラえもんに頼りすぎるのが気になった。将来、人間もドラえもんのようなAIロボットに頼りすぎるようになるのではないか。AIロボットを人間の能力拡張に使ってあげればそれは杞憂になるのだが。でも大事件が起こる。それはのび太がみんなのアイドルであるしずかちゃんと結婚するのである。理由をいろいろ調べてみると、あの頼りないのび太さんには私が付いていなければだめになるだろうと思いが、結婚を決意するというのがあったが、そのほかにのび太のあふれる優しさにひかれてというのがあり、私はこちらの理由をとりたいた。のび太は、冬、だれかが池に落ちていたのを飛び込み助けるところをしずかちゃんが見ていた。本当の優しさをのび太はもっている。そこにしずかちゃんは見られる。人間は、本来、相手を思いやるほんとうの優しさにあふれているのではないだろうか。

のためのプレイグループ2つに家族3人で通い、息子と一緒に歌ったり踊ったりしていた。そのうちの一つが郊外の教会Glen Waverly Uniting Churchである。3月末で帰国しなければならぬことを前もって伝えていたこともあり、プレイグループでの私たち家族最後の日、長男の写真がいつぱいの息子限定の手作り卒業アルバムを贈呈され、家族で感激したことを思いだす。二つ目は都心の教会St. Michael's Uniting Churchの思い出である。妻の弟夫婦はメルボルンで結婚式をあげることになった。しかし義理の父親の心臓チェックがはいり親は出席できなかった。5年後、式に出席できなかった義父を伴い私たち家族はメルボルンへ向かい、式を挙げた教会を訪問した。事情を伝えたところ、快く教会の中に招いてくれ、そのうえ結婚式のリハーサルよろしくオルガン演奏までしてくれたことは義父への最高のプレゼントになった。

チャペルでは、ロボットと人間の関係を考察することによって、人間とは何なのか考える機会を持った。最近特に人間に近づいているAIロボットをみてますます考えるようになった。また、関学に長くいたおかげで教会に対して親しみをもつよう

になり、留学時代、教会で忘れることのできないふたつの経験をし、家族の財産となった。

私は50年間、関学の風に吹かれながら、苦しいこともあったけれども全般的には学生時代、教員時代とも「経済学」と「統計学」を楽しみながら過ごすことができた。関学経済に感謝しています。ありがとうございます。

関学経済で学んでいるみなさん。日頃の講義、ほかのゼミや他大学のゼミとのディベート、いろいろなところでの研究発表、これらはすべて中間投入です。これらの中間投入を使って付加価値を付け加えて卒業論文を作成してください。経済学部は学ぶ全員が論文に挑戦してほしいと思います。たとえ、ゼミに属していません。論文を書いたことは関学経済で過ごした足跡になりますし、その後の人生の糧になります。

最後に学生の皆さんにメッセージを送ります。1933年、北原白秋は上ヶ原に立ち、作詞した関学の校歌の中に「風、光、力」があります。「風」、風のようにさわやかに舞い、「光」、光のように明るく輝き、「力」、「若きは力ぞ」(校歌の一節)で関学というステージでいろいろなことに挑戦し躍動してください。期待しています。

2016年
12月14日
水曜日

●退任教授最終チャペル講話／松本 有一 教授（理論経済学・環境経済学）

経済学のすゝめ

みなさん、経済学部にはいつてどんな感じで過ごしてきましたか。どうしても経済学を勉強したいと思って受験したひとは多くはないと思います。文系、理系の区別はあっても、経済学部、商学部、法学部あたりのどれか、合格したところに行けばよい、と思っていたのではないのでしょうか。いまの高校教育や受験指導ではそうなってしまうのではないのでしょうか。それでも、経済学部に入っただけからには、是非経済学を学んで欲しいと思います。

そもそも経済学って何でしょうか。何を学ぶのでしょうか。30年以上前（1982年）に岩波新書で『経済学とは何だろうか』という本が出ました。著者は佐和隆光という、当時京都大学経済研究所の教授で、統計学・計量経済学の専門家でした。その本で取り上げられた論点のひとつに「経済学の制度化」がありました。ここでいう制度化というのは、定番の教科書が出来上がっている、教科書に書いてあることをマスターすればよい、というような意味です。佐和氏が「制度化」を取り上げた時点では、日本の大学での経済学の制度化はまだそれほどはありませんでした。というのは、当時はまだマルクス経済学が一定の力をもっていたこともあり、ケインズ経済学もいま以上に影響力があったからです。

それからおよそ四半世紀の2008年に文部科学省から日本学術会議にたいし「大学教育の分野別質保証の在り方に関する審議について」と題する依頼があり、経済学に関しても「経済学分野の参照基準」が検討され、2014年8月に審議結果が報告されました。大学教育の質保証の名の下に「制度化」をすすめよう、大学教育に統一カリキュラムを定めようとしたのかもしれない。経済学に関していえば「参照基準」を定めること自体に異論、反対論などがあり、一部の学会では大きな問題として取り上げられました。報告が出された後、いまのところ特段の動きはないようです。どのような学問分野でも、基礎的な知識や基本的な分析道具など、ある程度は誰でも知っていなければならないものがあるとは思いますが、枠をはめられるべきではありません。

さて、経済学を最初に体系的に論じたのはアダム・スミスの『国富論』（1776年）だといわれます（異論もあります）。経済学部の学生であれば、アダム・スミスの名前を聞いたことがないという人はいないはずです。スミスは経済学者だった

のでしょうか。必ずしもそうではありません。スミスはモラル・フィロソファーでした。かれの学問体系はモラル・フィロソフィー（道徳哲学）でした。それは倫理学、法学、経済学からなります。倫理学に関しては、『国富論』に先立つ1759年に『道徳感情論』を出版し、1790年の第6版まで改訂をしました（『国富論』は第5版まであります）。スミスは書き残したものを死後すべて焼却するよう遺言したのですが、残されたものがあり、また講義を受けた学生のノートなどから、『法学講義』、『修辞学・文学講義』、『哲学論文集』などとして後に出版されています。

時代は飛んで、20世紀。J. M. ケインズは今日のマクロ経済学の出発点になる『雇用・利子および貨幣の一般理論』（1936年）を著しま

した。ケインズはケインブリジ大学の出身ですが、学生時代の専攻は数学でした。ケインブリジでは1828年から経済学の講義はありましたが、正式には卒業試験(トライポス)が1851年に始まった「モラル・サイエンス(道徳科学)」学科の一科目としてでした。経済学はモラル・サイエンスの一部です。その後アルフレッド・マーシャルが経済学をモラル・サイエンスから独立させる努力をして、1903年に経済学は一つの学科となりましたが、マーシャルは経済学をモラル・サイエンスと考えていたようです。なお、political economy と呼ばれていた経済学をeconomicsに替えたのはマーシャルでした。かれは1884年にケインブリジ大学の経済学教授に就任しましたが、Professor of Political Economyといえます。

皆さんは、希少な資源の効率的配分はどのようにして達成できるのか、そのようなことを研究するのが経済学であると学んだかもしれせん。このような考え方を明確に示したのは、ライオネル・ロビンズの『経済学の本質と意義』(1932年)です。しかし、ケインズは経済学をモラル・サイエンスとして捉えていました。ケインズはハロッドへの手紙(1938年7月4日付)でこう述べています。「経済学は論理学の部門、思考の様式であると私は思います。」「ロビンズの言に反しますが、経済学は本質的にモラル・サイエンスの一つであり、自然科学の一つではありません。すなわち、経済学は内省と価値判断とを駆使するのです」(『ケインズ全集』第14巻邦訳356-358頁)。ちなみに、日本のケインズ研究の第一人者といえる伊東光晴氏が書いた『現代に生きるケインズ』(岩波新書、2006年)の副題は「モラル・サイエンスとしての経済理論」です。最初に名前をあげた佐和隆光氏が最近『経済学のすすめ』(岩波新書)と題する本を出しました(2016年10月)。その本の「はしがき」で、「モラル・サイエンスとしての経済学がいかに役立つかを本書で解き明かし、『そうなんだ』と読者に納得していただきたい」と述べ、さらに「あとがき」では「本書で私が主張したのは『人文知と批判精神の復権』、言い換えれば、『モラル・サイエンスとしての経済学の復権』にはかならない。思考力・判断力・表現力を研ぎ澄ます最短の近道である」

と述べています。一言でいえば、数理化した経済学への批判と反省です。

2年前、膨大な歴史的資料を用いて格差問題を論じたフランスのトマ・ピケティの『21世紀の資本』(2013年)が話題になりました。かれは若くして(22歳で)博士号を取得し、MITに職を得ましたが、数学を駆使することを至上とするアメリカ経済学界に疑問をもち、2年で職を辞し、フランスにもどり『21世紀の資本』として結実する研究にむかいました。

皆さんの多くは卒業後、企業に就職されると思います。なかには民間企業であつても経済学の知識を活用する職種につく方がおられるかもしれませんが、ほとんどは経済学部で学んだ知識をそのまま使うことはないでしょう。皆さんには学生時代には、大いなる批判的精神を養っていただきたいと願っています。

2016年
12月21日
水曜日

●退任教授最終チャペル講話／平山 健二郎 教授（金融論）

アインプリット・アウトプリット

私が関西学院大学経済学部にお世話になって22年が経ちました。大学院を終えて最初に奉職したのが京都産業大学で、そこに四年間勤め、その次に関西大学で八年お世話になり、さらに関西学院大学で22年間奉職しまして、計34年間の教員生活でした。この二月で65歳になるのもって、68歳の定年より三年早く退職することに致しました。後進に道を譲る、というのはウソでして、仕事から解放されて、ノンビリしたいというのが本音です。

私は三つの大学に奉職したわけですが、色々な大学を経験できて幸せだったと思います。また学生としても、一橋大学経済学部の学部生のときには一年間、アメリカのリベラルアーツカレッジに留学させてもらったり（幸運にもサンケイ・スカラシップという奨学金を頂いて、メイン州

のベーツ・カレッジという大学で勉強しました）、大阪大学の大学院で修士を取った後は、アメリカのイェール大学の大学院に五年ほど留学しました。留学というのは本当に貴重な経験だったと思います。外国に住むことでその国とそして日本に対する関心・理解が深まるように思います。

日本では「転石苔を生ぜず」という諺があるように、石は一箇所にとどまって、苔をむすほどになる方が望ましいという考えがあるようです。日本の国歌でも「こけのむすま」と謳っており、やはり苔が生えることが賛美されているようです。ですので日本では長らく、同じ会社で一生を過ごすことが理想とされてきたようです。

それに対してアメリカでは有能な人間はどんどん転職して、経験を積

むのが望ましいとする考えがあるようです。ノーベル物理学賞を受賞したりチャード・ファインマンの自叙伝『ご冗談でしょうファインマンさん』を読んでいた以下のエピソードが紹介されていました。彼がMITの学部四年のときに先生が「リチャード、君は大学院に進みたいと思うのだが、どこの大学院に行くのかね？」「はい、もちろんMITです。」「なぜだ？」「だって、MITは世界一の大学だからです」「だからこそ、君はプリンストンに行くべきなのだよ」というやりとりがあったそうです。世界にはMIT以外にも優れた大学がたくさんある、そういう大学を経験すべきだ、ということなのでしょう。

そういう意味で私は学生として日本で二つ、アメリカで二つの大学を経験し、教師となつてからは三つの

大学で働く経験を積むことができたのは本当に幸いなことだったと感謝致しております。さて、22年前に関西学院大学経済学部に参加して驚いたのは教育熱心な先生方が多いことでした。多くの先生が本ゼミ以外にサブゼミも担当されていると知り、大変驚きました。が、確かに90分の授業と言っても出欠を取ったり、アナウンスをしたり、発表当番の相談をしたりしていると、勉強の部分は六十分程度になってしまいません。ですので、とくに三回生の場合にはサブゼミをすることで、勉強の時間を十分確保できることになりました。そのように教育に時間が取られるのですが、よくしたもので、手間暇をかけると学生さんもそれに応えてくれて、懸命に勉強し、伸びてくれます。そのような学生さん達に恵まれたことを心から感謝したいと思います。

います。

さて、過去のチャペルアワーではできるだけ良書を紹介するように努めてきました。タイトルに書きましたように、何かアイディアとか提案をアウトプットしようとする、そのための材料がインプットされないといけないと駄目です。その意味で読書は必須の手段です。学生さん達には是非、読書をお勧めしたいと思いません。

ちよつと私の読書履歴をご紹介します。小学校の頃は自宅に置いてあった偉人の伝記をよく読みました。伊能忠敬、二宮尊徳、徳川家康、エジソン、ライト兄弟、リンカーンなどです。また祖母が買ってくれた『トムソーヤの冒険』は何度も読みました。マーク・トウェインの小説は面白いだけでなく、人生の教訓に満ちているように思います。中学校で読んだ本でもっとも印象に残っているのは明治期に日本政府のお雇い外国人であったエルヴィン・フォン・ベルツの残した『ベルツの日記』（岩波文庫）でした。外国人の目から見た日本人の行動・思考が描かれており、西欧と日本の違いに興味を覚えました。私は中学高校時代には天文気象観測部というクラブに入っており理科少年でした

が、高一のときの社会の先生にサムエルソンの『経済学』というテキストを勧められて読んだところ、自然科学とは違う社会科学の面白さに目覚めて、岩波新書で『資本主義の歴史』（レオ・ヒューバーマン）、『ケインズ』（伊東光晴）などを読み、経済学部に進むことを決意したのでした。

しかし憧れの一橋大学経済学部に入学したものの、経済学の授業はちつとも面白くありません。その頃に出合ったのが、アルベール・カミュ『シジフォスの神話』『ペスト』『異邦人』などの不条理の哲学の書でした。世の中は「ばかっている」と観念すると、気が楽になりました。大学時代はカミュに救われたという気がします。大学・大学院時代に感銘を受けたのは他にも山本七平氏の著作（とくに『日本人とユダヤ人』『空気の研究』）があります。これらについては昨年のチャペルアワーでご紹介しました。

その後の人生での愛読書は『福翁自伝』と『平家物語』でしょうか。前者は江戸末期から明治にかけて活躍した福沢諭吉の自伝であり、後者は人形浄瑠璃や歌舞伎に多く採り入れられた軍記物語の傑作です。『福翁自伝』を読むと、明治維新前後の

躍動感あふれる時代の変化が心を躍らせてくれます。しかし、一方、我々の日常生活の中で物欲に駆られてあれやこれを買っても、嬉しいのは当座のことだけで、結局は満たされない思いが残ります。モノの世界に虚しさを覚えたときに『平家物語』を読むと、栄華を極めた人でさえ、いずれは滅びるという栄枯盛衰を感得することができません。

いずれにせよ読書は楽しいものですし、そして色々な知識や考え方を学ぶことのできる宝物です。皆さんも是非、色々なジャンルの本を読んで、人生を豊かにしてください。

1組 新海教授

柳本 有輝 ○〇していないのはあなただけについて
 川本 美早 高齢者を守るために本当に必要なことなのか
 有馬 千尋 将来の希望について考える
 西川 眞子 日本女性の社会進出について考える
 吉田 静華 教育と経済について考える
 大谷 史佳 幸福・希望と経済について考える
 盧 功耀 消費税のアップについて考える
 増家 有 教育・指導について考える
 安永 大輔 体罰の有効性と指導のあり方
 森 恵倫子 教育と行動経済学
 ★達川 鈴菜 大学教育について考える
 上武 将也 所得税と消費税について考える
 勇 威広 甲子園に出場するにはについて考える
 鈴木 大輝 「倫理観」「価値観」から物事を考える
 野村 幸奈 人間心理について考える
 大久保 健志郎 身近にある経済学について考える
 速見 昂希 経済学と心の関連性

小山 拓希 日本の労働の特徴について考える
 大屋敷 親平 幸福について考える
 新林 嶺央 私たちの身の回りにある経済学
 藤井 大樹 少子化について
 与夢 真帆 私がおもう「経済学を磨く」
 笠井 詩織 経済と幸福のつながりについて考える
 中島 祥太 大学教育と高学歴の収入について考える
 宮地 亮太 男女問題について考える
 小宮 真帆 日本の教育と経済の関係について考える
 上村 久峻 『経済学のセンスを磨く』を読んで
 西本 誉人 私たちの周りに散らばっている経済学について考える
 井手 誉人 なぜ大学に行くのかを考える
 山田 周平 利他心について考える
 井面 雄祐 少子化について考える
 満井 祐貴



2組 森田教授

石黒 宏太 阪急電鉄（神戸線）の概要
 伊藤 翼 キノコはどのような人にとって必要とされているのか
 竹内 洋人 お金持ちになるにはどのようなプレゼンをする
 すればよいのか
 渋谷 有理奈 ゆるキャラは地域活性化に一役かっているのか
 松田 翔真 左利きはスポーツにおいて本当に有利なのか
 畑山 惣一郎 海洋民族からヨットの魅力を知る
 安藤 舜 クリスマスにおける経済効果
 坂口 知美 笑顔に隠された見えない涙
 桑嶋 明友香 なぜ自己啓発本が売れるのか
 山家 大知 フィットネス市場の考察と筋トレが社会全体に及ぼす経済効果
 重松 莉緒 ドナルド・トランプ氏が支持される理由
 岡野 晃大 相撲広告は永谷園のひとり勝ち
 太田 尚吾 音と環境にはどのような関係があるのか
 高木 俊隆 世代間格差の是正のためには
 清竹 美央 世界一のテーマパークへの挑戦—USJのV字回復と今後の企業戦略—

天野 凌 人気球団になるための課題点
 中村 桜子 ポイントカードは持つべきか
 大熊 俊矢 日本のスーパーマーケットがこの先、生き残るためには
 歌原 成哉 心理学と経済の密接な関係とは
 田子 智士 超地域的呼称「ヘレカツ」一地域区分、成り行き、そして衰退—
 中野 智貴 ローソンがコンビニ業界で天下をとるには
 濱口 凌雅 外国人の人権問題
 佐伯 梨紗 ウォルト・ディズニーはなぜ、ディズニーランドを造ったのか
 町田 亜弥 正しく恋愛せよ—女性の恋愛が日本を救う—
 黒川 実結 視聴率の大きな仕事
 ★黒田 涼子 食品ロスとその対策
 中田 晴 原発の危険性と新エネルギーの可能性
 直田 桃佳 睡眠が私たちに及ぼす影響

3組 白井准教授

前田 海咲 増大する救急車需要対策としてのトリアージ
古園 果菜 救急車のたらいまわしとその原因について
田中 駿人 死刑廃止論とその正当性について
中前 智貴 原子力発電は不必要な電力であるか
★白井 友融 The use of nuclear power generation --
Considering and examining from the cost
コミュニケーション技術の発展が人々に与
える影響について
吉鶴 陽 原子力発電について
李 楚萌 日本における原子力発電の是非
舟井 大貴 救急車利用の現状と対策
金 栄瑛 放射性廃棄物処理問題について
川口 涼太郎 救急車の有料化の是非について
吉田 果朋 原発のあり方について
東川 優 Jリーグの課題とその改善策
小玉 惇平 再生可能エネルギーのCO2削減効果とコ
山邊 紋子 ストの関係

鶴見 和香 原発の是非についてメリット・デメリット
から考える
郷 存洋 原発の是非と他のエネルギーとの比較
幸泉 愛美 救急車有料化の是非について
前田 祐一 日本に死刑制度が必要か否か
行俊 未都 死刑・終身刑・無期刑について
窪田 椋太 原子力発電の是非について
谷口 雄紀 男女間賃金格差の改善について
片山 慎吾 日本と中国のバブル経済
占部 拓也 各家庭における電力の固定価格買い取り制
度と原子力発電



4組 加藤准教授

岩熊 友哉 最低賃金制度が社会に及ぼす影響
宮澤 真穂 どんな地域でも成功する地域活性化活動
重野 啄人 コンビニエンスストアと地域性
松井 宏介 2020年東京オリンピックの経済効果
久保 篤史 Jリーグが海外リーグに追いつくには
越智 俊介 2020年の東京オリンピック ～経済的な
オリンピック開催のメリットデメリット～
長時間労働は正の意義
佐々木 柚佳 コンテンツツーリズムを成功させるには
平岡 知樹 過疎地域のまちづくりを考える
小山 麻衣 吉野家はなぜ国産牛を使用しないのか
山田 亮汰 長時間労働の影響
上田 優里奈 「サザエさん」の視聴率の株価の関係とは
上瀧 俊輔 オリンピックにおける雇用促進とはどのよ
野中 優作 うなものか
新澤 拓也 東京ディズニーリゾートはなぜ人気を保ち
続けているのか

岩崎 杏花 ウェブマーケティングの影響力～ソーシャル
メディアの活用～
森 里咲 欧州の移民問題の現状と経済的影響
政井 亨介 テニスラケットの売上競争
尾崎 祈星 任天堂、失敗からの成功への道
古家 和泉 今後の日本におけるフェアトレードの普及
方法について
★柳澤 ゆきの ドラマ仕立てのシリーズCMの有効性
蜂谷 亜都子 マイナス金利と企業の関係
鎌田 優介 業種別で見る環境情報開示
金子 麻緒 100円均一で儲かるのか～小売店100円
ショップの経営戦略 ダイソーは本当に一
人勝ちなのか～
岩城 悠人 人間が行うべき仕事と人工知能やコン
ピューターが行うべき仕事
肩野 裕大 ユニクロとしまむら
寺川 楓 発展途上国の教育と健康～女性教育の重要性～

5組 平山教授

川野 奨平 事例から学ぶ地域包括ケアシステム
 北田 康平 水資源のこれから
 西村 海人 過去と現在の音楽の需要の変化
 森永 耕ノ介 若者が抱える社会問題
 仲村 哲哉 マイナス金利政策
 浅田 菜月 ディズニーリゾート式経営がもたらす影響とは
 上山 紗佳 東京ディズニーランドはなぜ人気なのか
 深見 樹 オリンピックと経済効果
 芳田 大海 東京オリンピック
 村林 優 地方銀行の現状と課題
 梶田 将暉 急成長したアマゾンの物流ビジネス
 比留井 恭佳 日本のグローバル企業～日清食品～
 梅村 千裕 チョコレート・ビジネス
 小田 竜輝 イギリスのEU離脱による影響
 小谷 理希也 アジア社会と貧困
 南雲 勇輝 日本における貧困の現状
 濱田 浩平 爆買の行方

佐伯 拓夢 2020年東京オリンピック開催における問題点とは
 竹中 研輔 トランプショック～誕生から日本への影響～
 北本 紘之 日本労働環境による過労死問題
 富崎 弘郁 東京オリンピックがもたらす影響
 原田 拓真 日本における全体国家主義体制の確立と現代の日本との関わり
 溝下 莉奈子 女性の社会進出について
 古家 和輝 日本の年金問題
 藤田 怜男 死刑問題について
 井谷 優梨香 メディアが見せるイメージと影響力とは
 ★藤田 隼矢 消費税増税は悪であるのか
 野尻 明宏 オリンピックが社会に与える影響とは
 鈴井 絵里香 アメリカのこれから
 中井 涼華 増税と私たちの未来
 平田 良太 安全な鉄道構築へ向けて



6組 田畑教授

★田中 大也 晩婚化について
 福戸山 叶恵 日本はTPPに参加するべきか
 井上 蒼紫 東京一極集中について
 足立 一 移民政策を考える
 猪田 亮 ウォーター・ビジネスについて
 赤田 大輔 福島の現状・問題について
 瀬野尾 安紀子 東京ディズニーランドの人気の理由と成功の秘訣
 川上 碧 労働人口減少時代におけるあるべき日本の移民政策の考察
 小池 麻里子 脱原発について
 堀 寛将 シニアビジネスについて
 松本 和香 日本の農業問題を解決するには
 矢野 遼河 EU分裂と世界経済への影響
 三宅 真由 少子高齢化による経済への影響
 山田 唱太 日本における奨学金制度について
 谷村 智 空き家問題
 中本 雄大 食料自給率について
 金原 将佑 原子力発電所の必要性

渡辺 正哉 小中学生のスマートフォン普及率の増加と問題
 橋本 典子 地球温暖化について
 藤岡 竜也 人口知能の発達と我々への影響
 高橋 陸 デポジット制度について
 倉田 佳青 「チケット転売」について
 金岡 和永 日本の英語教育について
 丸山 健太 日本の労働環境
 紅林 里奈 広告とは何か
 行司 愛美 カジノ法案について
 井上 達也 タバコの危険性について
 高木 優志 ブラックバイトについて
 奥 暉和 オリンピックの経済効果

7組 舟木教授

横山 紅花	外国人労働者について
西脇 優陽	カースト制度が及ぼした現代インドの実態
米澤 佳伊	クールジャパンが今後の日本に及ぼす影響
田仲 悠介	日本の領土問題について
太田 菜月	ユニバーサルデザインの考え方
村上 一誠	メンタルトレーニングについて
西邨 さくら	地方とまちづくり—人口減少社会と過疎化—
榮阪 健太	モチベーションと発達
★湊 なつみ	子どもの貧困について
吉田 勝大郎	スポーツ競技能力に対する人種的要因についての考察
青野 巧	なぜ望まれていない延命治療が増えるのか
笹原 光二郎	オリンピックがもたらす様々な効果
庄 宏樹	道州制で地方は活性化するか
阿部 優志	世界平和への歩み
木下 雄介	フリーメイソンについて並びに日本への影響
切通 基晶	健康的な体づくりとは
安在 海人	日本人の精神は本当に武士道精神から作られているのか

具足 愛	ユニバーサルデザインについて
福本 恵太	音楽が存在する意味とは何か
鈴木 遼太郎	飲食店（主に居酒屋）での飲み放題・食べ放題による経済効果
平尾 明日美	人はなぜ SNS を利用するのか
荻野 佑斗	メンタリズム
高島 由衣	アイドルが経済に与える影響と社会的問題—アイドルとファンのチカラ—
原田 紬希	死刑制度の存廃について考える
村田 知貴	アフリカの教育と私たちのできること
塩田 聡希	本当の幸福とは何か—我々はなぜこれほど疲れているのだろうか—
田村 圭一郎	なぜアップルの商品は他社との競争に勝つことができるのか
岩満 春菜	スマホがテレビに与える影響
田中 彩貴	CD 不況—何故 CD は売れなくなったのか—
藤本 脩佑	消費税増税がもたらすメリット・デメリット
永友 耀	テロ問題の現状と対策
鬼塚 太郎	熊本地震と阪神・淡路大震災について



8組 韓准教授

内田 圭祐	無印良品の売り上げが伸びる理由
諏訪 航大	なぜ日本の大学生は熱心に勉強しないのか
奥谷 貴之	なぜたばこはなくなるのか
佐藤 亜美	店舗経営における経営戦略としての空間演出
池下 晴紀	音楽と違法ダウンロード
三浦 玲実	眼の力が生み出すスポーツのセンスとは
萬谷 翼	カレーはどうして国民食となったのか
坂林 慎平	血液型と性格の関連性—なぜ日本人は血液型による性格判断を信じるのか
佐々木 貴哉	ロックはなぜこれほどまで人気があるのか
山口 瑞希	運動神経とは親の遺伝であるのか
向井 里於	なぜ人は第一印象を気にするのか
福島 優依	ユニバーサル・スタジオ・ジャパンにおけるキャラクター戦略
★黒田 佳奈	得する農業、損する農業
前川 友吾	なぜ日本国政府はふるさと納税を推進するのか
坂本 大雅	日本の食料廃棄の現状と対策—スーパーマーケットを例に

小田 祐之介	なぜセブンイレブンはコンビニエンスストア業界で一番成長しているのか
矢木 知輝	うまい棒の経営について
山中 里咲	アニマルセラピーから考える—現代の人間社会に影響を与える動物たち
山口 果奈	城崎温泉の人気急騰の理由とは何か
北川 大輔	国内ネット通販の市場規模と人気の理由
古性 孝陸	なぜガリガリ君の人気は現在まで続いているのか
森田 陸斗	コンタクトスポーツと体重の関係性
森本 龍太郎	日本はカジノを設立すべきだ
藤木 皓平	水からみえるもの
松井 ひかる	なぜユニバーサル・スタジオ・ジャパンは人気になったのか
藤屋 皓一	スマホゲームはなぜ発展したのか
野原 充香	How to win cola vendetta in Japan
小松 淳也	ZARA はなぜ世界一になったのか

9組 根岸教授

三木 光太郎 転職市場は拡大していくのか
 万力 亮介 なぜ、やきにく加茂川武庫之荘店は流行るのか
 桑田 英樹 視聴率はなぜ重要視されているのか
 長井 悠一 年金問題
 岡本 孝洋 情報メディアの形態と広告の変化について
 石井 優樹 スポーツ推薦は必要か
 砂場 柗平 長時間労働はなくなるのか
 上田 海斗 大学の成績は就職に関係があるのか
 山田 康平 トランプ氏はなぜ勝利することができたのか
 和氣 裕弥 高卒と大卒の違い
 森田 悠斗 女子力で日本経済を救えるか
 古本 萌 流行はなぜ繰り返されるのか
 泉 就磨 奢侈税を日本に取り入れると日本の税制度はよくなるか
 濱田 悠吾 なぜたばこを吸う人は消えないのか
 久富 真貴 アフリカ(ウガンダ)には教育の支援が必要である
 樋口 直也 人工知能が人間社会に与える影響について

北浦 靖朋 少子高齢化
 林 佑真 広島カーブと経済効果
 大崎 俊輔 なぜ詐欺はおこるのか
 島上 恭翔 オリンピックと経済成長
 谷口 絢音 なぜ東京ディズニーランドと東京ディズニーシーは人気なのか
 藤木 亜成 2025年大阪万博は開催されるべきなのか
 池奥 龍太 集中力はいろんな観点から向上できるのか
 隼矢 璃央 ソーシャルメディアの活用
 ★松下 璃央 アジア大学首位から転落した日本はテスト主義をやめるべきか～諸外国から学ぶテストの意義～
 大高 朱南 シンガポールの教育
 藤田 雅子 何型が経営者に向いているのか
 吉田 梨沙子 シャネルはなぜ第一戦で活躍し続けられているのか
 寺岡 榛花 人が与える第一印象は外見で左右されるのか



10組 國枝准教授

吉田 凌馬 タバコの是非
 蓮佛 幸輝 人種差別 アフリカ系アメリカ人民権運動
 竹内 克志 地球温暖化問題と二酸化炭素削減の取り組み
 和田 佳代子 救急車を有料化するべきか否か
 尾上 葵 キラキラネームは日本語の観点から見て問題か
 金田 明久 ダンスとは何か。
 橋間 遼 フリーターの増加によって起こりうる社会問題
 佐々木 裕也 ブラック企業
 上野 文照 メディアと国民
 赤木 宏穂 「なぜハリウッドスターシリーズが大人気となったのか」
 廣田 雅志 日本卓球の発展について
 菅野 央詞 現代社会における人間関係の希薄化
 魚谷 航平 ゴジラシリーズの変遷から考察する日本の経済・社会
 花本 健 女性の社会進出について
 岩瀬 晃人 日本におけるカジノ
 浅田 真先 アルペンスキー

荒井 友理 スターバックスはなぜ人気なのか
 赤田 尚輝 ヘイト・スピーチと法規制
 内田 成美 輸送障害により起こる経済損失
 荒木 朋子 日本のスポーツ産業ー2020年東京オリンピックに向けてー
 宮村 翔瑠 なぜガラケーは無くならないのか？
 周防 智子 東京オリンピックの与える経済効果
 増田 靖子 日本茶・世界進出へのカギ
 山中 菜乃子 2016年 世界の政治・経済
 早川 恵望 「ディズニーの儲かる仕組み」
 江本 恰朗 自然状態と政治的社会的関わり
 ★阪江 遼太 なぜ政治とカネはなくなるのか
 今井田 拓也 プロスポーツチームが地域に及ぼす力
 鄭 城旭 高齢社会の原因とその対策

11組 白井准教授

- 反橋 七海 On the rates of become abusive parent among victims of child abuse
 野黒 未紗 消費税増税の是非
 久保 裕志 SNS、ソーシャルメディア、ネットが普及してきた影響による音楽の変化
 楠元 彩賀 尊属殺人罪の規定と廃止
 平石 康太郎 死刑存廃について
 黒田 大暉 救急救命士の現状から、「今後の救急医療の供給量増加」に向けて
 中谷 大志 救急車出動の効率化を図るために
 劉 瑤 救急車有料化について
 中辻 俊太郎 学年末レポート：尊厳死の意思決定
 大田 侑以子 アメリカ合衆国の肥満の実態と抑制対策～日本の文化である和食を通して～
 ★溝口 真介 「死刑制度の是非について」
 谷口 清太 日本の少子化対策～スウェーデンの例を参考に～
 小出 将宏 森林問題は、抑止できる社会問題であるのか
 鈴木 連太郎 外国人参政権について

- 前田 広人 救急車を有料化にするべきか
 福元 雄大 救急車の有料化の是非について
 武田 梓 死刑制度の問題点と終身刑の導入の是非
 近谷 僚太 救急車有料化のリスク/評価について
 内藤 敬太 ロンドン五輪から考察する東京五輪の経済波及効果
 山本 和哉 少子高齢化改善のための雇用制度
 山根 あずさ 外食産業における食品ロスの削減
 増田 音織 救急車有料化を防ぐ方法について
 大藪 将貴 日本は炭素税、排出権取引のどちらを導入すべきか
 飯尾 真行 高齢者が引き起こす交通事故を減らすために



12組 田教授

- 土田 裕亮 各コンビニの歴史と経営状況
 袈裟丸 みのり 地方の人口流出に関する考察
 船岡 大暉 世襲による機会の不平等性からの脱却
 吉村 卓也 ASEAN(東南アジア諸国連合)の現状と課題
 辻 修平 日本の水資源問題と水ビジネスの関係性
 松端 航平 教育格差について
 田口 佳菜 現代社会における女性の生き方
 神楽 将 食品添加物の安全性に対しての国民の意識
 三橋 巧輝 日本にカジノは建設できるのか
 平山 励 LGBTとセクシャルマイノリティーが与える影響
 岡村 圭祐 LCCと航空業界の現状
 岡 遼世 私たちが警察と共に行うヘイトスピーチの対処
 樋口 和哉 東南アジアの経済成長からみた日本企業のこれから
 西原 涼矢 テレビ広告とインターネット広告のこれからについて
 日根野 茜 日本の自殺とその対策について
 久治 香波 現代の日本人は幸せなのか

- 大川 義樹 格差社会を導く大学選択
 大村 菜緒 日本の義務教育について
 竹島 梨紗 天皇の生前退位による社会への影響
 亀谷 啓太 介護保険制度～介護放棄について～
 四宮 捷平 羽田空港と成田空港は共存できるのか
 足立 遥 国民皆保険制度の現状と課題
 柏原 加奈 インターネット広告市場の発展による経済効果
 ★居石 萌子 21世紀型スキルと教育～高校教育の見直し～
 山西 大貴 スマートフォンの普及による社会問題
 丸尾 涼太郎 スマートフォンの普及による社会問題
 石田 成政 早期化する就職活動
 坂口 幹 ソーシャルゲームの現状と今後あるべき形
 平尾 咲季子 日本の子供の相対的貧困
 田口 綾華 人工知能による仕事の容容
 菊池 康平 北朝鮮の核問題と今後の課題
 宮本 優 日本国内の農業問題について
 ニート問題

13組 大高教授

中山 七海	ジャニーズが経済に及ぼす影響力
池田 将規	資本主義とアニメーター
★原田 萌	目に見えない資本の重要性
中島 悠介	資本主義とスポーツ
中谷 一平	広告媒体の変化と現代資本主義の関係について
稲垣 大志	資本主義とふるさと納税
西濱 尚幸	チケット転売問題と資本主義について
石堂 未和	サブプライム問題と資本主義
坂下 和駿	資本主義の浸透による道德との衝突
門田 虎之	日本の貧困と格差
田中 佐依	資本主義とバブル
武田 大樹	特典付き商品の大量廃棄と現代経済の特徴
山口 結衣	CD不況と現代の音楽業界
松原 弘樹	E-Sports と資本主義文化の関連性
神崎 未来	ディズニープリンセスと資本主義
佐内 佑基	経済格差の中国
加藤 ひかる	資本主義と情報社会

長谷川 歩紀	資本主義と中国
高木 咲良	資本主義社会における芸術
岸田 暁	資本主義と環境問題ー資本主義と大気汚染の関連性についてー
宮坂 瑠美	ロマンスと資本主義
梅田 運登	少子高齢化問題と資本主義
八幡 佳介	日本のサービス業と雇用
倉田 恵介	資本主義の終焉とその後
藤塚 雄己	資本主義とアメリカ格差
畑堀 克仁	資本主義とフェアトレード
西垣 圭	テロとグローバル資本主義
山下 舜介	資本主義における格差は問題か
中村 友也	オリンピックの意義
森口 香織	現代資本主義の文化の特徴
波々伯部 治	資本主義と日本人の精神の変遷



14組 利光教授

磯澤 隆之介	TPP と日本経済への影響
西森 大晟	イギリスの EU 離脱の経緯とその離脱が日本に及ぼす影響について
藤田 敦寛	GDP と幸福度について
石橋 夏海	消費税増税と軽減税率による影響
佐之瀬 太智	少子高齢化が経済に伴う経済の影響
森谷 智貴	GDP からGNHへ
上村 彩乃	TPP とそれによる経済的影響
澤 拓実	高齢化と社会保障について
西村 凌志	ブラックフライデーがもたらす経済効果
齋藤 慎太郎	サッカーと経済
鎌田 真守	プロ野球と経済
藤本 咲子	ブランド品はなぜ売れ続けるのか
金山 峻己	阪神甲子園球場の経済効果
金 省吾	日本のオリンピック開催による経済効果～東京オリンピックの開催は日本人の実質的な生活水準を向上させるのか？～
新見 大晴	公益ギャンブルによる経済効果

竹村 颯真	日本は移民政策を推進すべきなのか
貝川 良太	スラム街について
山本 歩	ユニバーサル・スタジオ・ジャパンがもたらした経済効果
西村 鞠伽	学力と経済
木本 なつみ	源泉徴収制度とパートタイム労働への影響
★矢吹 ひなた	「名古屋飛ばし」は名駅再開で変わるか
前田 晴香	年金問題について
宇都 諒人	歴代大統領と社会情勢・経済への影響
蓮澤 諒人	東京ディズニーリゾートの経済効果
舩本 裕一	LCCの概要と経済効果
楠山 大貴	書籍電子化が関係市場に与える影響
濱本 翔	M&A で日本企業が成功するには
大谷 康剛	トランプ大統領による今後の経済影響
勝野 裕介	AI ビックデータがもたらす経済社会の変革
奥野 結衣	日本の格差社会についてー問題点とその解決策ー

15組 藤田教授

吉田 真名 これからの介護とジェンダー問題
 的場 優太 パチンコ産業は日本にとって必要か
 田上 夢子 日本の子供の貧困と私たちの意識
 川崎 夢都 アベノミクスを検証する
 細江 泰治 食品ロスが社会、環境に与える影響とは
 中嶋 大貴 音楽配信サービスは音楽市場にどのような影響を与えるか
 小早川 貴則 美容健康志向の日本人諸君
 本田 稜一郎 TPPと日本の食料自給率とは
 西本 夏琳 死の選択：日本で自分の最期を選択することはできるのか
 綾 隆一 貧困地域の間違った支援策
 土肥 花那子 USJはなぜ人気があるのか
 藤田 裕介 地球温暖化を活かすことはできるのか
 石渡戸 紘 日本における英語教育の問題点
 津山 健司 AKB48の劇場と宝塚歌劇から考える「劇場」の役割と成功理由

天内 健太 日本人と投資
 上野 潤一郎 日本にカジノ産業を導入すべきか
 伊崎 陽一郎 グローバル社会における日本語教育の重要性
 深川 理子 読書離れを防ぐことは可能か
 渡辺 伍郎 英国のEU離脱によって今後のEUはどうなるのか
 屋 真由子 SNS：生活に深くかかわるもの
 太田 有哉 日本マンガはなぜ海外で人気を獲得したのか
 永井 廉 18歳選挙権で若者は未来を変えるか
 田畑 陽菜 日本の航空行政：地方空港が生き残るには
 信多 孝重 BGMがもたらす店舗の売り上げ効果と消費者行動
 ★長谷川 涼太 加熱する「ふるさと納税」：納税者と自治体のあり方とは
 山崎 佑斗 広告代理店のメディア支配と政治
 大西 悠太 孤独死と被災地
 緒方 亮輔 世代間DV



16組 増永教授

平石 武士 ファッションから見るアメリカ
 駒田 佑太 ベトナム戦争のアメリカーアメリカはベトナム戦争でどう変わったか
 平尾 楓 自然から見るアメリカ
 石田 拓也 ファーストフードから見るアメリカの健康問題
 森本 愛菜 ファーストフードから見るアメリカーファーストフード産業が発展した理由
 田中 佑樹 ファーストフードから見るアメリカー水運と海運から見えてくるアメリカの姿とは
 高畑 愛 健康で見るアメリカー遺伝子組み換え vs. オーガニック
 矢倉 嵩士 交通から見るアメリカー鉄道はアメリカに何をもたらしたのか
 ★賀来 知宏 ファッションから見たアメリカーその服をあなたは本当に知っていますか？
 向 芳輝 アメリカにおける格差拡大の要因
 水原 貴樹 格差社会アメリカー今後の展望
 武田 有紀 経済から見るアメリカーアメリカ貿易の場合
 中野 敦子 ファッションから見るアメリカーファストファッションの裏側
 畑中 皓貴 戦争から見るアメリカ人の性質とアメリカ経済

間宮 啓太 なぜアメリカは環境保護に力を入れるのかー化学薬品の歴史と今のアメリカ
 永業 真平 テロで見るアメリカ
 杉山 貴美 社会制度から見るアメリカにおける格差の現状
 藤本 康平 アメリカの独立と現代への影響
 川中 康平 健康から見たアメリカー死因から分かる国民性
 山田 翔太 環境保護から見るアメリカ
 政島 拓海 ファーストフードの明暗ー食の安全について考える
 大河内 諒彦 交通から見るアメリカ
 河野 華奈 交通で見るアメリカーなぜ格安航空が使われるのか
 瀧川 桃子 地球温暖化から見るアメリカ
 村木 佑羽 健康で見るアメリカー貧困が生み出す肥満
 松山 渚 経済から見るアメリカーサブプライムローンとリーマン・ショックがもたらした影響について
 昇 祐樹 医療で見るアメリカ
 中本 圭哉 アメリカの格差社会
 中井 陽一 アメリカの経済格差

17組 山鹿教授

荒金 大樹 若者の読書離れは本当か？
 松井 克彰 若者の読書離れは本当か？
 岩根 拓矢 若者の読書離れは本当か？
 堀 俊之 若者の読書離れは本当か？
 坂東 雅之 若者の読書離れは本当か？
 戸村 真隆 若者の読書離れは本当か？
 赤塚 ひなた 若者の読書離れは本当か？
 平井 大樹 若者の読書離れは本当か？
 森川 達平 若者の読書離れは本当か？
 川野 佑 若者の読書離れは本当か？
 ★岡崎 隆洋 若者の読書離れは本当か？
 松下 恒一郎 若者の読書離れは本当か？
 濱口 浩三 若者の読書離れは本当か？
 山下 将史 若者の読書離れは本当か？
 能仁 陸 若者の読書離れは本当か？
 濱田 祐輔 若者の読書離れは本当か？
 中山 凌輔 若者の読書離れは本当か？
 井上 天馬 若者の読書離れは本当か？

山口 実央 若者の読書離れは本当か？
 杉原 野々花 若者の読書離れは本当か？
 長谷川 将吾 若者の読書離れは本当か？
 井之上 馨太 若者の読書離れは本当か？
 神保 直人 若者の読書離れは本当か？
 竹内 理浩 若者の読書離れは本当か？
 道中 祥馬 若者の読書離れは本当か？
 隅田 季波 若者の読書離れは本当か？
 丹羽 壮太 若者の読書離れは本当か？
 南開 淳志 若者の読書離れは本当か？
 柵木 理沙 若者の読書離れは本当か？
 吉岡 孝将 若者の読書離れは本当か？
 青木 菜々 若者の読書離れは本当か？
 住吉 咲久良 若者の読書離れは本当か？



18組 古澄教授

島山 樹 トヨタの人気の理由
 山下 稜央 デジタルオーディオプレーヤーを売るために
 山本 多惠 世界一のアパレル会社インディテックスの秘密
 島ノ江 佑香 ネスレ日本株式会社～売上高を伸ばし続ける理由～
 繁田 尚美 スターバックスコーヒー ～成長し続ける理由～
 岩井 秀斗 ファーストリテイリング社について
 榎林 映樹 CDの売れ行きと今後について
 山井 莉那 サイバーエージェントの経営戦略
 藤井 悠市 ファストファッションのH&M
 関口 颯 DMM.com Groupの多角化戦略について
 大垣 壮真 ポケモン GO に関する考察
 藏本 披慧 アシックスがトップの業績を残してきたわけ
 田森 尚樹 Wii V についての分析
 澁谷 しえり 株式会社資生堂は儲かっているか
 森脇 嘉隆 サントリー天然水がなぜ売れるようになったのか
 辻 隆之介 「スシロー」は何故売上高1位を維持し続けているのか

佛谷 徹 阪急電鉄
 並川 大輝 アンダーアーマー社の飛躍の可能性
 ★中島 宇将 自動車産業の社会的責任の重要性
 石川 幸汰 文藝春秋社の雑誌はなぜ人気か
 角田 樹 NIKE が売れている理由
 西川 知里 Instagram の人気急上昇
 福森 翔 マリファナ合法化の是非
 菊山 竜輔 Line 株式会社
 今井 菜々子 関西空港の成功
 長澤 昌広 セブンイレブン～止まらぬ成長の秘密
 竹内 大智 Panasonic
 山本 康平 くら寿司が売上高で頂点を取るためには
 太田 紘彰 なぜセブン&アイは事業拡大・黒字経営が
 出来ているのか
 坂井 萌恵 近畿大学はなぜ人気なのか

19組 山田准教授

竹村 奨馬
眞下 莉子
小坂 真人
井面 慈子
★宿野 晃弘
中島 百香
森永 清太郎
木村 真一郎
吉 浩成
福田 幸大
有村 航平
岡部 啓
村上 絢音
勝部 樹

障害とは「病気」か、それとも「個性」か
マイナンバー制度導入について：今後の日本
情報社会がもたらす暗雲：最先端技術への執着
我が国の死刑制度に対する考え：大切な人
が亡くなった時、あなたはどうしますか
人口減少の恩恵：人口減大国日本の選択
日本は終身刑を導入すべきである：人は生まれ
ながらにして自由かつ平等の権利を有する
日米中間係をどのように構築していくか
「いじめ」を無くすために：対策の第一歩
はどこに打つべきか
子どもの貧困と教育格差の関連性
集団的自衛権は違憲なのか：安保法案と憲
法9条のこれから
アジアの少子高齢化を救え：出生率の重要
性と年齢構造の変化
ヘイトスピーチ解消法成立：初の法整備、
これからの差別について
未来のクルマ
異常気象と地球温暖化から学ぶ：何もして
いないと地球が危ない

矢田 多佳子
小林 万里奈
奥平 真希
富井 諒太
吉井 貴郁
藤原 颯汰
藤原 雅史
飯阪 未佳
河口 馨
平尾 圭佑
巽 千穂
中村 青依
細見 美紗
安部 善行
豊田 克己
木戸口 天馬

中国経済の失速：想像を超える深刻な衰退ぶり
日本は死刑制度を廃止すべきなのか：死刑
制度の代替刑としての終身刑制度について
人口減少社会をどう乗り切るか：労働力増
加のためにいまずべきこと
風営法改正とそれにおける飲食店営業
SNSが社会にもたらした新たな人間関係
の相について
考え方でビジネスは変わる：日本をトップ
レベルの国にするための考え方
なぜブラック企業はなくなるのか
少子化問題：原因
トランプ次期大統領がもたらすもの：日本
がどうアメリカと向き合うか
沖縄基地問題：戦後70年揺れる沖縄
ブラック企業：この宿敵は倒せるのか
日本における女性の社会進出問題：ガラスの天井
日本の観光客数と課題：観光と経済の関係
竹島・独島と呼ばれる島
少子化対策改善の必要性
恍惚の人：認知症に関する偏見



20組 神崎教授

内堀 真依
安福 生
三浦 功也
稲田 陸斗
蛸川 智也
辻橋 一吉
★古賀 啓太
次田 瑞希
辻 舞雪
矢内 優
吉田 華
藤田 直人
孫 慶浩
井上 紗良
原 穂乃花
尾下 卓人
富岡 聡馨
吉田 麻里子

日本人と中国人
日本とFBI
日本人とスポーツ
日本人とサッカー
日本の経営
日本の食—なぜ健康に悪い食品が増えるのか—
日本人と旅—日本人の旅行今までとこれから—
平和について
日本の空き家問題
日本人とマスメディア
日本人とアメリカ人
サプライチェーンの裏側
日本の社会保障制度
日本と死刑制度
日本人と宗教
日本の野球と経済
日本人とトルコ人
日本と異常気象

西尾 涼太
貴船 陸
瀬ノ口 大輝
松田 滉平
淡路 紗希
松尾 誠悟
山口 尚輝
妻鳥 幹大
藤田 優貴
中山 幸俊
飛田 篤彦
森本 竜平
大田 真也
小畑 瑛一朗
堀見 響希

日本人とユダヤ人
日本人と労働
日本のいじめ・体罰問題
日本の漫画
日本の農業
日本人の勤勉性
和食と健康
日本人と名字
日本人の考え方とは
「日本人と米」について
日本人と日本料理
日本人と敬語
日本人とアニメーション・マンガ
非接触型ICの日本における決済利用
日本人と宗教生活

21組 中川教授

黒塚 えのか 在日外国人と就職差別—日立就職差別裁判から考える
 滝口 眞結 在日外国人差別—就職差別と結婚
 古家 凜 在日外国人と社会保障
 山崎 裕太 在日コリアンと日本国籍
 新井 万葉 国籍問題とこれからの日本
 中尾 昌太 指紋押捺拒否する在日外国人
 岡内 望 研修生
 寺岡 芳樹 指紋押捺拒否者が変えた日本の指紋押捺制度
 森田 有香 在日華僑、華人の歴史の歩み
 竹本 将太 ニューカマーの生活と労働
 神谷 由季 外国人研修・技能実習制度の実情
 山内 彩菜 人権と国籍
 乾 美咲 在日朝鮮人と民族教育
 岡山 明日香 在日外国人と帰化制度
 婦木 康平 教育を受ける権利と朝鮮学校
 山根 いつき 指紋押捺と同化政策
 神山 海星 戦後の在日外国人の入管法の問題点と変化

武内 真由 在日外国人と戦後日本
 川内 篤哉 在日韓国・朝鮮人の日本国籍取得について
 山田 ひとみ 多文化共生に向けた教育の課題
 ★合田 温 在日コリアンへの教育に関する差別
 三谷 勇人 「在日外国人」と留学生教育—「留学生10万人計画」・「留学生30万人計画」から見る日本の留学生教育
 松下 友紀 外国人労働者と日本社会
 飛田 祐之介 外国人労働者の現状
 渡邊 泰心 外国人労働者と研修生について
 山淵 日向恵 外国人労働者問題
 田中 麻椰 在日朝鮮人の歴史
 佐々木 将人 在日コリアンに学ぶ日本の移民政策



22組 山鹿教授

大成 悠真 若者の読書離れは本当か？
 大西 裕貴 若者の読書離れは本当か？
 西村 彰太 若者の読書離れは本当か？
 小林 和佳 若者の読書離れは本当か？
 田中 優一 若者の読書離れは本当か？
 木下 混士 若者の読書離れは本当か？
 二滝 知哉 若者の読書離れは本当か？
 小畑 智紀 若者の読書離れは本当か？
 松本 有郁 若者の読書離れは本当か？
 ★神垣 友一 若者の読書離れは本当か？
 小林 千紗 若者の読書離れは本当か？
 大宅 未紗 若者の読書離れは本当か？
 濱田 みなこ 若者の読書離れは本当か？
 曾根 彰将 若者の読書離れは本当か？
 山下 晃弘 若者の読書離れは本当か？
 番匠 実裕司 若者の読書離れは本当か？
 清水 瞳 若者の読書離れは本当か？
 西原 菜々 若者の読書離れは本当か？

鈴木 綾華 若者の読書離れは本当か？
 西尾 春香 若者の読書離れは本当か？
 井下 晴貴 若者の読書離れは本当か？
 萩原 悠司 若者の読書離れは本当か？
 荻野 真優 若者の読書離れは本当か？
 大藤 朋子 若者の読書離れは本当か？
 小網 翔馬 若者の読書離れは本当か？
 浅野 満帆 若者の読書離れは本当か？
 松本 久輝 若者の読書離れは本当か？
 清水 拓真 若者の読書離れは本当か？
 山本 力也 若者の読書離れは本当か？
 山田 真大 若者の読書離れは本当か？
 石野 陸夫 若者の読書離れは本当か？

学生氏名・論文タイトルの順に掲載しています。★印は優秀論文です。

23組 長谷川准教授

雪本 和花 TVCMの必要性
松本 陸 日本の教育は今のままでいいのか～世界のリーダーであるために～
山岡 悠斗 日本国内の自動車における自動運転は必要か？
山崎 修吾 高齢者運転の対策の提案
山下 真司 SNSのメディアリテラシーの欠如が生み出す弊害を阻止するために
大村 英理 捕鯨問題の今後
内田 涼太 少子高齢化について
山形 真紀 外国人観光客を増やすには
伊東 桃花 アルペンスキー選手が膝の靭帯損傷を防ぐにはどうすればよいか
原田 健太 新たな指標を使った豊かさの検証
浜脇 慶大 スマホ子育てを行うべきか
奥田 真衣 マイナンバー制度の認知度の低さ
西崎 祐一 日本の英語教育の問題～speaking重視の英語教育の推進へ～
中島 聡哉 日本における死刑制度を廃止すべきか否か

岡本 千裕 日本における子どもの貧困が教育面に与える影響を解決するには
志田 菜月 消費税は増税すべきか
松岡 栄志 救急車の有料化について
高橋 祐太 豊かさと幸福度の関係性
林 浩平 原子力発電は存続させるべきである
渡邊 紗耶香 日本は選択的夫婦別姓を導入すべきか
石野 裕士 経済的豊かさと幸福の関係
佐藤 悠介 私は、18歳での飲酒に賛成である。
戸塚 風威 IR推進法案の是非について
山本 ひかり 高齢者の運転事故を防ぐために
香山 朋花 日本人の海外留学の現状とその改善策
松尾 和佳 国際市場における日本のフェアトレード問題
★岩崎 桃子 若者の投票率を上げる方法について
瀧川 裕喜 グローバル化している世界の中で日本国内の若者の雇用を守るためには
吉田 圭佑 集団的自衛権の行使は本当に自国防衛になるのか



24組 岡田教授

角谷 佳織 これからのゲーム企業
岡田 莉子 スマホ依存
砂川 礼央 たばこが与える影響 ～禁煙活動はすべきなのか～
岡部 早希 購買意欲 ～なぜ日本人はモノを買わないと言われるのか～
安武 裕太 身体能力の低下について
乾 凜太郎 若者と選挙
川上 裕也 スポーツ界における報奨金のあり方
金澤 昂季 消費増税について
長濱 彰政 クライマックスシリーズは必要か
有馬 明華 高齢者運転問題
田原 丈太郎 商品の持つ効果の変化と売り上げの関係
山内 俊央 ラグビー日本代表に外国人選手は必要か
石原 恵理 CMの影響力
田中 創馬 NPBにとってFAは良い制度が悪い制度か

★岩谷 桃佳 満員電車が乗客に与える影響 ～満員電車ゼロを可能にするためには～
羽岡 裕太郎 イギリスのEU離脱について
小田 恭平 LINEの世界進出
田中 あずさ 学校の共学化
小川 公大 脱ゆとりは失敗だ
種田 圭太郎 欧州の移民について
北坂 杏莉 動物の殺処分
井村 公俊 消費税について
岩佐 真志 温暖化対策と経済活動
山本 寛夢 結婚率の低下は問題なのか
伊関 茉穂 全日本吹奏楽コンクール三出制度の是非
趙 志堅 中国人口の出生政策及び経済問題
辻蒔 ほのか 男性の育児休暇
岸本 竜弥 たばこの適正価格について
安田 花 日本のバスケットボール

井口 泰ゼミⅡ

「真実」は共に生きる世界の「深み」にある

卒業する井口ゼミ生の皆さん、勇気を出しましょう。皆さんが学生生活を終えて乗り出していく世界は、あまりにも不安定になっていて、将来がなかなか見通せません。

しかし、表面的な変化にまどわされてはなりません。真実は、常に深いところにあるのです。一生、真実を追求していけば、どんな変化にも惑わされることはありません。

真実を探求するため、自分がまさに世界の一部なのだということを自覚しましょう。自分は自分だけではなく、他者のために生きるんだということを、自覚しないと、真実は見えてこないんです。共に生きる人々への思いやり (compassion) がなければ、真実も見えないのです。

皆さんが、これからの人生で、真実を探求するための大事な武器は、論理的な思考力 (logic) と情熱ある行動力 (passion) です。これは多くの日本人に最も欠けていると言われるものです。しかし、私たちはゼミで、アジアワイドに問題を立てて議論し、韓国の延世大学とも交流を深めました。ここに掲示してもらった卒業論文のテーマからも、みなさんが、この二つの武器を持っていることが感じられます。

社会人になっても毎日忙しく働くだけでは、これから必要になる広い視野と判断力とは、自動的に身に付きません。自分の時間を持って読書し議論し、一生学びの輪を続けていきましょう。

卒業論文一覧

村田 一成	ラオス、ルアンパバーン市におけるスラム・ホームレスが発生していない要因の考察
中尾 恒弥	日本の経済状況と景気回復への道筋について
★島上 貴臣	タイ型日本企業の構築
辻本 佳菜	移民と生きる道—多文化共生には何が必要か—
青木 拓弥	子供の貧困と教育～シングル家庭への援助～
谷高 恭平	アジアにおける通貨安定にむけて
岩原 加奈子	日本経済を支える人的資源形成の必要性～企業の新たな能力評価制度とジョブ型労働市場～
謝 名俊	中国国有企業の行方
李 昱文	定義、発展から中国のシャドーバンキングに対する考察
大河内 綾乃	グローバル化と格差—ASEAN 諸国を事例として—
林 美咲	外国人の子どもたちの教育・就職問題
王 昱成	在日中国人労働者の現状及び今後のありかた
安部 早希子	貧困がもたらす教育格差と社会への影響—日韓比較の観点から—

秋吉 史夫ゼミⅡ

1期生のみなさんへ

卒業おめでとうございます。みなさんは、私が関学で受け持った最初のゼミ生であり、こうして卒業の日を迎えられたことをうれしく思います。

スタートしたばかりのゼミの運営は試行錯誤の連続で、みなさんも大変だったと思います。しかし、みなさんの頑張りとお協力のおかげで、いろいろなことにチャレンジでき、充実したゼミにすることができました。ありがとうございました。ゼミ合宿 (淡路島、香川、滋賀)、他ゼミ・他大学との合同ゼミ、ゼミ縦コンは、私にとって思い出に残るイベントです。世話役を引き受けてくれた人、参加して盛り上げてくれた人、ありがとうございました。

卒業論文では、企業の財務データを分析し、企業価値を推定する研究に取り組んでもらいました。どの論文も、みなさんの成長が感じられる良い論文に仕上がっていました。その中でも、長岡君、上田君と戸田君、小川さん、砂川君と山本君は、丁寧な分析に基づいた優れた論文を書いてくれました。

では、さらに成長したみなさんに会えることを楽しみにしています。お元気で!

卒業論文一覧

田茂井 崇吾	アサヒホールディングスの企業価値算定
太田 貴洋	[MAZDA] の企業価値評価 (共著論文)
森上 穂子	資生堂の企業価値評価 (共著論文)
楊 瓊銘	ANA の企業価値評価
村上 樹翔	JT の企業価値評価 (共著論文)
井上 泰一	[MAZDA] の企業価値評価 (共著論文)
長岡 賛	ソニー株式会社の企業価値評価
櫻井 慎也	JT の企業価値評価 (共著論文)
生川 直人	トヨタ自動車の企業価値算定
上田 陸人	ファーストリテイリングの企業価値評価 (共著論文)
小川 直子	いすゞ自動車の企業価値算定
久保 優介	JX ホールディングスの企業価値評価
★砂川 稜太	ガンホーの企業価値評価 (共著論文)
藤田 龍太郎	JT の企業価値評価 (共著論文)
戸田 紘基	ファーストリテイリングの企業価値評価 (共著論文)
浦 航平	ヤマダ電機の企業価値評価
★山本 大介	ガンホーの企業価値評価 (共著論文)
阿佐 光貴	[MAZDA] の企業価値評価 (共著論文)
水河 香穂梨	資生堂の企業価値評価 (共著論文)

上村 敏之ゼミⅡ

上村ゼミ7期生に贈る言葉

今年1月の最後のゼミで、ゼミ生の皆さんには、2年半のゼミ生活を振り返り、言葉を1人ずついただきました。教員である私には、見えるところと、見えないところがあります。私には見えないところでも、皆さん1人ひとりが、ゼミについて楽しんでいたり、悩んでいたことを、皆さんの言葉から伺うことができました。

ゼミ運営は困難だったと思います。しかし、たやすいものでないからこそ、取り組むことで得られた経験があります。皆さんからは「コミュニティ」という言葉を多く聞きました。皆さんにとって、上村ゼミは「コミュニティ」であり、「居場所」だったのでしょうか。この「居場所」こそ、皆さんの最大の収穫です。しかしながら、「居場所」は実にもろいものです。「居場所」の持続には、個々人の努力と他者を許す寛容が必要だと、最後のゼミで話をいたしました。

今後の人生で、上村ゼミの「居場所」が生きたときに、必ずやってきます。新年会では、お互いの成長を喜び合います。上村ゼミの「居場所」は、7期生だけのものではありません。ぜひ、皆さんの「居場所」を、先輩と後輩を通して縦の「居場所」に拡張し、豊かな人生を送ってください。ご卒業おめでとうございます。

卒業論文一覧

泉谷 賢吾	ロジスティクスの歴史と成長戦略
辻居 愛華	女性の経済的自立と未婚化
長谷川 千馬	地方創生
本多 俊久	兵庫県が南海トラフ地震に耐えるために
児玉 敦志	江戸時代における経済政策
大熊 萌子	テレビドラマと経済効果
神吉 健太	親がもたらす子供への教育格差
河合 拓海	画期的な新薬は開発されるべきではないのか
藤本 知恵	インターネット時代と音楽産業
井上 由梨	オリンピックにおける経済効果—施設の商業化、今後の開催意義について—
土井 章頌	たばこの増税による日本への経済効果
篠田 美玖	広告媒体の経済効果
増原 有里	高齢化社会における高齢者雇用のあり方
古田 夏帆	国家ブランディングにおける日本の課題
小西 健太	ビールと酒税—今後展開される酒税改正のシミュレーション分析—
難波 龍仁	日本における仏教衰退の経済的背景と経済活動への弊害について
藪内 拓也	自動二輪車の普及状況と販売台数増加に向けて
大本 裕貴	今、必要なキャリア教育とは
大橋 諒	銀行の歴史と将来
橋本 実果	オリンピックにむけての宿泊施設のありかた—新しい民泊の形—
★中出 香朱美	アイドルのコンサートイベントにおける経済波及効果
田口 実奈	モチベーションと経済効果
永吉 優奈	プライダル業界の現状分析とカスタマー傾向から読み取る今後の戦略
長藤 水季	テーマパークの実態と今後

猪野 弘明ゼミⅡ

経済学士力

今や記憶のかなたかもしれないが、募集時に挙げた本ゼミの目的は「経済学（特にミクロ経済学）の理論と応用を勉強し、経済学的思考力を身につけた人材を輩出すること」であった。そこで、経済学的なものの見方を実践して卒業論文を作成できたかという独自基準で、成績とは別にゼミ全体の経済学士力を測ることにしている。結果、この学年の経済学士力は27%であった。前回募集したゼミ生の卒業時に同じ基準で計測した値は63%であったので、大幅ダウンとなってしまった。ただし、前回のケースは数年前であり、大きな制度変更があったことは付記しておくなくてはならない。前ゼミでは卒論は必修で独立した単位を与えられていたのに対し、今ゼミでは卒論は必修から外れ研究演習の単位に含まれている。上記数字には途中で卒論作成を諦めてしまった者も含めているので、制度的に卒論の扱いが軽くなれば諦める者が増える効果ももちろん現われてくるであろう。大学の間にきちんとした卒論を書けるまでに至って卒業するのはなかなか大変なのである。その中でも27%に入るまで頑張った学生には拍手を送りたい。あなた方は本当の「経済学士」である。

卒業論文一覧

横田 拓也	Play Station4の2015年までの現状及び今後
田中 亮	ビール系飲料における適切課税
★川村 龍太郎	Jリーグの経済分析～競争環境と研究開発の観点からの分析～
戸田 悠介	心理学と経済学
竹尾 拓真	経済学的にベストなお布施の集め方は

加藤 雅俊ゼミⅡ

地味に一つ一つ階段を上っていくべし！

当ゼミからの初めての卒業生たちです。1期生として2年半前に入ゼミして以降、(何名かの脱落がある中)本当に頑張ってくれたと思っています。当ゼミでは、ゼミ生自身が立てたりサーチ・クエスチョンに関して、理論に基づいた仮説設定を行い、それについてデータを集めて実証的に検証することを目標に研究活動を行ってきました。自分自身で研究トピックや問いを見つけ出し、それに対して自ら答えを出すために、まず理論的な根拠づけを行い、それを客観的な証拠をもとに検証するというプロセスはかなり地味な作業であり、かつ、忍耐を要します。小手先の就活スキルを身に付けるようなゼミ活動は楽しく、一見大変有益のように感じる一方で、そのようなスキルはすぐに価値を失います(実際、これをサポートするエビデンスも存在しています)。逆に、当ゼミで行ってきた地味な活動は、皆さんの問題解決能力の醸成には少しは貢献し、(すぐには目に見える形では役に立たないかもしれませんが)長期的に見るときっと役に立つと信じています。何事も焦らず、一つ一つ確実に、忍耐強く問題を解決していけば必ず何らかの答えが見つかると思っています。

「急がば回れ」、私の好きな諺です。私が小学生の時に当時通っていた塾の先生に教わりました。ゼミ1期生の皆さん、活躍は地味でも良いと思いますので、一つ一つ目標に向かって階段を上って行ってください。

卒業論文一覧

★原田 啓輔	製薬企業における研究開発投資と特許取得の実証分析
中川 貴春	規制緩和における競争の変化と影響の分析
陰山 明日香	財関係企業と非財関係企業の設備投資決定要因

岡田 敏裕ゼミⅡ

「しばらく休止」

今年度のゼミで最後まで残り卒論を仕上げた学生は例年と比較すると極端に少なかった。卒論の質は平均すると(といっても2名しかいないが)、例年よりも良かった。来年度は米国に留学するので、しばらくは卒論指導をすることはしない。帰国してからはゼミの方針を少し変えてみようと思っている。具体的なアイデアはまだないが、留学先で研究以外にも、学部の授業、教員と学生との関係、経済学の教育方法を見て、何かアイデアが得られればと思っている。経済学は米国が最先端で多くの研究者が世界中から研究内容を学びに留学するが、最先端の経済学を生む米国大学における、教育方法・システムに関しても学ぶべきものが多くあるのではないかなと思う。難しいとは思いますが、本学経済学部にも幾らかでも適用できればと思う。

社会に出るといろいろな困難が待ち受けていると思う。本年度のゼミ生もそんなときは、少し立ち止まって寄り道してみるのもいいかもしれない。物事を中心に長い間身を置きすぎると、身動きが取れず思考停止となり先が見え難くなることもあるが、外に出ると新たなアイデアや発展のきっかけが得られるかもしれない。

卒業論文一覧

★高橋 雅史	資産価格と産出に関する理論
坂上 謙	為替変動を及ぼす政策効果

神崎 高明ゼミⅡ

一期生のゼミ生諸君へ

日頃から「来るものは拒まず」をモットーにしているので、私のゼミを希望した人はほとんど受け入れた。その結果、当初は28名の大所帯でスタートした。ゼミ全体の研究テーマは「コミュニケーションとしての英語研究」であった。留学や個人的理由で何人かゼミに来られなくなったが、最終的に卒論を提出したのは22名であった。研究演習入門では、『新英語学概論』（英宝社）をテキストに発表してもらった。はつらつとした発表が続いたのが印象的であった。研究演習Ⅰでは、「早期英語教育」をゼミの研究テーマとした。10月には本学で開催された日本英語コミュニケーション学会のシンポジウムを聴講し、11月はインゼミで、神崎ゼミとして「早期英語教育の是非」に関する発表を行った。発表のため十分な準備をしているように思えなかったが、当日は、大学生らしい研究発表に仕上がっていた。OBによるキャリアセミナーも研究演習Ⅰで3回、Ⅱで2回行った。その時の講師へのゼミ生の質問は、日頃のゼミ生同士の質問とは違って、すどい質問が相次いだ。そう、「決めるべき時には決める」のが関学生だ。社会人になっても、この気持ちを忘れないでほしい。

経済学部で教鞭をとって35年有余が経った。まもなく本学を去る私にとっても、最初で最後の思い出深いゼミとなった。

卒業論文一覧

吉村 紗織	世界の英語教育と比較した日本の教育
中山 駿	早期英語教育の是非
井上 大輔	早期英語教育に必要なこととは？
中尾 茉里彩	英語と脳の関係について
加藤 秀輔	和製英語と和訳
尾崎 哲也	スポーツビジネスについて
清水 寿	なぜ日本人は日本語しか使えないのか
谷澤 直樹	英語の社内公用化に向けて
二葉 允也	早期英語教育の是非
石丸 和志	日本人が英語が苦手な理由
菅原 翼	アスリートの言語力—言語の必要性—
熊谷 拓朗	日本人が英語を苦手な理由
★前東 絢香	日本の言語景観
堤 明慶	早期英語教育で発生する諸問題と国の財政を見つめ直す
和田 啓吾	日本の英語教育における問題点と改善法
阿部 完	スポーツとイデオロム
松本 洋亮	英語と広告
片岡 大気	学習方法の考察—英語学習におけるリスニング—
古門 佑樹	英語ジョークの分析—アメリカン・ジョークの面白さとは—
米谷 美南	英語と日本語の比較
弓場 達也	日本の英語教育について
村上 祐太郎	日本での早期英語教育の是非

河野 正道ゼミⅡ

ゼミの総括

今年は、最終的に卒業論文を提出したのは3人であった。研究演習入門ではマイクロ経済学の理論をテキストの輪読形式で勉強した。その後、各自の興味に従って自由研究に進み、論文指導となった。西邨君の卒業論文は野球部員らしく、『プロ野球』を研究対象とし、データを使い、プロ野球の日米比較を行い、日本のプロ野球を活性化する方法を研究した。山中さんは、自分の趣味である『ファッション』をテーマに写真を使って各ジャンルの差を説明しながら、将来の業界のトレンドを研究した。藤江さんは『生命保険』を研究対象に選び、そのメカニズム、歴史、現状を研究した。卒業論文は出さなかったが、鈴木茉莉奈さんは研入・研Ⅰのレポートでは、読み応えのある論文を提出した。西邨代助君は忙しい硬式野球部員であったが最も真面目にゼミに出席し、精力的に論文作成に励んだ。よって、彼の論文を優秀論文とした。その書き出しは、「小学2年生から続けてきた野球人生が終わった。」である。皆さんは、学校での勉強はこれで終わりになるが、社会での勉強はこれから始まる。新しい人生に邁進して成功して欲しい。

卒業論文一覧

藤江 紗吏衣	生命保険と経済学
山中 三希	アパレル業界における生産者行動と消費者行動の変化
★西邨 代助	プロ野球の経済分析—数字から考える野球人気—

桑原 秀史ゼミⅡ

グローバル経済と経済政策の奥深さを求めて

私たちのゼミは、世界と日本経済および経済政策をテーマに、合同ゼミを始めとする諸目標をもって、活発に勉強し、友達同志の交流を図ることに努めた。情報メディア教育センターを利用しての統計や計量分析のデータ処理の実習は、今後、有用かつ実践的な技術となることでしょう。情報センターでの学習から始まり、欧米世界とアジア経済の動向、中国経済とマーケティング戦略、流通と産業組織の研究、公益事業（エネルギーと通信および交通インフラ）の企業戦略と競争政策、今後の社会保障のあり方、企業経営のケース・スタディなどを取り上げ、充実したゼミ生活であった。

とくに米国と中国経済、ブランド・マーケティングの市場調査をめぐる勉強は、関心の深い、実践的なものであった。合同ゼミナール、課題レポートの提出、工場見学など、多くの有意義な時間をもつことができた。なかでも、京都河原町での発表、洛中でのディベート、烏丸東洞院通りでの夏季合宿などは、思い出深いものでしょう。阿弥陀堂、奥の院など連なる堂塔の建築美が山あい映え、貞観のころからの日本の伝統の美しさのもとで、経済政策のあり方について、語ったことを思い浮かべよう。

将来、ゼミナール諸君が、大きく羽ばたくことを祈って、「高啓」の詩をおくりたい。

「春風 江上（こうじょう）の路 覚えず 君が家に到る」

卒業論文一覧

水島	香耶マリイ	小売業の現状と展望
川島	萌菜美	移動体通信市場の現状－MNOとNVNOを比較して－
水間	遼平	JR東海のマーケティング
杉山	大地	日本の決済ビジネスの未来について
横田	英育	自動運転市場におけるマーケティング戦略
徳外	梨奈	銀行業界の現状と地方銀行の今後の将来
★長谷川	蒼	中小製造業におけるマーケティング戦略
伊藤	みほ	フィンテックは金融サービスをどう変えるか
森高	千詞	中国大気汚染における政策と現状－日本への経済効果－
藤川	峻	関西の再開発と今後のインフラ計画について
吉田	恵美	文化と経済－日本の文化的資本の経済価値－
海原	康史	BOPビジネスを成功に導くには
大川	豪士	日本が誇る夢の新素材の将来性と課題
島	浩介	衛生陶器市場の現状と展望

久保 真ゼミⅡ

栄えある(?)久保ゼミ二期生の皆さんへ

基礎演習以来指導させてもらったゼミ生もいれば、一期生として入ゼミして休学後ゼミに戻ってきてくれた人もいて、付き合いは様ではありませんが、スタート時23名に対し14名のゼミ生が卒業提出までなんとか漕ぎ着けてくれたので、全体としてはまずまずというところでしょうか。とはいえ、2013年春より関学経済学部に通い始めたという点では、ほとんどのゼミ生が私と言わば「同期の桜」であり、皆さんを送り出すに当たり、胸中に多少なりとも特別な感慨が去来します（ひょっとしたら卒業できない人もいるかも、ですが）。

二年半のゼミ活動は、ディベート（@関大）だのビブリオバトル（@梅田）だの三泊四日の合宿（@京都亀岡）だの中央大学との合同ゼミ（@東京）だの、脈絡のないアクティビティが連続しましたが、皆さんついて来てくれて、私はゼミ指導を結構楽しむことができました。特に、皆さんが作り出すフワとした雰囲気は、前任校でのゼミを含め、あまり経験したことがない“ほどよい”感じで、有り難いものでした。他方で、「本を読む」という基本的な鍛錬が少し疎かになったのではないかなど、ゼミ指導上反省すべき点も多く、申し訳なく思うところです。

卒業後は、皆さんそれぞれの道を歩まれますが、軸はブレないようにしながら、フワとしたユルさも大切に、生きていって下さい。で、何であれ、人のため世のためになることをしなさい。

卒業論文一覧

★谷	真琴	公立美術館が振興していくためには
濱田	菜月	女性の社会進出と少子化問題——保育園義務教育化を行うべきか
宮本	侑佳	色彩で消費者の購買意欲をどう駆り立てるか——色は人の心をも変えてしまう
柴田	一寛	経済学と感情
井上	璃香	人工知能は社会をどのように変えるのか
近藤	真典	社会保障制度について——ベーシックインカム導入の是非
門脇	麻利	女性の社会進出と少子化——育児環境の整備で出生率は回復するのか
堀江	真央	日本の企業にマーケティングを根付かせるには、どのようなことが必要か。
栗井	泰	国内ゲーム産業の展望に対する考察——ゲーム産業発展に必要なものは何か
巽	泰之	国立大学改革プラン・文部科学大臣決定の是非
藪口	慎哉	自動車メーカー三社から見る、コンプライアンス違反の影響及び原因と、その積極的防止対策について
吉川	璃帆子	国内のインバウンド格差を解消するために——地元、滋賀県の取り組みを例に
井関	龍介	核兵器は廃絶できるのか
福岡	優女	安楽死合法化は可能か

高林 喜久生ゼミⅡ

記念すべき20期生

みなさん方は高林ゼミの記念すべき20期生にあたります。20期生は個性的豊かなお人好し(?)集団でした。「超短期集中型」の頑張りから潜在能力の高さは十分認識させてもらいました。3回生のときにインゼミやディベート遠征で見た粘りや集中力は目を見張るものでした。その中で「勉強することも面白い」ということをわかってもらえたでしょうか。

卒論のテーマは以下の通りかなりバラエティに富んでいます。「地域」や「関西」の課題に取り組んだ論文が多いこと、共同論文が多いことが今年の特徴ですね。また分野にかかわらずアンケート調査など独自のデータ分析を織り込むことを基本としました。社会に出て、「データで語る」「証拠を押さえて議論する」という姿勢は持ち続けていただきたいと思っています。

本当にこの2年半の間、いろんなことがありました。甲子園球場にみんなで応援に繰り出したことやディベートで北海道遠征したことなど、本当によい思い出です。ディベート後の解放感のなかで小樽の日和山燈台から見た広大な海の景色を私は生涯忘れないでしょう。語り出すと尽きませんが、ゼミは卒業してからの方がずっと長いのです。5年後、10年後にさらに成長した姿でお目にかかることを楽しみにしています。

卒業論文一覧

房本 晃涼	ヒップホップカルチャーの歴史から読み解くこれからの日本のダンスシーン(共同論文)
中尾 彰吾	喫煙率減少にはどうすればよいのか
藪木 千夏	讃岐うどんによりもたらされる弊害
山岡 万依	未婚化・晩婚化は続くのか—アンケート調査による若年層の所得と結婚難の関係性—総合商社の存在意義—時代と機能を照らし合わせて—
田中 湧也	容姿が社会に与える影響 (共同論文)
★徳光 秀恭	関西活性化にUSJが及ぼす影響—アンケート調査による分析— (共同論文)
名幸 龍生	若者のビール離れ—学生のビールに対する価値観— (共同論文)
長谷川 杏那	容姿が社会に与える影響 (共同論文)
宇都 健斗	若者のビール離れ—学生のビールに対する価値観— (共同論文)
出原 華子	GAPのビジネスモデルと売上げの分析—重回帰分析による要因の追究—
原井川 千夏	修学旅行による関西活性化に向けて—関西ファン、リピーターを獲得するには—
吾妻 優奈	地域再生への道—和歌山の強みを活かした活性化策の提言—
森 博昭	日本における大学スポーツの発展—「日本版NCAA」設立に向けて—
小嶋 凌	日本におけるお酒の未来
★具 本樹	関西活性化にUSJが及ぼす影響—アンケート調査による分析— (共同論文)
池田 千尋	LCCによる関西国際空港の活性化—独自アンケートによる調査—
松田 康魁	ヒップホップカルチャーの歴史から読み解くこれからの日本のダンスシーン(共同論文)

小林 伸生ゼミⅡ

ご卒業おめでとう

議論を牽引する人、真面目にコツコツ支える人、声の大きい人、盛り上げ上手な人、場を和ませる人……。小林ゼミ10期生は、それぞれが個性的な(あくが強い?)メンバーでした。2年半の間には色々なことがありました。時には議論のすれ違いや、揉めごともあったでしょう。しかしそうした状況でも、いざゼミとして目指すものが明確になった時には、個々の力を結集してくれました。コモンズがほとんど「生活の場」となるぐらい、毎日のように遅くまで集まっては議論や資料作成を重ねていましたね。阪大・同志社や商学部ゼミとの対抗ディベート、関関戦やインゼミ大会の研究発表等は、いずれも高いレベルの準備と、大会でのパフォーマンスを示してくれました。さらには11期生へのコーチングや大会サポートも、献身的に行ってくれました。濃い時間を共有してくれて、本当にありがとう。

関西に残る人、東京に出る人、地元に戻る人……。これからそれぞれの新しい世界に羽ばたきますが、どうかこの2年半の共有した時間を忘れずに、決して絶えることの無いつながりを持ち続けてください。皆さんのさらなる活躍・成長を、上ヶ原の丘の上であくせく働きながら、見守りたいと思います。

卒業論文一覧

佐藤 麻由	食料自給率と農業について
河本 悠太	日本の自動車産業とその発展要因
三原 遥	首都直下地震の経済被害と日本の適正行動について
福田 紗弓	業界再編による最適競争へ
丹野 航輔	第4次産業革命と日本のICT
岡田 博斗	四国に新幹線を～新幹線開業による波及効果分析～
中村 彩和子	卸売業の労働生産性向上策
上野 奈津美	訪日中国人観光客の旅行先選択行動から見た日本の観光業の現状と課題
早田 綾花	日本経済の影響を受ける婚姻と家族の形
生田 吉宏	地方創生の展望～兵庫県の人口動態と産業構造を中心に～
満島 里帆	特産物の地域団体商標登録による地方活性化策
井上 雄飛	日本の労働時間の実態～長時間労働が発生する要因とは
辻 優美香	ヒューマノイドロボット産業は日本の代表産業となりうるか
栗山 泰輔	中小企業(東大阪)の発展可能性について
成林 桃果	ブランドと企業
西口 健斗	京都企業と電子部品産業の定性的発展要因についての分析
金城 浩美	失業率と労働移動
萩原 聖也	放送業界の発展に伴う通信とのかかわり方について
坪川 菜奈	高等教育への投資の重要性について～費用便益分析から考える～
高木 瞭	日本の発展における外資参入の変遷とその重要性
二又 悠	介護市場の拡大可能性について～営利法人の果たす役割～
戸出 紗也香	独占的産業と市場経済の関係性について
堀 悠海	女性活躍から見る日本のあり方
宮本 夏菜子	インバウンド市場と日本が在るべき姿～インバウンド獲得のための要因分析～
北村 昂生	テーマパークの未来を考える
★吉川 諒	地方銀行の貸出金利の決定要因について
済藤 貴大	大規模小売店舗法再改正の評価
石田 智子	後発医薬品の普及に伴う患者・国・医薬品メーカーへの影響

利光 強ゼミⅡ

今年度のゼミの総括「14分の8の卒業生」

研究演習入門からすでに数名の者がゼミから離れ、研究演習Ⅱが始まった段階で14名の履修登録があった。しかし、1月に卒業論文を提出したものは8名に留まった。この8名が利光ゼミナール2016年度の卒業生である。「よく勉強した」とは言えないが、それなりに頑張ったものと思う。卒業後、社会人としてそれぞれの場において活躍してもらいたい。

卒業論文一覧

前田 憲佑	日本の住宅の価格と税制について
小路 悠貴	地方観光の可能性～ジオツーリズム・エコツーリズムから地方の活性化を図る～
近澤 征司	オリンピックの歴史と2020年東京オリンピックの経済効果について
河淵 雅也	なぜ日本のスポーツ産業は世界から取り残されているのか—NPBとMLBを例に—
★松田 博	IT投資拡大による日本の潜在成長率への影響
吉田 涼也	音楽業界のCD不況を脱却するにはどうするべきか
土田 裕介	人口減少社会における地方都市のまちづくり～成功事例から見る神戸の活性化～
瀧澤 丈太郎	国際的に見た日本音楽市場の現状

寺本 益英ゼミⅡ

ゼミの総括

ゼミでは、経済史の研究を行ってきました。歴史は単に年と出来事を結びつける暗記ものではなく、過去・現在・未来の対話を通じて、経済・社会の望ましい姿を描き、人々の幸福について考えるものです。その目標にしたがって、過去の様々な出来事から教訓を学び、経済現象を長期的視点で分析するトレーニングを行ってきました。

さて今年度は4編の卒業論文が提出されました。テーマは、鉄道史、オリンピックの経済効果、阪神大震災からの復興、少子・高齢化問題です。4論文ともユニークな視点でまとめられ、歴史分析の重要性を反映した内容でした。

今後の人生において、重要な決断を迫られるシーンがたびたび訪れます。その際に役に立つのは、歴史から学ぶ姿勢です。4年間の研鑽の成果をベースに、みなさんの持ち味を生かしたご活躍をお祈りいたします。

卒業論文一覧

★安藤 圭亮	加悦鉄道の変遷から見る地方交通
阪本 紀朗	オリンピックによる経済への真の影響とは
山口 耀	災害からの復興について
大西 亮	少子高齢化における労働力人口減少

西村 智ゼミⅡ

引き出しは増えましたか？

6期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。2年半、あっという間でしたね。それぞれ自分の研究テーマに約2年間しっかり向き合われたと思います。ゼミ開講当初、「私にこれを語らせたら長いよ」と言えるくらい研究してほしいと申しました。最初はテーマ選びに悩んでいた人もいましたが、3年次のサーベイ研究、分析作業、研究報告を経て、徐々にその道のブチ・スペシャリストになられました。そして、最後の卒論報告、皆さんの話の長いこと(笑)。時間管理に苦労しつつも嬉しく拝聴しました。ゼミでの研究が皆さんの引き出しの1つになったのではないのでしょうか。これからの人生もこうして地道な作業を繰り返して引き出しを増やしてみてください。

またお会いしましょう。淡路島や岡山でのゼミ合宿、毎月お祝いたしたメンバーの誕生日、タテのイベント(ゼミ長、企画有難う)、研究相談……懐かしく語り合える時が来るのを楽しみにしています。

卒業論文一覧

★樋口 智哉	JGSS-2012を用いた第2子の出生タイミングを規定する要因の推定 ～三代同居優遇政策は出生率向上に有意な政策であるのか～ 地域活性化へ向けての方策提言 オタクの行動経済学
生田 直久	地域活性化へ向けての方策提言
和田 健利	オタクの行動経済学
板倉 康晃	地域活性化へ向けての方策提言
平田 真悟	少子高齢化の経済研究
今仲 裕大	少子高齢化社会の消費の変化について
佐地 春樹	オタクの行動経済学
竹内 里奈	合計特殊出生率の都道府県間格差の要因について 教育格差の是正について
東 彩乃	なぜ若者は恋愛離れするようになったのか
村田 夏実	なぜ若者は恋愛離れするようになったのか
本多 奈津実	なぜ若者は恋愛離れするようになったのか
吉田 真由	女性の社会進出と少子化対策の両立
白川 美也	生活保護その他世帯の脱却率向上に向けて
橋本 直人	なぜ若者は恋愛離れするようになったのか
柴 優樹	地域活性化へ向けての方策提言
小岩 進也	なぜ若者は恋愛離れするようになったのか
大久保 有希	福井モデルとワークライフバランス
藤原 崇洋	学生へのアンケート結果から見る非正規雇用の実態調査及び現状分析

豊原 法彦ゼミⅡ

ケーススタディーのすすめ

ゼミでは2年半にわたって、いろいろなパソコンスキルの獲得に力を注ぎました。毎回の発表やそれに対するコメントを積みかさね、その1つの成果としてUSJについてインゼミ大会で発表しました。その準備では力を合わせてプロセスをマネジメントできたことは、普段は個人の活動で忙しいゼミ生全員にとって、印象深いものになったと思います。節目節目でお話ししましたように、大学で学んだことがそのまま今後の人生で当てはまることは稀ですので、チームでプロジェクトを行うときには、毎回ケーススタディーだと思って進め方を設計してください。きっと、視野が狭くなっている自分に気が付き、ブレークスルーが可能になること間違いありません。情報化がこれまで以上に加速することが考えられる今だからこそ、物事の本質を見失わず芯の通った意思決定ができ、それが揺らがない頑固さを持ち続けてもらえればと思います。

卒業論文一覧

大野 凌一郎	アメリカで最も成功したスポーツビジネスであるNFLについて コンビニの進化
★坂本 僚治	神山町の取り組み～創造的過疎からの町づくり～
楠 浩平	「アナウンスメント効果」と選挙規制の是非
福岡 拓馬	格差是正策の影響力
三宅 悠介	インターネットが抱える利便性と裏側
吉岡 翔大	ベンチャーファイナンスの歴史と役割とは
池内 宣貴	プロ野球の経済効果と発展
梶井 翔太	地域社会の現状と地方創生への取り組みについて
清水 裕也	

内から外へ

昨年から先進主要国で保護主義的な動きが高まっている。英国のEU離脱(Brexit)と米国のトランプ政権成立は、予想外の出来事と捉えた人も多い。欧州広域経済圏から自発的に離れる英国は、相手国と個別交渉を開始する道を選ぶことになりました。また、米国は隣国メキシコとの間に壁を建設するとともに、空港での入国制限も実施しています。それらはグローバル化を否定する点で、世界経済に大きなダメージを及ぼします。現実経済が経済学で学んだ市場経済とはまったく逆の方向に向かう点に疑問を感じるかもしれないですが、早晚、揺り戻しがあるはずで。

みなさんは大学の授業やクラブ・サークル活動、アルバイトや交友関係などを通して、コミュニケーション能力を磨く機会を多く持ってきました。今後は、大学という枠を超えて社会の中で生きていく人になります。これからいくつかのハードルがあり、それを越えなければ将来が拓けないこともあるでしょう。自分の殻に閉じこもってしまおうと身動きがとれなくなるので、大学時代に培ったパワーを発揮してほしいと思います。独りよがりにも陥ることなく、周りのサポートも得ながら、世界を広げる気持ちを大事にしてほしいと願っています。

卒業論文一覧

根間 大基	産学官連携によるコンパクトシティは日本に根付くか
網田 晃大	高速道路の説明書
藤井 玲奈	自動運転の未来
瀬川 真央	インドの電力不足を解消できるか
山部 浩気	3.11後のエネルギー転換について～原発と再生可能エネルギーのこれから～
村崎 恵利華	日本における電力自由化、今後の展望
篠原 涼	タクシー VS シェアリングエコノミー
種田 智美	交通インフラの現状と今後の課題～鉄道・航空が日本経済に与える影響～
藤田 伍大	航空と地域経済～空港とLCC～
岡本 和希	日本の電力政策
★山下 観月	空港民営化は経済活性化に寄与するのか～関西3空港のコンセッションと関西経済～
前原 和真	日本人はなぜ原子力発電を受け入れられないのか～日本のエネルギー事情と国民性が原子力発電に与える影響～
中西 優香	地域資源を活かして、自立した地域を目指す～日本の自治体での取り組み～
野尻 祐衣	水技術を使って世界の水不足解消～日本の誇れる海洋淡水化技術～
山本 雅子	人口減少社会と社会インフラの関係性
加納 俊	日本の鉄道事業者における持続可能な経営とは
塩田 夏未	高速道路の無料化について
菊池 勇喜	再生可能エネルギーと地域再生
宅野 圭祐	日本タクシー事業の規制緩和～ライドシェアと自動運転技術の脅威～
松浦 直輝	モバイル事業の新時代～MNO寡占の終焉か～
藪内 恵梨佳	日本でLCCが育たないのはなぜか
西原 彩音	豊かに生きることの難しさ～開発途上国との繋がり～
向 由利絵	今後の日本の交通インフラのあり方
井口 未祥	目的でホテルを選び分けるコスト
竹下 結菜	水インフラと途上国支援
八重垣 拓也	エネルギー転換と持続可能な社会 再生可能エネルギーの可能性
小西 遥	国際物流における課題と展望
古田 唯	日本の地方都市の再生に向けて
西原 由子	これからの高速道路
柚木 雄次	LCCによる新たな航空時代～日本、航空産業のさらなる発展へ～
岡田 直之	宇宙ビジネス及び宇宙旅行の現状と展望
塩村 文茄	日本のスマートグリッドの現状とこれから
奥田 拓也	日本の水ビジネス戦略～水メジャー、韓国との比較～
下笠 洋光	電気自動車の普及とそれによる電気料金への影響
北岡 佑弥	グローバル化の遺産～BREXITからみる新たな30年～
原 若菜	カナダから学ぶ移民政策と課題

最後の根岸ゼミ生たち、大空で羽ばたこう。

卒業おめでとう。老齢になり体力に自信が無く、昔のようにゼミ生たちと活発に交流できなかった。でも最後のゼミ生として、3年次に立教大学経済学部菊地進ゼミと池袋に乗り込みディベート交流を実現してくれ、長い交流の歴史を閉じることができた。また、インゼミでも堂々と研究発表をしてくれ、いい思い出になった。ゼミのスポーツ大会では教室であまり見かけなかったゼミ生も大活躍。最後まで根岸ゼミらしかった。いよいよ社会へ出て行く。今日の仕事は明日まで延びることがあるだろうけれど、とにかくからだだけは大切に。何をやるにしても体力が基本。つらいときは甲山を思い出そう。マスタリー・フォア・サービスと口ずさみながら、乗り切ろう。君たちなら乗り越えることが出来る。ゼミは29人で始まった。卒論を書かなかったゼミ生たちを最後に記す。村上茜、田邊弘明、井関洋子、寺本彩人、溝口舞、栗田和征、甲斐優、吉川拓希、白井僚介。みんなもちろん根岸ゼミ生29期生。今度は29人全員で会おう。

卒業論文一覧

木崎 駿佑	MLBとNPBの経営
伊達 愛晃	外国人を日本で雇用する事が日本の経済効果に繋がるのか
吉川 俊輔	自然災害と経済
佐藤 亮輔	仕事における人工知能(AI)と人間の棲み分けの在り方
橋本 和佳	ファッションが変わるとき
★藤井 麻未	阿倍野開発の経済効果～路面電車が走る街阿倍野～
吉岡 晃平	アメリカンフットボールW杯を日本で成功させるには
堀口 将太郎	社会主義は間違っているのか
竹本 征悟	大阪都構想は正しかったのか
光本 大輝	裏社会と経済
末永 溪太郎	大企業の企業戦略
前川 博輝	なぜ人は衝動買いしてしまうのか
岸田 賢人	特撮業界の経営戦略
増村 賢人	群馬県を活性化するための～魅力度において全国で戦う事が出来るのか～
甲斐 晋平	Apple社の発展とその要因
西原 成駿	任天堂はスマホゲーム業界にどう対抗していくのか
津田 侑里	スポーツがもたらす経済効果について
大石 裕嗣	人生のモチベーションと日本の経済・出生率は影響するの
宮原 駿	地下経済がもたらす日本の経済効果
長谷川 翔一	Jリーグが世界一になるには：クラブ経営と地域貢献

東田 啓作ゼミⅡ

6期生の2年半を振り返って

この学年のゼミの皆さんは、本当にたくさんの方がいました。2回生の時は、後にも先にも例のないくらい厳しいゼミだったと思います。毎週夜遅くまで一緒に勉強をして、最初の頃はへとへとだったと思います。でも、皆さんの「なぜそうなるのか」という探求心と理解できるまであきらめない姿勢は素晴らしいです。

3回生の時は、グループ研究に打ち込みました。調査のためにバングラデシュの山奥深くに入っていく、疲れているにもかかわらず議論を交わしたこともありました。どのグループも素晴らしい研究成果を上げることができましたが、そこに至るまでの道筋が僕にとっては有意義で、貴重な経験となりました。

4回生になっても多くの人が自分の興味関心に沿って卒論を書く計画を立て、最後まで仕上げることができました。僕の指導能力の未熟さにもかかわらず、よく頑張ってくれたと思います。僕のがままに最後までお付き合いいただいたおかげで、僕は最後まで一緒に楽しく過ごすことができました。どうもありがとうございました。

卒業論文一覧

上横手 博行	途上国における生物多様性保全	一チッタゴン丘陵地帯における適切な森林管理
佐藤 梨奈	プレミアム商品の事例研究	一濃密ギリシャヨーグルト PARTHENO (バルテノ) はなぜ成功したのか
★松瀬 静香	人はなぜ買ったものを SNS に載せるのか	一 SNS のコミュニケーション欲求が購買行動に及ぼす影響
芝地 秋優美	ファッションの色選択と天候の関係性について	
谷川 祐樹	ピカチュウはなぜ勝てないのか	一サトシへ贈る、勝てるデータ戦術
丸山 徹	地熱発電の普及	
大村 拓也	洋上風力発電	一海洋大国・日本に有力な再生可能エネルギーについて
加藤 葵	人気水族館の特徴	
佐藤 宇宙	水ビジネスにおける日本企業の市場獲得への課題	
藤井 美紅	住民主体の地域社会に向けて	一住民満足度と投票参加の関係から
藤原 彩果	教育に対するインセンティブ	一貧困の負の連鎖から抜け出す打開策
阪口 綾菜	TPP と農業	一 TPP は本当に日本の農業をダメにするのか？

林 宜嗣ゼミⅡ

卒業おめでとう。そして、心からお礼を言います。

あつという間の2年半でした。まだ幼さを残してゼミに入ってきた皆さんが、ゼミでの報告、討論会などを経て大きく成長し、卒業の日を迎えることになったのは本当に嬉しいことです。

もちろん、就職活動も含めて本当に忙しく、大変な2年半であったことと思います。とくにグループで活動することが多いゼミなので、意見の食い違いもあったことでしょう。これが共同研究の大変なところだと思います。けれども、だからこそゼミ生活は有意義だったのだと思います。共同研究やイベントを通じて培われた力は卒業後も有効なはずで、自信を持って社会に巣立ってください。人前で話をするのが苦手だった子が堂々と話ができるようになったし、張りつめた気持ちでゼミを引っ張っていた子の心に余裕が生まれました。このように、人生において精神的に最も成長する時期にゼミで時間をともに過ごすことができたのは幸せなことであり、ゼミ生に感謝したいと思います。

研究以外にも実にさまざまな思い出があります。ゼミ旅行、夏の北海道合宿、学祭、コンパ等々。あげればきりがありません。さまざまなイベントを楽しめたのも皆さんのおかげです。29期生と作ってきた多くの思い出はいつまでも僕の心に残ります。ほんとうにありがとうございます。

卒業論文一覧

峯 圭佑	配偶者控除を考える	一配偶者控除による格差助長
山本 直樹	産業構造の転換がもたらす我が国の長期停滞	
小田 直樹	モチベーションの決定要因と向上策	
山木 萌花	所得の世帯間連鎖の是正において	一公財政教育支出からみた分析
江端 俊奨	非正規雇用が消費に与える影響について	一消費を活性化させるために
森井 茉侑	高齢者の就業要因について	
村井 亮太	金融資産選択行動	
増山 優季	日本型ワーキングプア	一働く若者の貧困と将来
山口 ゆう美	生活保護の実証分析	
★平田 ありさ	飲酒運転及びひき逃げ厳罰化の分析	
長田 桂奈	エネルギーミックス 2030 からみる原子力の活用可能性	
岸田 充加子	就業継続決定要因分析	一育児をしている女性の有業率を上昇させるには
西尾 勇輝	効率的な公共投資とは	
河野 佑季	大学生の就職活動における大企業志向の要因分析	一企業別応募率を用いた決定要因分析を通して
長谷川 優美	日本の少子化問題の改善	一スウェーデンの育児休業制度から考える
西浦 真由	学力格差	一社会関係資本の学力への影響
田中 茉莉華	混合診療解禁における経済的考察	一混合診療解禁するべきか否か
上田 奈穂子	子どもの貧困問題解決に向けて	一回帰分析による都道府県別子どもの貧困の要因分析
金 宰暎	空港の経済効果	一韓国、金海空港と濟州空港の拡張建設による経済波及効果の分析

藤井 和夫ゼミⅡ

卒業おめでとう

卒業おめでとう。

2年半というのは結構長い時間で、振り返ればいろいろなことがありました。あれこれ忙しく勉強したし、合宿やイベント、ディベートでの遠征やポーランド研修旅行もありました。個々のできごとは忘れても、全体に楽しい時間が共有できたという印象が強く残っています。このつかみどころのない思い出が、ゼミの一番の価値かもしれませんね。

今、皆さんの眼前には、渦巻く激動の時代と、形の見えない仕事の世界が広がっているように見えます。でもゼミで培った自信とフレッシュな目でよく見てみたら、光あふれる楽しいような未来がそこに見えてきませんか。胸を張って新たな一歩を踏み出してください。

送り出す僕はほっとした一種の解放感とともに、しっかり握りしめていたものをふと手放した時のような気分を味わっています。そういえば何回か、時間通りゼミ教室に行ったら3,4人しかいなくて、その後ごそごそみんなが揃ってやっと寂しげな気分が抜けたのを思い出しました。また会いましょう。

卒業論文一覧

福島 壮馬	シンガポールはなぜ開発独裁を成功させたのか
拝野 晃徳	スウェーデンのソフト・パワー-日本が学ぶこと-
柴田 誠之	TPP参加により日本農業は進化するのか
寺内 郁実	インターネットビジネス-オンライン店舗の普及とライフスタイル-
山下 瞬	日本における持続可能な社会保障制度の行方-ドイツの社会保障改革から見る日本への示唆-
狩野 聡汰	介護ビジネスの未来-これからの地方都市の介護のあり方-
西村 裕太郎	リニア中央新幹線は必要か-東京大阪間67分の経済効果-
服部 知倫	オリンピックの経済効果
宮崎 梨穂	生命保険業界の未来-時代の流れから見る商品と会社の移り変わり-
中野 志保	変わりゆく日本のコミュニティ-高齢化社会における地域コミュニティの再生-
濱田 理子	女性政策を取り巻く日本の社会的背景-貧困化する女性たち-
山本 将輝	プライベートブランドとナショナルブランドのこれから
★清水 雅広	経済大国ドイツの秘密と彼らのスマートな働き方-21世紀のEUから学ぶ日本の行方-

藤井 英次ゼミⅡ

教育の質、保証します

卒業論文を完成させて巣立っていくゼミ生達は粒ぞろいだ。最後まで音を上げることなく、もがきながら卒業研究に取り組み、自分なりの結論に辿り着いた。経済学を学ぶ中で最も身につけて欲しかった力をしっかりと身につけて遅しくなった今、彼女・彼は眩しく輝いて見える。安易な逃げ道がいくらでもある中、ここに辿り着くのは決して容易ではなかっただろう。

孤独で骨の折れる知的探求のプロセスに謙虚に、そして粘り強く挑み続けた彼女・彼に心から敬意を表したい。それが私なりの教育の質の保証だ。

文科省のお達しによって拵えた、美辞を連ねただけのディプロマポリシーなど誰にとっても何の役にも立ちはない。そもそも一学年に数百人もいる学生に画一的に教育の質の保証をつけよというのは、真の教育や知性というものからかけ離れた所にいる人間の発想であろう。卒業生は生産ラインで作られざる工業製品ではない。教育に金型などない。大学は料金を払って座っていれば自分の望みどおりに仕上げられる美容室のようなところでもない。そこで起こった学びの何たるかについては、巣立っていくゼミ生一人一人の今後の人生が何十年というタイムスパンでそっと静かに物語ってくるであろう。

卒業ゼミ生の皆さん、いよいよ人生本番です。依って立つべき土台を自分自身で築いたのですから、荒海に出て困難に遭遇しようとも決して臆することなかれ。その土台の上にそれぞれがどんな人生を展開していくのか、これからもずっと楽しみにしています。

卒業、心よりおめでとう。

卒業論文一覧

小林 大輝	マイナス金利はなぜ日本の景気改善に結びつかないのか?
★フロレンス エルリン	女性の雇用は日本に少子化をもたらしているのか
前田 彩音	なぜ日本のサービス産業の生産性は低いと言われるのか?

本郷 亮ゼミⅡ

あなたがたは地の塩である

三期生のみんな、卒業おめでとう！わがゼミを順調に発展させてくれて、本当にありがとう。皆さんの2年半の通算ディベート成績7勝2敗は、歴代最高。なかなかできるものじゃありません。普段はだらけていても（笑）、やるときはやってくれる学年でした。この偉業は当分破られないでしょう。また個人能力に秀でたメンバーが多かったのも、三期生の大きな特徴でした。

「あなたがたは地の塩である」（マタイ伝5章）。門出にあたり、この聖句を皆さんに贈ります。4月からそれぞれの持ち場で、どうか関学卒業生として Masterly for Service の「いい（塩）味を出して」ください。そのために、今後も自分を鍛え続け、周りから愛され信頼される人物になってください。仕事でも家庭でも、結局は Masterly for Service に尽きると思います。本当に「偉い人」とは、周りから愛され信頼される者のことであり、たとえ目立たなくてもそういう人が社会を支えている、と私は信じます。

最後のゼミ連絡です。2017年度の研究演習Ⅲ（本郷ゼミ同窓会「マスフォの会」）を忘れず履修するようにしてください。研Ⅲで元気に再会できるのを楽しみにしています。では、みんな、それぞれの旅路に出発しましょう。新しい世界、新しい仲間、新しい自分自身が待っていますよ。若きは力。心配無用！

卒業論文一覧

近藤 諒	治安維持法と経済思想家
廣田 高嶺	自動運転技術の発展と影響の考察
久保 幸輔	東芝の不適正会計問題
杉田 博基	「プリンス」はなぜ破産したのか
和田 恵	デンマークに学ぶ幸福論
阿川 竜昇	日本でクレジットカード決済比率を伸ばすには
生田 雄誠	京都本社の企業はなぜ本社を移転しないのか
★藤下 宗	発展段階論的タックスヘイブン検討
浦嶋 航太	平成28年度「岸和田だんじり祭り」の経済効果—観光客・運営側の両方の視点から算出—
高橋 保那美	情報伝達の発展と経済発展の関連性
吉田 嵐是	トランプ政権による日本のTPP参加の影響
出射 佐知子	日本の出版業界と海外の将来
南崎 遥	高齢化社会における漢方薬市場の拡大

藤原 憲二ゼミⅡ

卒業おめでとうございます

2人で始まったゼミで最後に残ったのは研究演習Ⅰから参加した1人になった。私のマンツーマンの指導によく耐えたと思う。自信をもって今後活躍してほしい。

卒業論文一覧

★林 暁宇 中国が東アジア経済統合に与える影響

松枝 法道ゼミⅡ

どうぞお幸せに。

ゼミに入られてからというもの試行錯誤の連続で、みなさんをいろいろと振り回してしまいました。そんな状態にもかかわらず、ゼミ内報告や卒業論文の執筆を通じて、みなさんが着実に成長していく姿を見ることができたことをとてもうれしく思います。

みなさんは、これからも歳を重ねるごとに成長していくことができることと確信しています。いよいよ本格的に独り立ちをすることとなる今後においては、いろいろな出会いや経験を通じ、自分の人生観を含め、あらゆることに対する考え方が変化していくことでしょう。あまり焦ることもありませんが、そういう考え方の変化も自己の成長の一部であると認識して、積極的に自分を変えようと努めることが必要な時期も人生にはあると思います。何はともあれ、みなさん一人一人がこれからの人生のそれぞれの段階において、その段階なりの幸せを見つけてられることを陰ながら願っております。

卒業論文一覧

元田 秀人	コンビニ業界の研究
濱田 康平	2016年問題による若手バンド問題
★古林 宏章	双方向性市場とゲーム理論
木村 怜	電子書籍の値段はなぜ下がらないか
松本 萌	宝くじをもっと世の中に
松村 龍	牛丼業界の在り方
前田 皓晟	サッカー移籍市場の変遷と予測
江部 知也	日本にパチンコ店はあるべきか
佐藤 優樹	欧州サッカー市場において代理人制度変更は効果的な影響をもたらすか

前田 高志ゼミⅡ

敬意と感謝をこめて

ゼミ7期生は人口減少・少子高齢社会における地域活性化政策のあり方を研究テーマとして「地方自治体の若年女性人口増加策」、「財政制約下の公共施設（公立図書館）運営のありかた」、「大規模災害被災地における地域復興ファイナンス」、「千里ニュータウンの再生」、「大都市近郊住宅都市（川西市）の活性化」の5つの政策研究プロジェクトを行いました。研究成果は、大学生観光まちづくりコンテスト（2015年9月）、兵庫自治学会研究発表大会（2015年10月）、名古屋市立大学・関西大学・同志社大学との財政4ゼミ合同研究報告会（2015年12月）、政策研究プロジェクト報告会（2016年2月）で発表し、2016年3月には研究プロジェクト報告書を発行しています。そのほかにも兵庫県観光まちづくり研究会への参加やゼミ議員インターンシップ、ゼミ合宿、ヒアリング調査など実にさまざまな活動も行われました。7期生のこうした真摯で積極的な姿勢と取組みは高く評価されるべきものであり、指導教員にとっては大きな誇りです。優れた能力と誠実な人柄をもったゼミ生全員が今後は実社会で大いに活躍・貢献され、周囲から信頼される存在となることを確信しています。

素晴らしい皆さんとともに過ごせたことを感謝します。7期生のこれからの人生の幸多く、心安らかなることを。

卒業論文一覧

西川 敬子	阿倍野再開発事業について
飯塚 絢子	中小企業と地域金融機関のそれぞれの役割～事業承継問題と資金調達問題を例に～
町田 優	住民にとっての商店街へのニーズとは
梅木 恵里子	日本の自動車産業が今後も国際競争力を保っていくためには
三角 友惟	ゆるキャラと地域活性化の可能性
唐口 あずさ	税理士の責任と税理士制度
藤原 弘喜	資金調達に活用されるクラウドファンディングの可能性と役割
猪川 裕香	被災地の中小企業支援～クラウドファンディングの可能性～
宇都宮 優大	ビール業界の海外進出の是非と生き残りをかけた今後の展望
佐向 健太	神戸市の再開発の課題と今後の政策—三宮駅周辺地区の再開発は果たしてうまくいくか—
柴原 司	公立図書館における民間活力導入のあり方～指定管理者制度活用の事例を通して～
中村 如月	芸術祭による地域活性化に対する考察
高岡 佐衣	仕事と育児の両立に必要なこと
亀田 幸加子	消費税の益税・損税問題について
山本 紗耶加	日本における情報サービス産業の現状と動向
坂本 綾美	地域ブランドによる住宅都市活性化の可能性と課題
井上 領太	中小企業における事業譲渡の優位性
土井 七海	日本のおもてなし
★佐藤 翼	学校給食民間委託の効果と課題
村山 知奈美	少子化対策が抱える課題と今後
岩間 あすな	公立図書館における民間活力導入のあり方～指定管理者制度活用の事例を通して～
芦田 尚大	数学を学ぶ意味とは～数学の教員にできること～
中村 由佳	地域における高齢者への支援のあり方
宮本 和樹	人口減少下の東京一極集中

森田 由利子ゼミⅡ

直島の浜辺で過ごした幸せな時間

4月から復学する3人を含めて20人のゼミ生、皆それぞれが途中で投げ出すことなく、自分の道を決め、一步前へと進んで行ってくれることを嬉しく思っています。4月以降、新しい環境の中で物事が上手く行かなくても当たり前、想定内です。ゼミで繰り返し話してきたように、周りの厳しい状況が動かぬ時は、落ち込むことなく前向きに対処法を考え、確実に一つひとつ自分自身が動くことで乗り切るよう、心掛けてください。

最後のゼミでも言いましたが、この2年半、私にとってプライベートも仕事においても一番辛く苦しい時期でした。しかし、同時に、とても恵まれた充実した日々でもありました。ゼミを担当したお陰で、無心で笑うことも多く、自分だけのためには取って置けなかったようなことにも挑戦する力を持ちました。とても感謝しています。

京セラ、サントリー美術館、三菱一号館美術館などでのフィールドワーク、ユニークな個人研究のプレゼン、クリスマスパーティやサプライズ企画など、楽しい思い出はいろいろありますが、一番印象に残っているのは、直島の浜辺で皆と過ごした時間です。直島到着後の冷たい雨で、「このフィールドワーク、どうなることか…」と思っていただけに、晴れ間が見えた夕刻の浜辺での穏やかな情景と皆の笑顔が忘れられません。

“The best is yet to be” — 人生最良の経験や時間は、過去ではなく、これからの未来にあります。ゼミの皆さんには、そう信じ、また、そうあるべく、臆せず前へ進んで行ってもらいたいと願います。

卒業論文一覧

★橋本 英美	ウィリアム・モリスのデザインと日本の文様
藤澤 一浩	仕事の未来—コンピューターにクリエイティブは代替されないのか
板谷 亜沙	エシカル社会の実現可能性—ファッションから考える—
三浦 尚子	企業によるスポーツ支援の在り方
横澤 拓海	組織のパフォーマンスを最大限引き出すリーダーシップとは
浪切 雄一郎	瀬戸内国際芸術祭と地域発展
吉田 真実	カラーマーケティングにおける心理効果
安井 寛朗	ジーンズの歴史から読み解くインディゴの美しさ
楠元 俊平	私立大学の広告戦略
森高 美怜	オランダの豊かな暮らし—世界で一番幸せな子どもたちから考える—
岸本 将和	企業のCSRとCSV
田中 美樹	ファストファッションとデザインマネジメントからみるユニクロの経営戦略
向井 綱彦	最高のフォント
水原 梨奈	紙の本はなくなるのか
桂 美月	美術館による地域活性化
吉田 実吹	イケア—これまでの成長と日本における展望
北川 寛之	「若者の〇〇離れ」—「若者のテレビ離れ」を一例に—

松本 有一ゼミⅡ

また会う日まで

2017年3月末をもって定年退職する私にとって、このゼミは担当する最後のゼミです。1978年4月に本学に助手として就任し、専任講師を経て、助教授になった1982年に最初の研究演習を担当。この当時は研究演習Ⅰ（3年）・Ⅱ（4年）が必修でした。教室での学習以外の活動はゼミ生の自主性にまかせていたので、相互交流が活発だった年があったり、ほとんど何も行事がなかったときがあったりしましたが、それなりに楽しくできたのではなかったかと思っています。

最後のゼミで卒業論文を提出したのは下記一覧の6名ですが、研究演習入門時に在籍した他の人たちの氏名を思い出のため記しておきます。黒田杏奈（語学留学のため離脱）、安久悠、水野称壮人、加味明祥、赤星雄祐、福浦航平、津波古拓也、山口智之、浅利大樹、上田叡護、佐藤加奈子、松尾卓治、そして本田直史。

卒業論文を提出した6名、ご苦勞様でした。最後の秋学期のゼミで、全員が揃ったときが1回も無かったのは残念でした。これからの人生、困難なことが多々あるかと思いますが、楽しく過ごしてください。また会う日まで。

卒業論文一覧

細川 光紀	様々な観点から見た恋愛学
多田 裕紀子	これからの日本の魅せ方とは
水野 智博	環境問題に対する人々の意思決定
佐田 波津季	SNSによる経済効果—インスタグラムの普及と展望
★小崎 恵吾	東日本大震災と雇用問題
竹林 佑記	男女の恋愛実態と恋愛にかかる費用について

安岡 匡也ゼミⅡ

ご卒業おめでとうございます

ご卒業おめでとうございます。関西学院大学に来てはや丸4年、卒業生を送り出すのは2回目となりました。今回の卒業生は2期生。ようやく、ゼミの特色なども固まってきたかと思えます。

4年生になって、卒業論文の作成を進めていく中で、どんなゼミ生が脱落し、最終的には卒業論文の提出者は11名となりました。当初の人数の約半分です。卒論を書く原動力はどこにあったのでしょうか。それは2つあると思います。1つは卒論を書かないと単位がなくて留年してしまうというものです。そしてもう1つはゼミで学んだ証として卒業論文を書きたいというものです。今年度は後者が多かったように思います。やる気のあるゼミ生が最後には残った感じがします。2年生の時と比べると4年生はかなり仲良くなりました。毎年そんな感じな気がします。やはり飲み会の回数と仲の良さは比例するのでしょうか。今年度は初めてのゼミ旅行（淡路島）を行いました。それも仲の良さに貢献したのでしょうか。ごみの浮いた海を私だけ泳いだ記憶は忘れることはないでしょう。

また、気軽に研究室のドアを叩いて下さい。それではごきげんよう、さようなら。

卒業論文一覧

有馬 尚成	全額税方式への移行による基礎年金制度の抜本的改革
西上 力也	新たな発想一生活みたくなる社会を作るー
大槻 豪樹	若年層の貧困問題の現状と課題
★三輪 卓哉	家庭内教育と経済学ーしつけが子どもに与える影響とはー
杉立 篤哉	ワーキングプアの現状と政策提言
園尾 竜弥	所得控除、税額控除とふるさと納税ー所得控除における低所得者・高所得者間の格差是正ー
高山 昌	非貴金属市場の現状と展開
藤本 愛	年金は払った額より多くもらえるのかー見せかけの数字とはー
大西 弘己	現代社会のボランティアの抱える問題
砂田 敬祐	待機児童の問題と原因
吉田 伸也	人的資本に注目した長期失業者の問題整理と今後の対策

懸賞論文の選考について

経済学部では、1985年から研究演習Ⅰ・Ⅱの在籍者を対象として、懸賞論文を募集している。本年度は、個人執筆論文部門に2本、共同執筆論文部門に2本の応募があった。応募点数は例年に比べると少ないが、いずれも意欲的に取り組まれた論文であった。選考委員会の審査と教授会の議を経て以下の論文に賞を与えることになった。

経済学部懸賞論文受賞者と論文名

< 個人執筆論文部門 >

該当なし

< 共同執筆論文部門 >

川瀬陽子・河津研人・矢迫千夏（西村智ゼミ）

「貧困の連鎖はいかにして強化されたか ～ Bivariate Probit を用いた貧困の連鎖経路の分析～」

河野貴大・上北悠太・千葉彩菜・今井ちひろ（東田啓作ゼミ）

「低レベル放射性廃棄物に対する、住民の支払意思額」

< 講評 >

学部学生の論文として申し分のない水準に達しているという理由から、共同執筆の2論文が受賞した。

1つめの論文「貧困の連鎖はいかにして強化されたか」は、日本において雇用の劣化（不安定雇用の増加）が問題になっていることを受けて、貧困の連鎖が以前と比べてより深刻になっているのかどうか、深刻であるならば貧困の連鎖が特にどのような経路をたどって起きているのかを明らかにしようとした実証研究である。具体的には、東京大学社会科学研究所から借り受けた個票データを用いて、雇用劣化が進んだ後に就職した若年世代とそれ以前に就職した壮年世代とに分けて、15歳時点の暮らしぶりが現在の生活水準に与える影響を比較している。確率分析の結果、若年世代において貧困の連鎖が強化されたこと、また、若年層では子ども期の貧困が低学歴を通じて現在の貧困につながっているのに対して、壮年層では低学歴を介していないことが明らかにされた。近年の雇用劣化のしわ寄せが低学歴層へきていることが示唆されたことから、貧困の連鎖防止対策として教育格差だけでなく雇用問題も重要であると結論づけている。本研究は、貧困の連鎖についての知識の深さ、問題意識の明確さ、また貧困の連鎖に雇用劣化が関係しているという新たな知見が高く評価された。

2つ目の論文「低レベル放射性廃棄物に対する、住民の支払意思額」は、原子力発電所の廃炉が進む中で放射性廃棄物の処分地が問題となってきたことを受けて、人々の放射性廃棄物に対する価値を金額として表すことを試みた研究である。具体的には、関西圏、福井県、青森県の3地域において仮想的市場評価法による独自のアンケート調査を行い、そのデータを分析している。サバイバル分析の結果、関西の人々の支払意思額は、処分施設の設置場所が居住地に近いほど高くなることが明らかになった。また、支払意思額を被説明変数にとった重回帰分析の結果からも居住地に近いほど支払意思額が高くなることが確認された。その一方で、利己的な人ほど居住地から遠いほど支払額が高くなるという興味深い結果も導き出している。後者は、NIMBY (Not in my back yard) 仮説をサポートする結果である。本研究は、アンケートの設計から実施、分析に至るまで多くのエネルギーと思考作業を費やしたであろうことが推察される非常に意欲的な研究である。また、プレアンケートを実施するなどの丁寧さ、用いられた分析手法の適切さ、前述の興味深い結果が高く評価された。

（懸賞論文選考委員会委員長 西村 智）



①教員の仕事は、①研究、②教育、③その他の学内業務、の3つに大別される。学生には見えにくいと思うが、けっこう忙しい。体力勝負だ。①は読書・論文・学会。②は講義・ゼミ。③は色々あるが、私は現在、経済学部の副学部長、体育会体操部の部長、宗教活動委員会の教育研究部長なので、幾多の会議・役割・悩み事がある。①～③のすべてに全力投球すると燃え尽きて昇天しかねないので、個々の仕事の（主観的）限界生産物価値がどれも均一化するよう労働を配分する。わが愛する母校関西学院大学よ、お願いだからモウシゴトフヤサナイデネ…（本郷）

②香港の大学にいたとき、マクロ経済学を履修する学生が700人くらいいて、その700人の取りまとめ役をやっていた。香港では大学での成績の優劣が就職に直結するので、AやA+をとるのにみんな必死だった。A以上とれるのは全体の20%くらいなのだが、

成績発表の後もAをくれと泣きついてくる学生もかなりいた。関学のトップ層は香港の学生に負けなくらい勉強をする。香港の一般的な学生よりもいいところは、彼らは純粋に知的好奇心から勉強をしているということだ。関学生には一生学んでいくための技術を我々から盗んでもらいたいとおもう。（T.K）

③今年も『エコノフォーラム21』第23号が発行されました。つまり23年間の長きにわって、みなさん方の多くが生まれる前から発行され続けてきたことになります。私事で恐縮なのですが、私は今から21年前の1996年に関学に着任しました。そのときに、前任校と比べて学部の活性化に熱心な教職員の方が多くことや、学生諸君もそれに積極的に応えていることに驚いたことを思い出します。その協働作業の具体的な成果物がすでに発行されていた当誌でした。その後も形や編集方針を変えながら、そのよき伝統が今も続いていることをあらためて感じます。今号の特集及び座談会のテーマは「変革期にある大学教育」ですが、その改革へのヒントが少なからず当誌の協働編集作業そのものにあるような気がしています。（高林）

④今号で座談会なるものに初めて参加し、立場の異なる人が集まって話を進めることの楽しさや難しさを実感しました。ご参集くださったみなさまにあらためて感謝いたします。年度末が近づきせかせかするかたわら、日本庭園の片隅でぼちぼちと咲く梅にふと目を遣ると、そこへうぐいすが・・・と思いきや、鶯色の鳥はうぐいすではなく、めじろなのですね。思い込みの危うさに気付かされる今日このごろです。今号も、経済学部のことをよく知る人、これから知る人にとって、新しい発見をお届けできる紙面になっていることを願っています。（長谷川）

⑤所用につき編集会議に出席できなかったため、ほとんどの仕事を他の先生や事務の方によって頂き申し訳なく思っている。しかし特集テーマに関して寄稿したことで少しは貢献できたとも思う。（藤原）

⑥エコノフォーラムが遂に完成だ。エコゼミ委員会の努力の賜物である。本誌にある通り、エコゼミ委員会には「新入生への履修相談」「オープンキャンパスでの高校生への経済学部のPR」「スポーツ大会・関関戦・インゼミ大会の運営」そして「エコノフォーラム編集」といった学部活性化を目的とした役割が与えられている。なかでもエコノフォーラムは発行時期以外に決まりはなく、自分たちのスタイルを通すことができる。反面、自由度が高すぎて戸惑う様子もうかがえた。実に現代っ子らしい。その集大成をみなさんに楽しんでもらえたらと思う。（土田）

⑦約1年前の2016年3月に関西学院大学商学部を卒業し、4月から入職、経済学部事務室にて勤めています。仕事が始まると、学生時代には知り得なかった「カウンターの向こう側」の苦労が見えるようになった一方で、学部独自の魅力にも沢山気付けるようになりました。これからも、本誌「エコノフォーラム21」をはじめ、関学経済学部にある魅力をどんどん発信していければと思っています。最後に、エコノフォーラム編集委員の皆様やエコゼミ委員会の学生さん、本誌作成にあたりご協力くださった皆様に厚く感謝申し上げます。（永濱）

Publisher

田中 敦（経済学部長）

Chief Editor

本郷 亮

Editors

國枝 卓真
高林 喜久生
長谷川 哲子
藤原 憲二

Managing Editor/Staff

植田 幸利（経済学部事務長）
土田 系
永濱 晶乃

発行／関西学院大学経済学部
〒662-8501
西宮市上ヶ原一番町 1-155
TEL. 0798-54-6204
©2017 All rights reserved.